June 20th 1908.

Report of the Sericultural Association of Japan.

No 194

大日本蠶絲會報

第百九拾四號要目

▲重要記事▼

▲皇后陛下東京蠶業講習所行啓　農學博士　外山龜太郎
▲蠶絲業の繁盛法　原蠶種類一定の眞義を說き併せて　京都蠶業講習所技手　服部柳太郎
▲佛國蠶絲業奬勵法の結果及其改正案に就て　生絲檢査所技師　今西直次郎
▲天の時、地の利、人の和　吉池慶正
▲テグスを生產する蟲に就きて　農學士　明石弘
▲桑のシントメバヘに就きて　丹羽四郎
▲鳥取島根兩縣下の蠶絲業に就きて　生絲檢査所技手　德田寶也
▲藤本蠶業合名會社　石田孫太郎
▲萬國公認生絲練減率を定むべし　清水鮮哉
▲製絲業の前途に就て　農學士　足立元太郎
▲十二指腸蟲と蛔蟲　醫學士　貴家學而
▲秋蠶の話　蠶業講習所技師　土屋泰
▲關東省に於ける普通農民の飼育せる夏蠶の成蹟　住吉正喜
▲明治蠶界の光勢　松永伍作君▼

TOKYO.
The Association;
No. 18 Nishikicho, Satchome, Kanda, Japan.

皇后陛下令旨

此の蠶業講習所は今日初めて一覽せしに養蠶製絲のことにつきあらゆる方法を研究講習し其卒業生を各府縣に送りて傳習せしむるとのこと總て能く整ひ居る樣に見受け喜はしきことなり申すまてもなきことなから生絲は御國產中其最も重なるものなれは一同勉勵益斯業の發達を計らむことを望む

右の趣農商務大臣より皆々へ申傳へありたし

特許中原式生繭乾燥器

○本器は室内に大なる旋風器と繭を乘せたる棚枠と相待て回轉し外氣を送入しつゝ濕氣を充分排除する爲め溫度低き割合に乾燥時間早き事

○本器は全國各府縣に五百ヶ所以上其の臺數三千餘にして目下春繭乾燥の期節にて各所に於て使用致居候間當業者諸君本器が生繭乾燥器の大王と稱せらるゝ要點其の最寄に於て實地使用御一覽ありたし

特許中原式煮繭器 伊國 佛國 特許出願

○煮繭器は工女銘々煮鍋を使用する製絲所に於ては御不用に思召やも難斗本器は繭壹升つゝ一區となし貳斗を一時に大釜(瀨戸引徑參尺九寸深壹尺)へ入れると同時に湯中に於て回轉し大略十分間の後一時に湯中より押上げる器械にして煮方の均一と繭の湯中に於て揉めざる爲め屑物を減し絲量は繭壹升より約三分以上多く燃料は三分の一以上減じ工女百人繰の製絲所に於ては壹ヶ年に器械代金の外に何百圓の大利益あり

○本器の實地試驗は極寒春挽及生繭共各々好果にして百匁の生繭を四拾五匁に乾燥せし物も八拾匁の物も類節同一に少く解舒良好なる事

○工女銘々煮取より繭壹升に付き繰絲時間貳拾分間以上早き事

定價金貳千五百圓也一回に貳斗煮繭器　壹臺

但し年賦支拂の御相談可致候

用廣品繭入器はアルムニーム製

東京市本所區横石前門町參拾四番地三ツ目橋通

特許中原式生繭乾燥器

特許中原式煮繭器

製作販賣所

電話浪花貳二貳六番電器(ナカ)

第百九十四號　大日本蠶絲會報

目次

重要記事……一―四

○皇后陛下東京蠶業講習所行啓

論叢……一―一二

○蠶絲業の繁盛法　農學博士　外山龜太郎

○蠶種類一定の算義を說き併せて原蠶種製造所を論ず　服部柳太郎

○佛國蠶絲業奬勵法の結果及其改正案に就て　今西直次郎

演壇……一一―一四

○天の時、地の利、人の和　吉池慶正

拾芳……一五―二五

○タダスを生產する蟲に就て　農學士　明石弘

○桑のシントメバヘに就きて　丹羽四郎

○島取島根兩縣下の蠶絲業　德田寶也

○藤本蠶業合名會社　石田孫太郎

○萬國公認生絲綫減率を定むべし　清水鱗哉

叩門……二六―三〇

○製絲業の前途に就て　農學士　星立元太郎

家庭……三〇―三二

○十二指腸蟲と蠶蟲　醫學士　貴家學而

心影……三二―三三

○秋蠶の話　明治蠶界の元勳松永伍作君　講英……三四―三六

遠響……三六―三八

○關東州に於ける普通農民の飼育せし夏蠶の成蹟　土屋泰

○上海に於ける新繭と蠶況　住吉正喜

問答……三八―四一

○魯桑の蒸桑給與に就ての質問竝答○微粒子に就ての質問竝答○風穴夏秋蠶に就ての質問竝答　粁資……四一―四三

○一千九百六年度世界重要產絲國產絲額統計

說林……四三―四五

○蠶絲國の報德主義（石山重孝）○四化蠶に就て（前川淺吉）

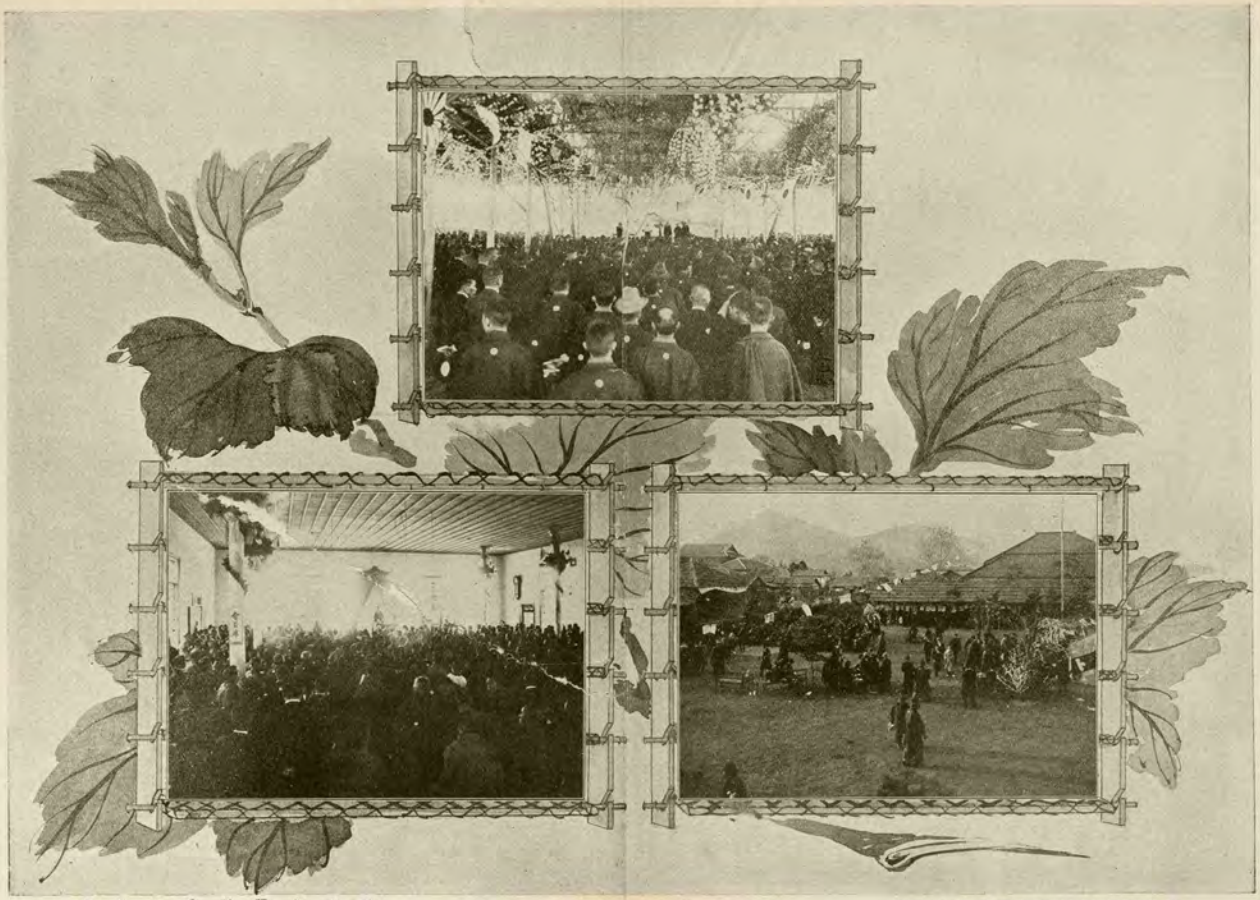
絲況……四五―五一

○橫濱市場○里昂市場○絹育市場○上海市場○廣東市場

時報……五一―六四

●會務錄事＝本會事務所の移轉＝支會職員の囑託＝地方委員囑託＝評議員會＝吉池理事の出張＝各支會品評會開設＝蠶業雜報＝生絲取引所事務の沿革＝上野蠶絲專門學校＝鹿島縣の生絲檢査會＝東西蠶業取引所の沿革＝實業大會決議＝本年の巻蠶＝東京蠶業講習所の蠶況＝伊豆松崎の新繭と絲價＝無錫新繭市場＝杭州新繭市場＝製絲資金＝生絲檢査所月報●讀者文藝●蠶糞消毒●新刊紹介●寄贈書目●人恶雷報

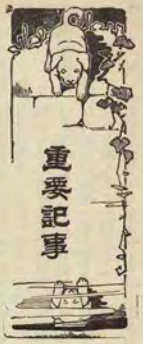
安達二十日福島市に於て開催せられたる本會第三回總會の光景
Vue de la 3ème Assemblée générale de notre Association qui a eu lieu à *Fukushima* le 20 Avril dernier.



大業蠶話講會の光景
Grands discours relatifs à la sériciculture.

松平會頭令旨代讀の光景
Lecture de l'ordre du prince impérial par le Directeur Général Monsieur Matsudaira.

花屋敷に於ける大園遊會の光景
Vue de *garden party* au jardin fleuriste.



皇后陛下東京蠶業講習所行啓

六月三日我仁愛仁慈なる　皇后陛下は我國產業の主腦たる蠶業御奬勵の御思召を以て西ヶ原なる東京蠶業講習所へ行啓遊されたり、申すも畏けれど我皇室が須臾も殖產業に御軫念あらせられ、文武の外、特に農工の振興に對し、世に有り難き御思召を示させ給へるは、吾人の常に感泣し奉る所なり。

偖て當日の模樣を記し奉らんに　皇后陛下は、其日午後一時を以て宮城御出門、高倉典侍御陪乘、香川皇后太夫、山內皇后主事、園權典侍、吉田權掌侍、生源寺權命婦、田澤侍醫以下の供奉員を隨へさせられ、坂下門和田倉門を經、御順路を妙義坂に取り、同二時御安着あらせられたり。

東京蠶業講習所にては本多所長以下職員生徒一同、絕大の光榮ある玉輦を迎へ奉るに、萬一の遺漏なからんを期し諸般の準備に怠なく、先づ正門及玄關に大國旗を交叉し、要所々々に黑段々の幔幕を廻らし、門內に淸砂を敷き、各總下に白布を敷き詰め、事務室階上に　陛下の御謙穩に副へ奉るべく極めて質素なる便殿を設けられたるが、裝飾館る淸楚を極めたり、斯くて定刻に至るや正門より玄關に至る右側に女生徒左側に男生徒整列し、玄關昇降口の左右には農商務省各局長各高等官、農事試驗場長及高等官幷に蠶業講習所職員整列し、玄關內には松岡農相、金子子爵、松平本會々頭、本多所長及御先着の渡邊主事以下、各々序を正しうして御着輦を待ち上げたり、寔や初夏の天地氣淑しく風和かにして滿目の萬象醉らずして絕大の喜樂を竭めたり、既にして遙に錦旗の翻々たるを望めば、馬蹄蹄々塵輕く飛んで玉車轔轔として、門內に進み御車寄に至りて止れり乃ち本多所長恐懼して御先導申上げ奉れば、御機嫌麗しく扈はしく階上の便殿に入御あらせられ、茲に松岡農相、金子子爵、松平男爵、久米農商務次官、大久保磯部、中松の各局長、古在農事試驗場長、本多、石渡、紫藤の三所長以下各高等官に拜謁を賜りたり、右終りて本多所長は松岡農相の手を經て概覽及御巡覽順序書を奉呈せり。

斯くて陛下には御少憩の後本多所長の御先導に依り直ちに各供奉員を隨ひさせられ、先づ養蠶部を、養蠶室、給桑實習、貯桑室、擇桑實習、除沙實習、剉桑實習、養蠶試驗の實況、蠶小屋蠶室、上簇實習、簇製作實習の順序にて仔細に御覽あらせられ、次に製絲部に成らせられ、先づ繭一粒繰試驗につき御熱心に御問き取り遊され、夫れより殺蛹、乾繭、選繭等の實習を御覽の上、各種器械製絲法に就き、本邦製絲と伊佛等の外國製絲法との比較の說明を御傾聽あらせられ、更に其綿、抽

絲、玉絲等の製造實習を御覽あらせられ、夫れより提れ多くも氣鑵の音暄雷を極め熱氣立てる氣鑵室を御通過の上第二工場に入御、女生徒六十名の實習に就き特に精細なる御注意を拂はせられ本多所長より申上ぐる詳細の御説明に對し陛下よりも亦屢々御下問を賜ひ、更に階上なる仕上場に入らせ賜ひ、生絲の檢査より荷造に至る迄、逐一御覽の上夏に農事試驗場標本室に入らせられ、本多所長に代りて、古在場長の御説明を聞し召されたり、御少憩の爲、便殿に成らせらるる御道すがら玉歩を桑樹丸木園に移させ給ひ、新緑滴らんとする桑樹に御目を注がせられたるが、一度便殿に御休憩後再び陳列室に入らせられ、實物又は模型を以て示したる桑樹の種類及桑樹病害蟲、蠶兒及繭の種類、蠶體内部の構造、病蠶、蟻蛆の經過、天蠶、柞蠶其他養蠶及製絲講習生の製作及び生産品各種生絲の標本、製絲用水試驗成蹟、世界各國生絲生産比較地圖、織物一反の前身、外國産生絲標本、野蠶絲「チグス」人造組絲及「ジルケット」標本、蠶種一枚より獲たる生産物各種、織物と其の原料等を順次御覽あらせられたるが、右の内最も多くの興味を以て、御眼を止めさせ給ひしは、織物一反の前身、蠶種一枚より獲たる生産物の統計的標本及世界の産絲額を模型圖中に木標の高さを以て表はせるものにして、織物一反の前身は五千頭の蠶兒が二十七貫の桑葉を食みて一斗五升の繭を營み、之を製して百五十匁の生絲となり、遂に百二十匁の縮緬一反となり、更に加工裁縫の工程を經て、一枚の衣服となるの順序を示し、蠶種一枚より獲たる生産物は先づ其蠶兒の頭數を示し、次に其蠶兒が結繭せる顆數、其繭より製出せる生絲其綿等を數學的に示したるものにして、斯業研究者に取りては、最も趣味の多きを感ずるものなり　陛下には是等の標本を非常なる御熱心を以て逐次御觀覽あらせられ、最も御滿足の御氣色にて本多所長に

順序能く説明して能く判りたり

との有り難き御説を賜ひたりと云ふ　陛下には此の如き長時間の御觀覽に毫も御疲勞の御樣子も拜し奉らず、終始御熱心に御覽遊され、御先導の先に進み參らせひとするに拘らず陛下には一々精細なる御注意を拂はせられたるは、隨行せる人々の最も恐悦し奉りたる所なりしと洩れ承るのみにても大御心の有り難さを感泣せずんばあらざるなり、殊に御觀覽後本多所長を御便殿に召させられ

詳しく説明を得てよく解したり

さぞ大儀なられん

との有難き御言葉をさへ賜りたるやに承りては感以て恐懼措く所を知らざりしと。

又特に松岡農相を召させられ、邪頭に揚げたる優渥なる令旨を賜りたるを以て、農相には恐悦恐懼爾後益々奮勵聖旨に背かざらん事を奉答せられたりと云ふ、而して　陛下には各高等官一同幷に講習生に對し御菓子料若干を御下賜あらせられ、本多所長よりは松岡農相の手を經て、同所製造の生絲

二括、角眞綯一包、天蠶、柞蠶及各國産繭絲各一函を奉呈せられたるが、一々御嘉納あらせられたり。

斯くて　陛下には同五時過ぐる頃還啓仰出され、玉顔麗はしく御發輦遊されたり。

惟ふに本邦の蠶絲業は遠く皇祖の宏謨に起り、列聖の紹述に依りて進み、殊に維新以後今上皇后南陛下の震慮の忝き厚く斯業を御奬勵あらせられたるにより、益々發達振興の跡を示し民業治く今や國家經濟の消長一に斯業の隆替に依て支配せられんとするものあるに至れり、然れども斯業の現狀は氣候風土其他自然的障害に對し、尚講究を要するもの尠からず、且つ各國産業の發達及内外經濟の進歩に伴ひ、製品の改善統一其他斯業の經營上益々鼓吹奬勵を要するものあり、此の時に當り畏くも　皇后陛下が蠶業講習所へ行啓遊されて國民の躋すべき所の一大名譽たるに止らず、實に本邦蠶絲業界が絶大の名譽とする所にして吾人當業者は勿論一般國民の百世の後昆に傳へて以て忘るべからざるの盛事たり。

實なり農相が直ちに令旨を奉載して當日集れる高等官一同を別室に召集して其旨を傳へられたるに　陛下が斯く迄國産に大御心を注がせ給ふかと何れも曾感涙に咽びたることや。

然れば當業者たる者生絲貿易市場の不況に失望落膽し繭價の安きを見て養蠶を忌り、絲價の低廉によりて、製絲の業を廢するが如きは、思慮ある國民の取るべき事にあらずと爲し、宜しく宏遠無窮の聖旨を奉體し斯業の振作に發奮勉勵以て震慮のあるところに違背し奉らざらんことを期すべきなり。

陛下が西ヶ原に行啓あらせられたる顛末の概要は上述の如くにして、松岡農相には感激措く所を知らず、直ちに一書を本會に寄せらる其文左の如し。

皇后陛下深く蠶業に軫念したまひ六月三日親しく東京蠶業講習所に臨ませられ優渥なる令旨をたまふ本官洵に恐懼感激の至りに堪へず　惟ふに我國蠶桑業は遠く　皇祖の宏謨に起り　列聖の紹述に進み明治維新の後に至り　今上皇后兩陛下宸慮宏遠厚く斯業を奬勵したまへるに因り益々大に發達し民衆治く　聖澤に浴し今や經濟の消長亦斯業に繫れり然るに蠶桑の業たる氣候風土の差及自然の障害等に對し研究を要するもの尚ほ尠からず且各國産業の發達及ひ内外經濟の共通に伴ひ製品の精良齊一其他斯業經營上改善を要するもの亦甚た多し而して絹織物の業に至ては之を諸外國に比するに尚ほ遜色あるを免れず製織を精巧にし輸出を振作するは喫緊の事項に屬す蠶

絲業の指導啓廸を目的とせる大日本蠶絲會に於ても宏達なる　懿旨を奉體し今後益斯業の改善發達に努力せんことを望む

明治四十一年六月四日

農商務大臣　松　岡　康　毅

大日本蠶絲會會頭男爵　松平正直殿

而して松平會頭には不取敢左の書面を農相に提出せられたり。

皇后陛下深く蠶業に軫念したまひ六月三日親しく東京蠶業講習所に臨御養蠶製絲の實況を御覽あらせられ特に優渥なる　令旨を賜はりたるは洵に國民の恐懼感激に堪へさる所なり閣下茲に　陛下の令旨を奉體し本會に訓示せらる本會微力敢て當らすと雖も會員と共に鋭意奮勵斯業の改善發達を圖り以て　令旨のある所を遵奉し訓示の旨趣を貫徹せんことを期す右謹て御請仕候也

明治四十一年六月十一日

大日本蠶絲會會頭男爵　松平正直

農商務大臣　松岡康毅殿

斯くて本會は斯業の一大發展策に就き、目下之が講究中なれば遠からず具體的方案を會員諸氏の前に提供するの日あるべきを信ず、諸氏庶幾ば其意を諒し左提右携相與に共に所が目的の貫徹に努められんことを

大日本蠶絲會報　第百九拾四號

論叢

蠶絲業の繁盛法

學士會員
農學博士　外山龜太郎

本編は去四月二十日福島市に於て開會したる本會第三回總會に於て講演せられたるものなり

私は御當處で皆樣に御目に懸りまする機會は、只今迄再々ございました。又此度も斯樣な名譽ある會に出まして、諸君に御逢をしまする機會を得たのは、非常に光榮と致しまする次第であります。殊に只今は會頭閣下、並に金子閣下の大層有益なる御話がございましたので、此學問に身を委ねて居りまする私、としては誠に感激致しました。それで只今迄お話をしやうと思つて居つた演題は、妙な演題でありましたが、改訂致しました、実然只今考へ付いた事で、殊に閣下の御話の結果、私も此機會に是非諸君に一二御話を申上げて見たいと思ふやうな事になりましたので、隨つて御話が、或は能く順序を立て御話することが出來ないと思ひまする、大分御聽悪からうと思ひまするから、それも御承知を願ひまする。それからもう一つは具體的に細かく申上げまするとなかなかちよつとの時間にお話し盡すと云ふことは出來ませぬので、殊に又出來得ませぬのみならず、今日此處へ御集まりの諸君は、もう只今迄の間に、種々の會や或は種々の人に依りまして、耳は無論の事、目も無論のこと、又口も無論のこと、有ゆる方面に於きまして非常に有益な、又おいしい物を召上つて居りまする。此上にどんな御馳走を迄上げやうと致した所で、もう其御馳走は却て胃を害するのみであつて若し御歸宅の後になつて下痢でもなさるやうなことがあると是は又宜しくない、私も心配でありますから、下痢を致しませぬやうな工合にどつさりした所で、手短に御話を伺つて置く積りであります。

デ此蠶業界の昨年以來の非常な恐慌に遭つて、近頃妙な模樣になつて、最初の勢の好かつたに引換へて、今日では種々な反對の現象が見えまするので、それが爲に會頭閣下始め有名な方々の御心配まで、さなければならぬやうになつて來た。併し是は先刻會員諸氏の御話のやうに、私も非常に喜んで居るのです。今日の此打擊は、實はもつと劇しく打擊

を殺らずした方が、此日本の蠶業の發達の爲には利益になりますので、寧ろ打撃のやうなかつたのを遺憾とする一人でございます。さう言ふと如何にも無情で、人が損失をしてゐるのを喜ぶ、怪しからぬ奴であると思召されるかも知れませぬが、可愛い兒に旅をさせるとの譬で、實は少しも旅をさせて見たくて堪らぬ處へ是が來たのですから、誠に喜ばしくて、どうかもう一度旅をさせて見たいと云ふやうな氣が出ますのも、親の情として已を得ぬのです（拍手喝采）

日本の蠶業といふものは、私が今日云ふ事を申上げるかと云ふと、全體の針を執つて來て居るのです。是は私が諸處にちよい〳〵申上げましたけれども、順調の時に於ては何人も耳を藉す者がないので、斯う云ふ時に始めて氣が付いて、御分りになる機會があるだらうと思ひますのは、蠶業の總ての經營を蠶の本性によりて爲すことです、つまり蠶の本性といふものを能く考へて蠶業をせねばなりませぬ、それで今日の養蠶と云ふものを見せますると、所謂學術的だとか申すのでございますが、それが進歩致しますに從つて、蠶業界と云ふものは總ての事業が次第々々にハイカラになりまして、所謂「飼育法の復古」なる養蠶といふものに段々傾いて參りまして、何の事柄に於きましても、手數を掛けて事にすれば、それで良い物が出來ましたが、それで良い物が出來ましたから、つまり蠶は飼育法を好く致しますれば、それで處度好い結果が得らるゝ故に飼育法に全力を盡さなければならぬと云ふやうな事からして、此飼育法其他いろ〳〵外から世話を致しまして、此飼育法に於きまして、膨大なる費澤になつて居ります。デ此生產費が增しまして、其の費澤になつた結果は如何と云ふと、生產費が增すばかりであります。デ此生產費が增しますると結果は、養蠶を致しまして、得られない、所謂學術的といふ養蠶を致しますと得られない、是は語弱も能く御案内の事であるだらうと思ふ。けれどもそれなら廢めさうなものであるが、是ほど大第に發達して行くのを見ると、さう云ふ考へは間違つて居ると云ふ御考の方があるかも知れませぬがさうでないのです、他は今日有利の農業者の事業がないが爲に、已を得ず斯う云ふ處に流れ込んで來て居りまする。マア現に著しい事實では、ありますけれども、蠶の草に移つて行く處があります。決して是が絶對有利の農家の事業といふ譯おやない、唯任方がなく、情ない譯であります。みてありますれば宜しうございますが、今日本の養蠶と云ふものの實際の組織は農家の副業ばかりではないであります。殊に此東北地方の御當縣などでありますとか、或は長野へ行くとか、群馬縣玉などと云ふ地方に行きますると、大部分に於きまして專業として居る者が頗るあるのです。否な日本の經濟上より言ふとは副業所ではなく純然たる專業となつて仕舞ふ。デ調子の好い時だけは其調子に乘つて無闇に騒いで居ますけれども、一つそれが引掛ると泣言を言ふと云ふやうな結果に陥ります。それ故に將來に於きましては、蠶業の基礎を固くして健全なる發達を爲させるには生產費

稱して差支へありません故に損を致しても爲ると云ふ譯には行かぬです。所が今日の樣な有樣では其た心細い、特に海外の市場の狀態により直に致命傷を負ふようては實ほど心細い。

それで凡ての生物は、勿論、蠶などでも種々な試驗を致しました結果で、又私一人で試驗をしたのではない、世界の有名な、吾々の先輩の學者もした結果であります。それ故に、或程度までは良くなる、例へば作物でありますと、肥料を良くしまして、或程度までは良くなる、例へば作物であれば、栽培を良くしますと云へば、其作物の有つて居る本當の性質の中で一番良い所まで發達する。それで其本人の全力を盡しまして、それ以上は行くのです。其本人の性質がなる處までの働きは、其本性は外界の力によりて云ふものは極めて見せますると、其本性に振動して居る、そして其振動の幅は其性質によりて各一定して居る者です、それを唯肥料とか、飼育法とか云ふだけのものであります。故に肥料の力と飼育法の力とが言ふものは其力の範圍の定まつたもので、其種類となつて定つて居るものゝ本性の內で、唯加減をするに過ぎない、此方に寄せるとか、彼方に寄せるとか、それだけに過ぎませぬので、其以上は如何に人間の力を加へても、唯へ飼育法といふ力ではどうにも成らぬ。所がそれが誤解でありまして、飼育法を良く致しますればちよつと良くなるのが見えるです、だから此調子で行つたら、切つて手數を掛けたならば思切つた立派な結果が得らるゝだらう、得らるゝだらうと、所謂これが「だらう」で進んで行つた所が、案外其だらう〳〵なる者が三太郎であつたのは誠至極です。所で此三太郎の結果はどうなるかと云ふと、資本が大層掛かる、所謂生產費が掛ります。掛つても昨年のやうに調子の好い時であると至極妙であります。それ故に將來に於きましては、蠶業の基礎を固くして健全なる發達を爲させるには生產費

奥羽六縣合運動共進會市島福一會長光の品出蠶生所造育同共社會賞台賞

を減じて、それで善良なるものを得る策を講じまするより外には良い途はなからうと私は思ふてす。生産費を出來得るだけ減ずる方法を考へるけれども、生産費を減じた爲に産出を減ずると云ふやうな事があつては、是はなか〳〵宜しくない事でありまするが、産出の上に更に影響を及ぼさずに生産費を減ずると云ふことが、是が有ゆる方面の實業の上での目的で、獨逸の商賣は大層好い結果を東洋に於て得まする、又伊太利あたりの製絲家などが、産額が一時頻に增して居りまする時などでも、人夫とか其他の勞力、或は生産費は少しも增さずに、次第々々に減じて行くと云ふやうな、さう云ふやうな主義を執つて行きたいのです。現に日本のものであると惡口ばかり申すやうで殘念でありますけれども、此製絲といふ事などでも、廣東の多化蠶の繭を御覽になつた方は御案內でありましようけれども、日本の製絲家に廣東の多化蠶を手に掛けて見いと云つたら、何人も彼を手に掛ける人はない出來ぬと既に言つてしまつて居る、こんな繭で到底算盤に合ふものでないと云ふ。然るに支那人は此繭で相當の利益を得て外國輸出の絲を造て居る、出來る生絲は勿論廉いです。併し原料も亦一年に六回も出來て、惡い物でありますから廉くありますけれども、兎に角あれを立派に歐羅巴の市場まで擔ぎ出して、それで日本の絲などの間へ入つて、あんな下等な物が定つて出て行くのを見まするど、まだ日本の製絲の上などに於ても、技術上改良すべき要點が澤山あるだらうと思ふ。

それて、私等は此養蠶の側に立つて居る者てあつて、製絲といふ事に就ては深い事は申上げられませぬが、在來蠶絲業界の總ての責任はイツも養蠶家の方へ惡つて來るてす。今日迄の事柄を見て居りまするど、絲が惡い、揃はないと云ふと是は原料たる所の日本の繭が惡い、種類が惡い、種屋が惡いと云ふやうな工合に逆に戻つて來て其責任を負はされる人間と云ふものは、第一に蠶を養ふ人に下つて來て、蠶を養ふ人から逆戾りして種を拵へる人に下つて來て、是が怪しからぬ奴であるから、之を取ちめいと云ふやうな事で、何も彼もそれ種、やれ種て、種の上に下つて來る。隨分製種と云ふものに就ては重い責任を負はされて、それが爲に種を一定せんければならぬとか云ふて、外國の例を頻に擔ぎ出す。所が外國の本元であると云ふ處が、實に種類の上に於ても、絲の上に於ても、雜駁なるものがある。現に吾々が伊太利あたりの有名なる物を取寄せて見ても、絲と云ふものは決して揃つちや居らぬ、却て日本の方が自惚か知らぬが宜い位に思はれるそれて絲と云ふもの丶本元に於ては、改良と云ふことに技術上の力も盡さずに、皆養蠶の方に下つて來る。それは宜しい養蠶と云ふものは原料を造る人であるから、其責任を負ひますのは已を得ぬから致しまするが、それと共にどう云ふ方法に此蠶業といふもの丶本元に手を着けて行かなければなるまいかと云ふやうな事が、在來少しも極つて居らない。ア、製種家が隨分やかましい責任を負はされて居る、けれども製種家は唯責任を負はさる丶だけて、具體的の保護と云ふものを更に得て居らぬ。先づ第一に是は責めなければならぬのは、蠶を養ふ其の種を買ふ人方の輕薄なることてある。是は先日も蠶絲會の會報の上を見ますると、西ケ原の蠶業講習所の方でも、誰やらさう云ふ意見を頻に述べてござつた、私共も非常に御同感である。つまり此蠶種を買ふ人の氣風が誠に輕薄である、良いも惡いも全く判定が付かぬ、唯ちよつと一年の模樣によつていかぬと云ふと、直樣翌年はもう變つてしまふちよつと外で評判の好い物があると直ぐ其れに移る。故に種屋といふ方の側が、殆ど標準の付かぬやうな、何事も今年宜いかと思ふと翌年は他に行つてしまふと云ふ、まアお客の輕薄なる根性、良いも惡いも分らぬと云ふやうな輕薄なる根性て製種家の方へ向つて行く、是が先づ一つの缺點です。それから又僅かの價を吝む、是も其蠶業講習所の方て言ふて居つた人がある、僅かの價を吝んて困る。私もそれは尤もの事と思つて聽いて居つた、漸やく五十錢か三十錢の價の高下ても種代は吝む、所が忙しい時、人足を三人や四人餘分に使つて損をするなどゝ云ふことは何人も心得て居らぬ。さう云ふ本末を誤つた考へて、所謂蠶を養ふ人が無茶苦茶にやつて居る是が一つの困ります點。それからもう一つ困ります點は、學術の上に於きましても、又法律の上に於きましても、蠶種營業者に對して責任を負はするのみで、其の保護といふものが何もない。蠶病豫防法なるものは、少なからざる費用も使つて、嚴しい注意はしてありますけれども、其注意なるものが何てあるかと云ふと、小言を言ふだけのあれは規則、其他の方面に於ては何もない規則になつて居ります。是は法律てすから已を得ませぬが、兎に角さう云ふ事になつて居る、それてどう云ふ方法にしたらどう云ふ問題は、殆ど只今まて無いのです、無くてさうして唯やかましく〳〵と、恰度氣のむづかしい親父さんが伜を叱るやうな工合て、それて養蠶の根源たる所の蠶種と云ふもの丶向ふ所が少しも定つて居らない。是が誠に日本の蠶業の、事ある時に情ないことの一つてある、全部てはありませぬが其中の一つの厄介なる問題である。それて之をどうか御同樣に攻究したい。

話が大分橫には入つたが、つまり方角違ひの騷ぎのみをやつて居る、ソレて本文に立ち歸り、經濟的の蠶業を爲さんにはどうすれば宜しいか、近年世界の狀態を見るに各國とも動植物と云ふものは唯肥料や或は栽培亦飼育の方法て、それて完全無缺に何處までも人間の思ふやうに行くものでないと云ふことが分つた結果、經濟的に仕事を致しまするのには其性質の本源をどうかして改良して行かなければならぬ、本元を變へると云ふことの考が出て來ました。それは米國あたりは、所謂突飛な無闇に先へ進むと云ふ考を持つて居るから、既に其を實現さした者がある。米國で四五年前のことてありますけれどもが、馬鈴薯の或一種類を改良した爲に、其種類の性質をまるで在來のものから變へてしまつた。さうすると肥料とか或は栽培とか、其他の狀態は元の儘にして置いて、其種類を改良したと云ふ一つでもつて、一個年に其土地の間に二千萬弗位の增收が出來た、つまり四千萬圓の違が出て來る、二千萬弗の差が出たと云ふのは米國の農務省の報告などにも出て居る、之を肥料てそれだけ動かさうとすると是はなか〳〵容易なものてない、二千萬弗の增收を舉げるが爲には、若し肥料や栽培法てしまするならば、少くとも千萬弗

や千五百萬弗の資本を注入しなければならない。所が本性を改良した爲めに無資本で此の如き大きい結果を得て居る。それから瑞典の「スツロフ」といふ處の試驗場に於ても同一の仕事が起つて居る、是は最初民業で起したものが、結果の宜しい爲に今日では政府で保護して、政府の事業にすると云ふやうな工合になつた、やはり種類を改良する、所謂本性を改良すると云ふことに取掛つた。先の方をやかましく言ふよりも寧しろ本源をやかましく言はなければならぬと云ふやうな事になつた。デ是等は日本の蠶業家が、昔度私共が在來やかましく言ふて居つたことを、今日御氣付きになる宜い機會だらうと思ふ、生產費の上に於て手數が掛らず、手輕に好結果が得らるゝと云ふやうな事に蠶業が相成れば、幾ら世の中の價が下つた所で更に驚かぬ、驚かぬのみならず、縱令世の中の相場が高くあつても日本では慶く供給して立派に收益のあると云ふやうな事に相成れば、下れば下る程雷用の鎗が擴がりますから、是は一方で益々販賣先を擴げます宜い一の方法である、是は蠶業觀して巧く行く方法ではない。

蠶種類一定の眞義を說き併せて原蠶種製造所を論ず

農商務省技師 服部柳太郎

蠶種類一定論は十數年以前より討究されたる問題なるが、今日に及びて猶且つ反駁の聲を絕たず、而して其反對の中には間々有力なる論說あり、これを大別すれば蠶種類の一定に對して全然不必要を主張するものと、又蠶種類の一定の目的はこれを達し難しと說くものとの二とす、思ふに種類一定に對する目的を明にせざれば、隨ひて其の所を異にし、遂に議を生ずる因となる、然かのみならず豫期の目的正當なりと雖も遂行の手段拙ければ其結果は常軌を逸し弊害を出非難攻擊の因たるべし、蠶種一定の眞目的及最良の手段如何之れ本論の骨子なり。

說者の言の如く蠶種一定の目的は繭形を一定するにありて生絲の製品を統一せんと欲せず、必ず先づ繭形の一定を期せざるべからずとし、之が必要に應じて縣立原蠶種製造所なるものの生出したりとせば、我蠶又大に異議なき能はざるなり。

我蠶は法らに抽象的議論を開はさんとするよりも、實際の敎ふる所經驗の示す所に趨きて着實なる研究を爲さんと欲す、繭形一定に對する我輩の疑問なるものは以下列記するが如く、實際上の事實にして言說を以て拒ぐべからざるものに屬す。

一、繭形の一定せる地方の生絲必ずしも商品として荷口一定せず

横濱市場に於て要望する生絲の一定は其實絲價の一定と言はんよりも寧ろ荷口の一定則ち外觀上に於ける製品の一定にして、故に繰糸の方法、揚返糸の方法、其他東、裝の方法等は同一ならざるを得ること、今繭質區々なりと雖も商品として一定の荷口を揃へ得ること、福島縣の折返糸は信州南部、二州の產糸は信州甲州、若くは信州甲州の繰糸は優等品に非ず、故に其の餘地甚だ多きは夙に其眼識者の認むる所なれど商品として例なり、一頭馬の商標をひれば生絲を吟味せずして買賣せらるゝことは恰も官營遠藤草若くは鄕切手の受授に異なるを問はず、絕對に限引せらるゝ如き、官營遠藤草若くは鄕切手の受授に異なるを問はず、絕對に限引せらるゝ如き、官營遠藤草若くは鄕切手の受授に異ならず、京都生絲市場に於ても折返糸に限り、品物に一箱だも、綱ずしも、幾多改善を施しするを常例とす、敢て益し得べき餘地なきに係らず依然として舊慣を墨守しつゝあるは畢竟上の如き特色あるによる、上州三社の產繰糸の如き赤各個の繰糸せるものなれど、之を一堂に集めて荷口を揃ふるが爲に好評積々として常に器械製糸を凌駕せり。

而して福島縣の蠶種を一瞥すれば種類名の多き繭形の區々なる恐くは全國に冠たるべし、又郡馬縣の如きは全國に冠たるべし、又郡馬縣の如きは蠶の名稱稍統一せりと雖も、未だ原蠶の一定に至らざるは、若し夫れ信濱市場に優益を得ることあり、而して繭形の一定せる點に至りては南北兩繭質區に屬し、勝入したるに過ぎず、故に繭形の一定に熱中せる雲伯二州に於ける生絲を見るに大規模製糸所を除きては多くは

甲二州の製糸業に至りては南北兩繭質區に渡り全國に亞ぐ生絲の荷口の一定せる點に至りては常に横濱市場に優益を得ることあり、而して繭形の一定に熱中せる雲伯二州に於ける生絲を見るに大規模製糸所を除きては多くは

蠶種類一定の眞義を說き併せて原蠶種製造所を論ず

內地用に供せられ、偶々横濱に出荷するも其價格の下位にあるは每年の常例なり玆に於て繭形の一定は絲質を一定し得べき唯一の策ならざるを了解するに至らん。

二、縣立原蠶種製造所が蠶業の後進地にのみ行はれ先進地に行はれざること

縣立原蠶種製造所は一地方鎖國主義なり、他縣の蠶種を排斥するにあらざれば、繭形一定の目的を達し難し、則ち後進地方にのみ行はるゝ所以なり、この排他主義は製種家に對しては有力なる援護にして共同的自衞には屈强なる明案なりと雖も一般製絲家に對しては何等の利益なし、縣內の製絲原料は必ず縣內に於て求めざるべからざるが如きは、雲伯二州の如き交通不便の地を除きては一般に求むべからず、各縣の繭は各縣の製絲家に共用さるゝこと今日の常態なればなり、即ち原蠶種製造所にして單に繭形の一定を唯一の目的として存在するものあらば無用の施設なりと謂つべし。

三、繭形一定せる地方に於ける繭は其品質比較的優良ならず

共進會品評會に於て縣立原蠶種製造所の設けある地方の繭が比較的成績不良なるは爭ふべからざる事實なり、之に對し共進會の審査規則を批難せんとするものあれども甚だ誤れり、凡そ一定は平均なり、平均は多數なり「シルレル」曰く多數とは何ぞや無意味なり、物の解せるは常に少數者にありたりと、平均の智惠なる輿論を嘲りたる箴言なり、今移して以て繭形の一定を誡め得べし、輿論は愚なりと雖も然かも有力なり、繭形の一定は則ち如何繭質劣ることあるも猶且つ一定の必要を告ぐることあらば、萬難を排して猛進せざるべからずと雖も何等其必要を認めざるにあらずや。

（未定）

佛國蠶絲業奬勵法の結果及其の改正案に就て

學藝委員 生絲檢查所技師　今西直次郎

從來佛國の蠶絲業は絹絲物業と共に發達して、世界に冠たるの盛況を呈し、我が安政元年前には其の收繭高年々二千六百萬基に達して居つたが、其の後蠶病が流行して以來漸次產額は減じて明治八年の頃には一千萬基同二十五年に至りては八百萬基に下つた、而して一方絲價は明治元年には一基に就き、百七十法の高價を呈して居つたが、同二十五年には四十二法迄に下落を告けた、加之東洋の生絲が安値にて續々輸入を增加したるを以て、佛國蠶絲業者は終に其の競爭に壓倒せられて、非常なる困難の位置に陷りたる事は世人の能く知る所である、予は恰も其の困難の最も甚だしき當時に同國の製絲場に在つて直接其の實況を目擊したが、實に慘憺たる有樣であつた、之れが第一挽回策として養蠶家及製絲家は頻りに生絲輸入稅附加論を主張し、屢々國會の大問題となつたが明治十九年乃至二十五年間佛國生絲の產額は一ヶ年平均六十六萬六千基に過ぎざるに、同國機業の進步は著しく發達して之れに需要せらるゝ外國產生絲は三百七十二萬六千基で、佛國產の殆んど六倍を要するが如き狀態にて從つて其の利害を異にする關係より生絲輸入稅案は機業家より大なる反對を受け百十六に對する三百十五の最多數を以て遂に否決せられたる事は今尙ほ記憶に存する所である、故に此れに代りて同時に蠶絲業奬勵法なるものが設けられ、丁度本年迄にて十六ヶ年間繼續施行され來つたが、其の結果は餘り良好でない樣である、左に外報に揭載せられあつた數字を轉載すれば。

第一期製絲奬勵成蹟

年度	工場數	繰絲釜數	機絲高	製絲奬勵金額
千八百九十二年	二三八	八、一五四	七二六、八四一基	三、六六九、八八〇法
千八百九十三年	二五二	一〇、八五二	七三六、六九二	三、九六七、七一九
千八百九十四年	二七〇	一一、二二六	六八三、四二一	四、一〇〇、〇〇〇
千八百九十五年	二七一	一一、五四八	七九六、六五三	四、五一八、九〇八
千八百九十六年	二八〇	一一、四八三	八三五、六一一	四、五九五、七二二
千八百九十七年	二六八	一一、四四一	八四五、三八九	四、七二三、四三七
平均	二六三	一〇、七八四	七七〇、七六七	四、二二九、二九三

第二期製絲奬勵成蹟

年度	工場數	繰絲釜數	機絲高	製絲奬勵金額
千八百九十八年	二七三	一一、八二三	八一八、九三三	四、四七三、四八三
千八百九十九年	二五七	一一、三三七	七六九、九二七	三、九九四、九三六
千九百年	二五七	一一、四六四	七七二、五一六	四、〇三〇、三四五
千九百一年	二四七	一一、二五〇	七六二、一一七	四、一六七、九五一
千九百二年	二四六	一一、三〇五	八〇九、一〇九	四、二八九、四二三
千九百三年	二四〇	一一、二四〇	七五六、四二〇	四、〇二三、一一五
千九百四年	二二九	一〇、九二三	七三三、五九〇	三、八三七、二三一
千九百五年	二二六	一〇、八八六	七九八、四一五	四、〇六四、五一八
千九百六年	二二六	一〇、〇五六	七八二、七九六	四、一一三、一二三
平均	二四四	一一、一四二	七七三、七八八	四、一一〇、四六三
總平均	二五二	一〇、九九九	七七二、五六二	四、一五七、九九五

第一期製絲生產實價及損益（生絲一基ニ付キ）

年度	繭相場	原料代	生產費	生絲原價	同上賣上代	奬勵金	屑物代	實收得金額	損	益
千八百九十二年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
千八百九十三年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—
千八百九十四年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
千八百九十五年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
千八百九十六年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
千八百九十七年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
平均	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

第二期製絲生產實價及損益

年度	繭相場	原料代	生產費	生絲原價	同上賣上代	奬勵金	屑物代	實收得金額	損	益
千八百九十八年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—
千八百九十九年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—

千九百年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
千九百一年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
千九百二年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—
千九百三年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—
千九百四年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
千九百五年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
千九百六年	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	—	[illegible]
平均	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
總平均	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

昨四十年度は本年五月に至りて決算するものであるから全然結了したる平均數ではないが、奨勵の結果は大要此の表に依て推知する事が出來る、抑も佛國政府は製絲家に對し、年年百五十萬圓以上の奨勵金を下附せられてあつたが、製絲高は奨勵前に比して餘り増加して居らぬ、又損益表に依れば其の奨勵金あるが故に生絲一基に就て平均二法餘の利益である、元來奨勵法の目的たる生絲產額は依然として増殖の形跡なく只だ舊態を持續して居るのみである、又養蠶家に對しても年々製絲家同様の奨勵金を支給されてあるが、是れ又收繭の増加を呈して居らぬ、此れが爲に是れ迄議會に於て豫算を討議するに當り屢々紛議を生じた事があつたが、辛ふじて本年度迄繼續せられて來た、本年は此の奨勵法の滿期であるから當春來當業者は勿論政府に於ても、此の繼續問題に就て種々協議して居る様である、最近の報導に依れば佛國蠶業地の有力なる上下兩議員は向ふ二十ケ年間養蠶家に對しては生繭一基に就き六十仙乃至七十五仙を支給し製絲家に對しては其の使役者の給料を內國繭消費者には給料の百分の八十三、三二外國繭消費者には同じく給料の百分の七十四、三〇を補給し、而して工女の日給は最低二法の範圍に止むべき改正案を議會に提出したが未だ一般輿論は之れに賛成を表する迄に至らぬ様であると、然るに外報に依りて同國の事情を考察するに四十年度の決算も未だ終了せず、養蠶製絲の時期にも切迫し、且つ前述の改正案は內容頗る混雜し居るを以て、假令本年議會に於て可決せらるゝも事實本年度より之れを實施する事難きを以て、來年五月頃迄は從前の奨勵法が繼續せらるゝ事になるであらう、想ふに佛國「セウェーフ」地方は天然的蠶業の適地であつて、其產出する生絲は絲質優美強靭にして常に伊國の「ピエモン」產と相匹敵し精巧なる高價の絹絲物に對しては經絲として必ず此れに依らざるべからざるが如く、當業者間に賞用せられつゝあれば此れが衰勢を挽回せんとする事に就ては同國官民の一致して孜々汲々其の方策を講ずるは誠に當然の事である、要するに從前の奨勵法は辛ふじて蠶業家の命脈を維持するに過ぎなかつた、而して又今回の改正案が可決するや否やは暫く未定であるが、今や同國民一般の輿論は斯業の發展を圖らんとするに一致し、諸種の方面より熱心に蠶絲業振興策を講究せられて居るから、今後施行せられんとする奨勵法は大に面目を改める事ならんと思ふ已に伊國に於ても昨今頻りに蠶絲業增進に關する方策を講究せられつゝあれば我が當業者は宜しく蝸牛角上の爭鬩を止め互に合同一致基礎を鞏固にし學理に鑑み實地に應用して永遠の利益を劃し世界の大勢に先んずるの覺悟が最も必要であると思ふ。

●伊國生絲業者の決議

伊太利美蘭にては同國生絲業者救濟の目的を以て、國務大臣ルザッチー氏を始め貴衆兩院の有志者其他營業者數十名會合種々協議の末、茲に國家的生產組合を設立する事を議決せしが、同國有力家の主唱に係るものなれば、多分成立するに至るべく、若成立の上は本邦生絲業者も多大の利益を受くる事となるべきにより、其成否は最も注意すべきものなるが、該決議の內容は左の如しと。

一生絲組合は伊國生絲業者の利益を幇助する爲め產業組合の形式と國家の幇助とを以て法律に依り設定す
一國家は年額百萬利を向ふ二十ケ年間に支出すべし
一而て更らに國家は伊國生絲業者にして破產其他の悲運に遭遇せるものある時は各一人に對し一萬利を支出救濟すべし
一紙幣發行銀行及貯蓄銀行は該組合に對し保證貸を爲すの義務あり
一從來存在せる生絲小組合は本組合に合同すべし
一組合は生絲の乾繭繭の性質を檢覈し公認證書を附す
一組合は繭生絲屑絲紬布等に對し保證狀を發行す
一組合は桑葉栽培養蠶術の發達を圖る爲め投資して模範工場を設定す
一組合は通信統計及世界生絲價格表を發表す
一組合は本部を美蘭に置き支部をチューリン及びコモ其他議員の必要と認むる所に置く

天の時、地の利、人の和（上）

學務委員　吉池慶正

本編は福島縣三春町に安達、安積、田村三郡聯合物產品評會の折田村三友會の開催に係る蠶業講話會に於て講話せられたるものなり

私は喋舌をするに特長とては何もありませんが聲が大きいことゝ、話は下手に且長いことは自慢であります、夫れ丈聞かさるゝ人は迷惑千萬である、然るに今日は日は正に黄昏に近く、あとに尙御話する人も居らるゝから私の話は三十分長くも一時間に上ることを許さない、故に話をする私に採りては甚殘念で、聞かさるゝ諸君に採りては御仕合の事と思ます私は茲に斯う云ふ事を思出しました、支那の諺にある天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かずと云ふ事である人は支那の事と言へば何れも悪く言つて唐人の寢言は陳腐漢で二十世紀の今日に到底當て嵌まらないと申します、けれど

も、敢てそうで許りてない、千古奪ふべからざる眞理を有し誠に敬服に堪へぬ者がある、即ち今の譬の如きはそれである吾々は眼のあたり日露戰爭に就て之を實地に見る事が出來ました、開戰前に於ける露西亞の有樣はどうであつたかと云ふと彼は專制政治の國であつて、暴力を以て民權を壓する、外は疆土の擴張に意を用ゐ滿洲を席卷し韓國を併呑するの方法を講じてあつた爲に東洋の平和を永遠に攪亂されようとしたのである、民權の壓抑、平和の攪亂の如きは神人共に憤る所で決して天の時を得たものでない、然るに日本はどうであるかと云ふと夙に立憲政體を布かれ上下一致して韓國の啓發及清國の扶植等東洋の平和否世界の平和に貢獻しつゝある、是れ實に文明國の職責で天の時は確に日本が之を得て居つたものと認むることが出來る。

　次に地の利である、日本は一葦帶水の韓國及び滿洲に於て戰爭をするのであるから、軍隊及び兵糧の輸送には露本國より西比利亞鐵道で迂迴して來るものとは同日の談でない、殊に滿韓の地は日清戰後の古戰場で將士は地の利を暗じて居る、茲に最も地の利を得て居る顯著な一例は之を海戰に見ることを得た、彼の「ロジエストウエンスキー」提督は威容堂々艨艟數艘を率ひ喜望峰を迂曲して東洋に航行したのは實に世界各國の驚嘆する處てあつた、所が來ては見たが艦隊將士共に疲れた許でなく燃料、糧食の供給も充分でない艦船の修繕する場所もない日本は之に反し準備周到將士は意氣軒昂揚て、加て絶世の英雄東鄕提督の之を率ゐるあり、戰はずして勝敗の數明てある、彼艦隊の捕獲せられたる者は海底の藻屑となり、提督までも捕縛されて海戰史上未曾有の憐れ墓なき最後をとゞめたのである、地の利戰勝の最大要件であることは疑いない。

北越中蒲原郡大形村浩川英太氏所有秋田式模範桑園

　次に人の和である、是は三要件中に於て最も推重すべきもので縱令天の時地の利を得るも人の和を得ざれば勝利は期し難い、然るに露西亞は朝に在りては文武兩派の軋轢あり、野には虛無黨、社會主義者の如きあり紛亂絶ゆることなく人の和せざること實に聞くも氣の毒なる程なり、日本は露西亞の滿韓の野を脅すは東洋の平和に危害ありとなし、國民一致して露西亞の暴横を制することを叫號し議會は忽ち數億圓の軍費を議決し、賤の伏屋に起臥を爲す老爺老媼は可憐い息子が戰の首途に未練な最後を遂げて人に笑はるゝな、後は心配するに及ばぬ君の爲國の爲身命を捧げよなど激勵をなす、擧國一致即ち之をしも人の和を得たと言はなければ他に何ものもありますまい、實に天の時、地の利、人の和なるものは百戰百勝の根源であると私は確信して居ります。

　天の時、地の利、人の和なるものは特り干戈銃砲の戰爭のみでない、平和の戰爭即ち商工業の戰爭に於ても同樣である干戈銃砲の戰爭は偶見る所の現象であるけれども商工業の戰爭は不斷息まざる所の活動である、而して干戈銃砲の戰爭は血を流し骨を枯し人の國を亡す等誠に慘鼻の極である、商工業の戰爭は左樣な慘憺たる狀況を呈出しないけれども其結果たる國を亡すと云ふ點に於ては殆ど相違はない、印度、ビルマ、埃及の如き、漸次國力困弊して他國の領地となるに至つたのは好適例である、我國には忠勇義烈、策略縱横の名士雲の如く干戈銃砲の戰爭では世界無比であることは日清戰爭北淸事件、日露戰爭等で證據立てられて居る、併しながら商工業の戰爭に於ては常に劣敗の地位に立ち輸入超過、金利昂騰、財政難等に苦悶して居なければならぬのは洵に遺憾の極である、故に我國今日の急務は殖産興業を盛ならしめ國利民福を増し平和の戰爭にも大勝を期さなければならぬ、そこで吾人の從事する本邦農商工等中の大宗たる蠶絲業に就て戰勝の三要素を研究して見るは頗る必要の事であると信ずる。

　天の時に就て見るならば吾人の祖先即ち原人と云はれた時代は皆裸體てあつた、併しながらそれでは雨露寒暑等を防ぐことが出來ないから土中に穴を穿ちて棲み他に出るときは寒ければ獸皮を着、暑ければ樹の葉を綴りて着て居つたらしいそれでもオメカシをする氣はあつたものと見えて顏や手に果實或は草葉などの汁液を塗りつけて、其美を誇つた、併し雨にても濡れるば落ちるからして刃物で以て傷を拵へたものである、此等は今日に白粉、紅、文身などゝなつて殘つて居るそれから首の廻りに又は腰の周りに貝類などを飾りとして下げたものである、現今是は耳環、腕環、指環などゝなりて殘つて居る、去りながら此等は變化は少くない、而して局部的である、そこで被服は人體の衞生的の外に美容を整ふると云ふ中心となつて綿布、麻布、絨布、絹布等種々の織物が現はれ機織、染色、整理の技術の進歩して季節々々に從つて種々の織物を着用すると云ふ事になつたのである、斯の如く人間の惡く言へばオメカシ能く言へば美術的觀念なるものが原始時代よりあつたもので世か漸次文明に赴くに從ひ益々增進する事は敢て疑を容れない、果して然らば被服の中に於て絹布位最も美術的にして光澤の美麗に輕暖で且手觸の良いものはない、造物者は此絹布に優る良品を產出せない限は多々益々世に重愛せらるゝことは言ふまでもない、故に私は絹布の原料、蠶絲業の生產は天の時を得たる產業であると斷言するに躊躇しない。

　近頃人造絹絲なるもの、聲は高い、是は佛國の化學者「シヤルドンネー」伯爵の發明せられたもので其後改良して頗る實用的となつたそうである。本會の總裁伏見宮殿下も深く此事に御軫念あらせられ、大命を奉じて歐米地方に御渡航の際親しく彼地駐在の公使大使其他實業者に御下問あらせられた時に、上流社會では絕て之を用るものなきこと、水に對して腐蝕し易きこと、大抵抗力乏しきこと、重量の多いこと

等は到底天然絹絲の敵でないと云ふ事を言上したそうで、御歸朝になりましてから此事を洩れ承り大に安心致しました。

次に地の利である、地の利を二つの方面から觀察せなければならぬ、其一は内地に於ける生産の比較である、日本の土地は各種の産物に富て居るが、其最も金額の多いものは米である、米は約六億圓で其生産する面積は二百八十萬町歩に上つて居る、尤も此外に麥の一億二千萬圓位は收れる、けれども之を三十二萬町歩の桑園で約二億圓の繭を收穫するものと比較したならば其利益は同日に談ることは出來ない、故に一派の經濟學者は日本に於ては米作を廢し、代るに桑園を以て生絲を輸出して之を以て米穀を購入するを得策なりと呼號するものがある、そうして夫等の人は稻は元來熱帶地方の植物で安南、柴棍邊にては年二回の收穫があるけれども、日本内地にては二回の收穫あるは土佐の一部丈ある、今でも此米の産額は日本の人口を養ふに足らず、年々一千萬圓以上の外國米を購入するではないか、夫よりは經濟政策を一變して米穀本位を蠶桑本位とするを宜しいと云つて居る、けれども是は平穩無事の日のみを觀て一朝有事の時を顧みないのである、國家の獨立は食物の獨立と相伴ふことを知らぬのである、今や日英同盟に尋て日露協約、日佛協約等ありて四海波枝を鳴らさぬ御世なれども、如何なる邊より低氣壓起るかも知れぬ故に耕地整理及施肥、耕耘、除害等の改良を行ふて米の産額を増加することを努めねばならぬ、併しながら稻作は水利を要すること多いから本邦に於ては更に稻田を増すべき餘地は乏しい、然るに桑園は全國到る處如何なる土質如何なる地形にも殆ど栽培の出來ない場所がない、然るに數年前其筋の調査に依れば十五度以下の傾斜地四百萬町歩あると云ふことであるから、之が一割を桑園とするも現在以上の桑園を得る譯である。其他の碌々たる作物は到底之と立合することが出來ぬのである。然らば内地に於て最も地の利を得て居るものと認むることが出來る。

他の一は需要地に於ける競爭である、之は歐洲に輸出する上に於ては伊佛の如き自國若くは其附近の需要者に供給するものに比すれば不便である、けれども之が若し精製品にして流行を趁ふ品物であつたならば到底競爭は出來ない、所が原料である丈に實質が善くて價格さへ高くなければ決して敗けない、それは生きた證據が之を示して居る、佛國の蠶業の衰退、伊國の辛ふじて現狀を維持するが如き思半に過くるのである、況んや新進の消費地である、米國に輸出するに就ては伊國も支那も日本も遠く海洋を航行することであるから同一の狀況にある、故に此點に就ては特に地の利を得て居ると云ふ事は出來ぬけれども、日本から海外に輸出する品質として容積の大ならず重量の輕くして價格の比較的貴き理由の下に最も適當のものであると云ふて差支はないそれから品質の善惡は風土及生産狀態に起因する、又價格の高低は生産費を要する多少主として勞力問題に歸着するのである、故に人口の稀なる勞銀の貴い新世界にて此業は興らないで、舊世界の人口の多い賃金の廉い所に發展する、此點に就ては確に地の利を得て居ると斷言するに若かない。(未完)

「テグス」を生産する蟲に就きて

學藝委員 農學士 明石弘

「テグス」は漁業家に必要缺く可からざるものにして本邦に於ても、古來家蠶又は樟蠶の老熟せるものを取り、之を食用酢に浸すこと一晝夜の後取り出し體を割き絲腺を取り出して之を引き延ばし板に張りて陰乾にし以て釣魚の用に供せしものありたれども、此等は寧ろ少數にして維新以前と雖も長崎を經て支那より輸入せしもの多しと云ふ、而して近年我國の漁業益々發達するに從ひ此のテグスの輸入も年々増加し現に毎年三四十萬圓の輸入を見るに至れり。

抑も此のテグスは支那の何れの地方に産するやと云ふに多く廣西省に産する野蠶の一種より得るものにして、此の野蠶は Loepa Katinka Westw. と稱する蛾の幼蟲なるが如く、該幼蟲は佐々木博士に依れば黄緑色を帶び亞背線氣門上下の兩線には毎環節一個の瘤起を存し、之れに數本の短毛を生し又尾脚の外側には黒斑を存すと云ふ、而して本年一月清國浙江省德清縣の人許炳堃氏本邦野蠶に就き調査の爲め東京蠶業講習所へ來訪の節其の繭十數顆を所長に寄贈せられたり、乃ち之を檢するに繭は輪廓不正なる卵形をなし先端僅かに開口す、其外面は隆穹するも底面は扁平にして他物に附着するものゝ如く、繭質はゴムを以て硬く膠着し居ると雖も、其表面には網目狀に絲縷纏絡し繭の内層は暗褐色にして外層は灰褐色を呈す、其大なるものは長さ一寸八分五厘幅八分五厘あり小なるものは長一寸三分幅七分ありたり、爾後此繭を養蠶室に保存し置きたるに四月上旬の頃より蛾出で初めたれども其發蛾の區々たりしと材料の少數なりしが爲め遂に採種する能はざりしは實に遺憾とする所なり、今此蛾に就きて觀察を試むるに體長七八分翅の開張四寸内外あり、全體の形狀稍樟蠶蛾に類すれども此蛾に於ける如く翅尖は尖ることなし、前後の翅の眼狀紋は暗灰色にして黒色の外輪を有し而して此の外輪の内半に於て藍色の弧線を有せり前翅の前縁には前胸より連なる白條あり、翅底は黒色にして之れを限れる白色及黒色の二重の波線あり、又翅の中央は地色灰黄色にして黒色の二條の深き波狀線あり又外縁に近く一個の太き白條を存せり、後翅は其着色概ね前翅と異ならざれども翅底は稍淡色なりとす、腹部の各環節の前半には黒色後半には白色の毛を生じたり、今許氏の談を聞くに此幼蟲は廣西地方に於て四五月の頃孵化し柳、楓、樟、烏桕等を食し三十四五日を經て老熟結繭するものなりと云ふ。

桑の「シントメバへ」に就きて

通常會員 丹羽四郎

桑樹害蟲に關する研究の日を逐ふて進歩すると共に、年一年新害蟲の發見せらるゝの悲なからず、予が今記さむとする「クハノシントメバへ」の如きも近來知られたる害蟲にして其經過習性も猶不明に屬するもの多く、成蟲に至りては未だ發見する能はずと雖、其の害の顯著なると其蔓延の甚しきとは大に我桑家の憂倶を深からしむるものあり。

「クハノシントメバへ」は岐阜・愛知の兩縣に發現し昨今は愛知縣に接せる静岡縣の一部に至る迄其害を被るに至れり、岡山・茨城等の諸縣に於ても此の害を存すれば、其他諸縣に於ても必ずや此の害蟲を存するならん、然れども元來此蟲は極めて微小にして、多少害蟲に關する知識を存するものにても、之れを發見することは困難なるものあれば、一般當業者は其の害蟲の顯著なるに驚くのみにして、未だ其何物か如斯甚深の害を為すやに就ては五里霧中に彷徨して其適從する所を知らざるもの〻如し、今左に少しく此の「シントメバイ」に關する一般の事を記さむ。

「シントメバへ」は又た「ツバへ」とも云ひ、長蟲學上双翅目長角亞目、蟲癭蠅科（双五倍子蠅科）に屬し、其の幼蟲は各種の樹木に蟲癭を作るものにして、特に北米に產する「ムギタマバヘ」（Cecidomyia destructor）の如きは其害甚だしく、或地方の如きは此の爲めに殆んど麥作を中止せしが如き例あり。

元來此の蟲癭蠅科に屬するものは、例體長一分内外にして、形状に變化あり、全身に長き毛を被り、觸角は頗る長く多數の環節より成り、且毎節車軸狀に毛を放出せり、幼蟲は長き毛を放出し、色は赤淡紅、又は黄色にして、兩端細く、紡錘狀を呈し、體は頗る退化せり、幼蟲は其の環節より成り、微小の頭部には、胸骨（Breast bone）と稱する叉狀の構造あり、其の用途明瞭なるべし、之れを尾端に掛け體を曲伸して其の用に供す、此の蟲は跳躍する習性を有するを以て、以上は蟲癭蠅科一般の特徴にして必ずしも其總て之を研究するに當り如上の事實を知るは極めて必要なることなりとす。

而して「クハノシントメバへ」の成蟲は前に云へる如く未だ發見せられざれども、幼蟲は其の成長するもの二分内外、橙黄色若くは赤色にして出現の時期は六七月の頃なりとす其の害生する部分は必ず桑の頂芽にして、僅に芽を發生せしに拘らず、蕾は其の頂芽を受けたる桑は其の發育を妨げ、此の害を受けざる桑は其の枝を多出すること恰も妻籠の如く、子の骨の圓部及下部は縮病の發生せしものにして、無害の桑條は一七八寸に伸長せしとき、害生を受けたれば、其の僅伸長を止め秋未に至り六尺以上に伸長せしものにして、蕾は一尺以上に伸長せしに拘らず、蕾は未だ開花せず、其の害生を受けざるものは、春蠶期に伐採の後發生せしものにして、無害の桑條は一尺以上に伸長せしものにして、蕾は既に開花せり、此の害蟲は前に云へる如く未だ明瞭なるべし、以上は蟲癭蠅科一般の特徴にして必ずしも其總て之を研究するに當り如上の事實を知るは極めて必要なることなりとす。

而して「クハノシントメバへ」の成蟲は前に云へる如く未だ發見せられざれども、幼蟲は其の成長するもの二分内外、橙黄色若くは赤色にして出現の時期は六七月の頃なりとす其の害生する部分は必ず桑の頂芽にして、僅に芽を發生せしに拘らず、蕾は其の頂芽を受けたる桑は其の發育を妨げ、此の害を受けざる桑は其の枝を多出すること恰も妻籠の如く、子の骨の圓部及下部は縮病の發生せしものにして、無害の桑條は一七八寸に伸長せしとき、害生を受けたれば、其の僅伸長を止め

上記の細條を發生せしに止まりたり、此の害蟲が桑の頂芽に寄生する有樣は恰も柳の芽五倍子蟲（Cecidomyia terminalis Lowe）に類すれども、其のこれと異なるは頂芽に五倍子を形成せざることなりとす、而して此の幼蟲は其の後如何に經過するものなるやは、未だ知の問題なれども、去る三十八年の春山口縣の某氏より子に宛て、桑樹の根朽皮の間に於て發見したりとして一種の蟲癭蠅科の幼蟲を送像せられたることあり之れ勿論桑の頂芽を害するものにして、蟲癭蠅科の一種の幼蟲例之前記柳の頂芽五倍子蟲（Cecidomyia Cornis Kolb）の幼蟲の如く、其の幼期に至れば土中に入り、此處に越冬して翌年六七月頃成蟲の出現するものにあらざるか、未だ經過習性を盡さゞるを以て根除の方案を提供する能はずと雖、聊か既知の事實を記して根桑家諸君に警告せんと欲するものなり。

鳥取島根兩縣下の蠶絲業（承前）

通常會員 生糸檢査所技手 德田實也

十 桑園

縣下の桑園は四十年六月現在の調査によれば總反別三千八百廿一町三反歩にして此收業高五百八十五萬八千四百六十九

鳥取島根兩縣下の蠶絲業

貫匁此價格百十萬七千六百十三圓三十錢（平均一貫目十七錢）にして一町歩に對する桑園の收穫百五十三貫餘の平均に當れり、桑園の全部は根刈にして喬木仕立のもの（桑園は年々增加の趨勢なり。

種

桑

本縣の蠶種は一定せる山桑又昔なり、彼の佐平又と稱し原作平の又昔より選出し改良を加へたるものと稱し隣縣兵庫縣但馬方面の桑又昔より其形少しく短くして現時縣下を通じて一定せる種なり。

作平又に就ては素より其初め上州國原作平製造又昔を飼育し是より漸次改良して今の所謂山陰又昔を精製せるもの、サレば一般作平又と稱すれども一説によれば作平又よりせるもの多くは在來の蠶種より改良選拔して遂に今日の山陰又昔を製するに至れりと、彼の有名なる伯耆の山陰製絲に於て採用したり伯耆は今日誠に慨に或る熱心なる蠶種製造家の其盛滅を憂ひ辛うじて之を保存せるに過ぎずと云ふ。

縣下に於ける蠶種は春蠶に在りては殆んど縣内製造に係るものにして他府縣より入來るものなし、夏秋蠶は近來の流行にて且つ風穴種の改作なき爲め他府縣より蠶種を輸入す、縣下昨年度の蠶種製造高を示せば。

製造區別	法定蠶種	自家用蠶種	合計
樂種用相製	三、〇四八、五四九枚	一五三、四一一枚	三、二〇一、九六〇枚
普通製	四〇、五二三枚	五六〇枚	四一、〇八三枚

近來樫製の眞價値を知り普通製種よりも樫製を需要するの多く、順次鋭意檢査も繁忙に赴けり蠶病豫防費も昨年は五十餘名に達せり、今縣下の蠶病豫防費を擧ぐれば次の如し。

	年	次	種防事務費	員上吏員費	合	計
明治四十年度	四六〇〇	四六〇〇	四六〇〇	四六〇〇	四六〇〇	四六〇〇
同	四十九年	四六〇〇	四六〇〇	四六〇〇	四六〇〇	四六〇〇
同	四十年	四六〇〇	四六〇〇	四六〇〇	四六〇〇	四六〇〇

備考 四十年度に種製繭は其他は決算額

以て年々増加の趨勢を知るべし。

鳥取縣には原蠶種製造所ありて蠶の原種を一定せり、初め縣廳の指定蠶種は又昔小石丸の二種なりしが、昔のみ行はれ、又昔小石丸は廢滅の運に向ひ、縣原蠶種製造所に於ては蠶種用の内、又昔六十九石丸一貫匁餘に過ぎず。

縣に於て原蠶種製造事務所を設置されたる本部を鳥取縣廳内支部を三ケ所に置く、此事務所には蠶の飼育を爲さず事務員を配置し各蠶種製造家より毎年採種場繭を原蠶種に製造事務所に納付せしむ、各製種家は必要の原蠶種に對する繭を提出す、例へば百蛾丈原蠶種を必要とすれば繭一斗(一斗より百蛾の一蛾を得るものと假定せば)を出す、而して若も不合格の場合を慮り豫め補充として倍數の繭を提出す、斯くて各製種家より提出せる繭を各本支部に於て審査す。

審査員は縣知事の任選の人二名と民間より製種家、養蠶家、製絲業等より四名を撰び六名を委員長一名とす、縣知事は知事の指定を以て忠む、此委員に於て該繭を形狀及大小、色澤等肉眼の審査を爲し決定す、採種家は之を各自出品者の採種に原蠶種として採種立て夫より蠶種を製し一般に發賣す、若し又出品中不合格者の採種に於ては原蠶種製造所に於て他の合格者の繭より製種し之を與へ又製種家(倍數の原種)の中に放ありて出品し繭のものにも前同樣事務所に於て製種したるものを與ふ。

	年	次	春蠶	夏蠶	秋蠶
明治三十六年度	一六、八二三	四、九五八	三、二七八		
同 三十七年度	一九、四三〇	四、三四九	三、九七三		
同 三十八年度	二三、五〇二	三、〇四七	三、九六三		
同 三十九年度	二三、九二三	四、八一五	四、六五一		

十二夏秋蠶

夏秋蠶は近年の流行にして未だ發達の續に進まず、一般に其利益を認め漸次飼育者の增加の趨勢を示せり今縣下五ケ年間の統計を見るに左の如し。

岡 四十年度 二六、五二〇 六、三九九 五、三六三
日露戰爭新報主幹 石田孫太郎

藤本蠶業合名會社

製絲業者は從來秋蠶繭を使用せるものなかりしが近來試みに繰絲し好結果を得たるもの漸次秋蠶繭の使用を高を進むるの氣運に向へり。(未完)

一 蠶業社會の一新福音

蠶業社會の一新福音とへらる、とは、光榮ある歴史を有する信州佐藤家一族が、藤本蠶業合名會社の名の下に、完全なる蠶種製造地として最も適當せる信州に於て、佐藤家の一族により設備を爲し、以て原種に普通蠶種を製造することとなり、蠶種製造地として最も適當せる信州に於て、佐藤家の一族により設備を爲し、以て原種に普通蠶種を製造することとなり、蠶種製造地として最も適當せる信州に於て、吾人の歡喜に堪へざる處とする傳はるを聞くは、吾人の歡喜に堪へざる處とする傳はるを聞くは、俗惡なる歴史を有する者、又は人格の下劣なる人より聞く時は、何となく惡感を惹起する者なれども、凡そ斯の如き聲明は俗惡なる歴史を有する者、又は人格の下劣なる人より聞く時は、何となく惡感を惹起する者なれども、今や蠶種の製造並びに其病毒の減じて、直に首肯せらるゝ處なるを以て、彼等が中心より其第一聲を以て革新を加ふべき秋に際し、之を當業者に紹介して、一に は後進者の起るを期し、又一には有終の美あらしめんとするが、叙事の節潤を飾る爲に、藤本繩葛以前を第二期とし妙妙連時代を第二期とし、均業會社時代を第三期とし、現今藤本合名會社を第四期とすべし、即ち沿革的には約三百年間何を爲したるかを調べ現在の狀況に及び、一轉して當事者の實責を提へ以て擱筆すべし。

二 藤本繩葛以前

藤本繩葛と云ふは、我蠶業社會に隱れも無かりし有名なる故藤本善右衛門氏の家系に據て述ずるに本姓は元佐藤氏、藤本は其の家の號なるが、故為りて之を稱たりと傳ふ、而して佐藤八郎右衛門氏の父なるが、

たるが、其賞詞の中にも『其方儀爲登絲一云々とあり、話變りて一方養蠶社會を見れば、養蠶上の失敗比年相踵ぎ安き心もなかりしを以て、繩葛及び其父保右衞等之を救はんとして其心を苦しむ、一日思へらく檐下の蜘蛛の巣は其絲白く野山のそれは其絲黃色なり、之には深き仔細のあることなるべしと茲に家蠶又昔の雄蛾に野蠶の雄蛾を配す、出來上りたる一新種は後に所謂青白なれども、其當時は強質健全なりと云ふのみにて、繭巣最も不良なりし、之れぞ文政十年後のことなるが天保年代に至りては、彼が青白卵は其可良に於て聲價を博せりと云ふ、後ち繩葛等春蠶の雄蛾に夏蠶の雄蛾を掛合せ一新種を出せしが、之亦當時の蠶業家に歡迎せられ、蠶尻掛合の名世上に高かりき、天保十二年蠶飼の學を公にす、以上記する處は未だ房住の繩葛と其祖父等の事業の一斑に過ぎざるが、又以て其性質が尋常商人の如くならずして、何事も公共的なりしを理解するを得ん、之より世は愈々複雜となり繩葛は一人前の男子となる、其振舞や如何。

三　妙紗連時代

元治元年是より先き、佛國に蠶病蔓延し、其勢ひ最も猖獗を極め、將に同國の蠶業を根本より絕滅せんとせり、皇帝は詔勅を發して其病原と撲滅法との研究を促がし給ひ、碩學パストール博士の研究に從事するあり、朝野實に騷然たりき茲に於て彼國商人等は我國の蠶種を輸入することを思ひ立ち其輸出を乞ひたりしが、試育の結果甚だ良好なりしを以て大に買ひ進みたり、而かも幕府は之を公許せざりしを以て蠶種商人等は密輸出を爲したりき、然るに元治元年蠶種の輸出は公許せられ、我國蠶種の需要益々多きに達すると共に悲むべき惡事は我蠶種家によりて企てられたり、そは言ふ迄もなく粗製濫造にして、夏蠶を以て春蠶と欺きたるものあり甚だしきは菜種を蠶種として賣捌かんとしたるものさへありき、吾輩嘗て報知新聞に於て櫛南逸民の名を以て『一枚十兩の菜種』と題し、當時の實況を記したることあるを以て、讀者の中には記臆せらるゝ向もあるべきが、兎に角有ゆる商罪は行はれたるものとす、然るに佛國に於てはパストール博士の研究漸く其績を擧げ來り、日本蠶種家の罪惡は本國に於て曝露されたれば、我國蠶種の輸出は一大打擊を被むらんとす繩葛氏謂へらく『抑も蠶種を要する所以のものは、養蠶の成効を期せんが爲也、然るに世間に見る處の如き弊風を以てせば、忽ち信を外人に失するのみならず、各自の業を失ふに至らん、宜しく自ら正を期し、先づ人を利して己を利するの主旨に則り、力めて善良の蠶種を供給して、彼我の信用を厚からしめ、營業を安固に爲すに如かず』と之より近鄉有志を勸誘して其製造する處の蠶種を撰擇集收して、之を橫濱に出荷し自ら其賣捌を擔任せり、此近鄉有志者こそは所謂妙紗連にして、繩葛氏は即ち妙紗連の主長たりしものと知らる、妙紗連其名は實に奇妙なるものなれども、其商行爲は正義と律直とを奉ずる一團體なりき、果然伊太利商人フハッケの如きは信用薄きこと紙の如き當時の蠶種商人中、獨り此妙紗連の蠶種を信用すること厚くして、數千枚の蠶種も拜見無しに取引するに至れり、之を明治元年のことに記錄せられ、古老亦之を語る、正義律直の德亦大ならずや、越えて明治二年又多數の蠶種を橫濱に出すや、例のフハッケは藤本氏の種は見るに及ばずとし、遇するに師傅の禮を以てせり、德孤ならず、必ず隣ありとは、之れ此の謂乎、而して翌三年に至れば內地生產其極に達し、而かも元產地買は一枚四兩となりたり、之に反して外商少しも買はず、市價日々に低落して上等品すら洋銀三枚五分に出でず、普通品の如きは二枚を破ぶれり蠶種家の倒產したるもの甚だ多かりき、然るに此妙紗連の蠶種は又何の調査も拜見もなしに四枚四分の高價を保ち剩さへフハッケの獨占を羨みてドテナ外二名の商人は、之を得んことを競ひ、果ては數枚にても分讓せよと云ひしとかや、之れ實に積善の餘慶とも言ふべきもの、斯くて此妙紗連は藤本繩葛の正義と律直とを中心として、明治四年に至る迄て繼續したり、而して一方には佛國の病菌漸く滅し、日本產種の需要は日に月に減じ行かんとす。

四　蠶尻均業會社

蠶種輸出界に於ける妙紗連の地位は前述の如く高度に達したるが、其組織たるや單に有志者の一時的結合に過ぎずして未だ有機的體制を具へざりき、茲に於て藤本繩葛結社の必要を論し、且志を戮せて事業の改良發達を期す、當時社員となる者繩葛たる藤本善右衞門佐藤八郞右衞門淸水銀右衞門及び小岩井茂三郞諸氏を主とし總人數二十餘名とす、即ち稱して均業合社と言ひ、佐藤八郞右衞門氏之が社長と爲る、之を明治五年五月と爲す、而して同年秋季其社名を以て蠶種を橫濱に出したるに均業社は妙紗連の後身なりとの事實夙くも知れ渡り、取引亦前年に變らず、又彼の伊人フハッケとドテナ等は互に協商して、均業社蠶種を購入し、各々滿足する處ありたり、斯の如くにして明治六年に及びたるも、同七年に至れば蠶種の輸出は頓に減じ、到底其利を見る能はざるに至りたるが、之に反して內地蠶業の勃興は蠶種を需要することと甚だ多きを以て、明治十年斷然外國輸出を廢し、內地の需要に應ずることになれり、然るに此事業の一變轉と共に社員の異動は當然に起りしを以て、明治十七年三月一旦之を解散し更に蠶尻均業會社を結び、藤本善右衞門佐藤八郞右衞門淸水銀右衞門佐藤尾之七等社員たり、佐藤八郞右衞門其社長の任に就く、蠶種均白の名は競進社の白玉高山社の又昔と其名を爭ひ、均白其別名は優良の蠶種と迄て謳はれたり、當時蠶業社會に在るものにして、均業會社の均白あるを知らざるものなく、又藤本善右衞門佐藤八郞右衞門諸氏を記臆せざるものなかりき、而して其頃は繩葛既に隱れて其子善右衞門氏出でたるなるが、名門の出とて少しも聲名を墜さず、却て彼父にして此子ありと思はしめたり、均白の名が蠶業社會に重要の地を占めたるは左ることながら、茲に特筆すべきは蠶の微粒子病の研究是也、彼等は蠶の微粒子病に就て疑ひを懷き當時其部に在職せし中島精一氏等と主唱して、微粒子研究團體なるものを設け、巨資を投じて是が研究を農科大學に托す大學に於て佐々木理學博士其研究の任に當り、博士の篤學と素養と相待つて其効を奏し、微粒子毒は其所屬を植物より動物に轉ずるに至り、博士の名をして千古に朽ちざらしめたる

のみならず、均業會社を中心として彼等の一團は、之に賛翼したるの名譽を擔ふに至れり、而して其團體の委員長は始め藤本善右衛門氏なりしが、後ち佐藤八郎右衛門氏之に代る

吾輩は微粒子毒の學名を唱する每に、佐々木博士と藤本佐藤二氏等を追想するを禁ずる能はざるものなり、誰か彼等の事業を偉ならずとせんや、何事につけても公事を先にせる均業會社は、消毒問題の唱へらるゝや、學者の見て以て可とせるものは悉く之を採用し、トリラ消毒釜の如きも態々獨乙に注文して之を購入したり、聞く處に依れば我蠶業社會にトリラ釜ある、之を以て嚆矢と爲すと云ふ、斯の如くにして均業會社は蠶業上に大なる寄與を爲したるも、社員中には彼等二三氏の如くに獻身的ならざるものあり、茲に於て極めて少數の社員を以て社を組織し、異體同心以て盡力するあらんとして、妙々遂均業社を通じて三世に及び、令名最も高かりし均業會社は、他日大に活きんが爲めに、一先づ解散するに至れり、惜む可き乎將た喜ぶ可き乎。

五　藤本蠶業合名會社

藤本繩葛既に死し、有名なりし藤本善右衛門佐藤八郎右衛門皆共に黃泉の旅客となる、藤本の嫡子善右衛門は本姓に複して佐藤となり、茲に其一族佐藤八郎右衛門佐藤尾之七及び佐藤平作氏等四名の者相謀り、改めて藤本蠶業合名會社を結び、佐藤尾之七氏之が社長となり佐藤八郎右衛門氏東京にあるの故を以て其支部長となる、而して彼等は吾輩の知り居る範圍に於て、克く名門の聲擧を維持し發揚するに足るものとす、本年一月其結社趣旨書を發して曰く『夫れ從來斯界の難事とせる蠶病豫防の方法、蠶繭種類の撰擇、原種飼育の方法等に於て宜しく其禍根を一掃して、眞に最良なる蠶種を產出せんが爲には、凡ての機關と設備とに於て一點の遺憾なきことを努めざる可からず、是れ固より微々たる資力の到底克くする處にあらざるを以て、同族一門共資合名し云々』云ふ事實をして其信偽を判ぜしめよ、先づ之を蠶種に見れば、彼等は既に雷名を博したる均白を以て、其實又昔に過ぎずとなし其得たる名聲を捐て、又昔を採れり、蠶室蠶具の消毒を有効ならしめんが爲めに、在來法は勿論更に流走蒸滊罐を裝置したり、是原種飼育の室は新築せられ、飼育撰擇病毒の査定迄て、最も綿密に行ふの目的を以て、凡ての機關を整ひつゝあり、要するに時代が要求する處の諸點を具備して、所謂趣旨書の聲明を事實に現はさんとし、又既に緒に就きたるものなり、然れども機械の設備は未だ以て安んずるに足らず、運用は人に存することとなるが、尾之七社長以下各社員皆篤實の紳士にして、流石は名門の出なれば、言行必ず一致す可きを信ずべき十分の理由あり、思ふに彼等既に紳士たり、何んぞ狂して其家名を汚さんや。

六　佐藤八郎右衛門君の言責

蠶業言論社會に於ける吾輩の目より見れば、親友も知己も親でも子でも悉く赤の他人也、善を善とし邪を邪とす、其間何等の私心を挾まず、感情によりて說を立て論を爲すは、

吾輩の敢てせざる處とす、近頃蠶業の地方的研究に關聯して其社會的運動の史的觀察を試み、藤本繩葛の言行を討究し遂に藤本蠶業合名會社に至る、其趣旨書を見るに、能く時代の要求に應ずると共に、言ひ易く行ひ難き凡てを爲さんとするもの丶如し、言や美也、一度び之を賞さんか乎と、則佐藤八郎右衛門君に謂て曰く、吾輩は貴下の知人也、左れど此瞬間は貴下の敵たるべし、然り貴下の敵として問はん、乞ふ之に答へよと、而して趣旨書に言ふ處の諸點を擧げて、一々其答辯を促したるに、微力完全を期し難からんも言ふ處必ず行ふべし、乞ふ腹心の者合して一團となりたるに回顧せよと、吾輩此言を聞きたる時大なる愉快に耽るを禁ずる能はざりき啻に繩葛氏故藤本善衛門故佐藤八郎右衛門氏等の後繼の榮譽なるのみならず、我蠶業會社が受くる利益は大也、願はくは初志に倦むとなく、蠶病の絕滅と蠶種類の改良とに盡す處あれ、而して社員の有るものが業の困難を訴ふるあらば、繩葛氏の事歷を回顧せしめよや、長野縣小縣鹽尻の地を佐藤氏一族とを祝福す、國は日本一の產種の適地、人は榮譽ある家門の子孫、藤本蠶業合名會社に有終の美あるを期待せん。

萬國公認生絲練減率を定むべし（承前）

通常會員　清水鱗哉

二　生絲價格ト練減量及水分量

吾人は今取引上に於ける生絲價格と練減量及水分量との三者間の關係を數字上に伺はんとす。

由來公定水分量は生絲の性質上隨時其含水量を異にし取引上買賣二者の損益問題より來り一割一分の含水率を取引上に公認したり、然るに本邦生絲の水分量は各國のそれに比し常に多量なりとし特更に取引者は本邦生絲に對し其條約に於て百分の二の含水增率を猶豫し之を公許したり、之れ一方より見れば大なる恩典なるが如く見せかけ其他方に於て我生絲の特點を暗所に葬りたるものなり、何となれば練減少なき大利點を無言に附して特に水分量に於て猶豫したればなり。

今各國生絲の水分量を比較するに各年平均數は左の如し。

年次＼檢査所	橫濱	里昂	サンテエンヌ
三十五年	一一、九四	一〇、九六	一一、一九
三十六年	一一、七五	一〇、八五	一〇、九一
三十七年	一一、六〇	一〇、八二	一〇、八七
平均	一一、七六	一〇、八八	一〇、九九
其平均を日本生絲に比較す	〇	少 〇、八八	少 〇、七七

其檢査所名によるも里昂及サンテエンヌのものは即ち伊佛絲と見做す

即ち日本生絲の水分が彼伊佛に比して多しと雖ども其差額や極めて少なく、之れを練減量の差額に比すれば大に徑庭あるを見る而して水分が多く量が少く、更に生絲の品位を傷ること及ざるなり、猶近年本邦絲は益々水分が減量の傾向あるに於て百分の二の猶豫合水量の特典を弱ること少なからんとす。

而して此百分の二の猶豫は水分公定率を無水量に對して一割三分二厘六毛の位に當らずして、原量に對して一割一分七厘一毛に當り伊佛絲は一分一厘に對して原量に對して九分九厘一毛に當る、之れを前表の平均數に對すれば、猶豫率に比し日本絲は僅かに五毛を越え、伊佛絲は九厘少なく、公定率に比し、日本絲は僅かに一分八厘多く、伊佛絲は九厘多く、其差實に九厘に過ぎず。

故に正量賣買とせば、我は一分八厘の水分量だけ目上に損失を見るの理にして、生絲原量百斤に對して、日本生絲は一斤九分だけ伊佛絲より買受不利益の存する所なり。

一斤九分は之れ公定水分より以上の水分にして、生絲の實買夫丈け少なきを示す、今百斤千圓の生絲とすれば、十八圓は伊佛絲より高價なるの理なり。

然るに練減の方面より價格に及ぼす影響を見るに左の如し即ち前表各國生絲の練減率に於て、日本絲より多きこと伊國絲は五分五厘支那種は二分五厘より多きこと伊佛絲の總平均に於て、日本絲よりなるを以て、伊國絲は四分七厘支那種は二分五厘なるなり、之れを一般に計算すれば、伊佛絲は五分二厘にして無水量百斤の價格に取引せらるゝものなり、次に練減に於ては更に大なるものあり。

	練減率	練減量	練減の價
日本絲	100g－11g70＝88g30	100kg－11kg70＝88kg30	100kg＋117kg＝1117kg
伊國絲	100g－16g50＝83g50	100kg－16kg50＝83kg50	100kg＋165kg＝1165kg
伊佛絲	100g－14g50＝85g50	100kg－14kg50＝85kg50	100kg＋145kg＝1145kg
支那種	100g－12g50＝87g50	100kg－12kg50＝87kg50	100kg＋125kg＝1125kg

即ち日本絲は原量百斤千圓にて買ふとすれば、其實際は八十八斤二分四厘の生絲量にして無水量百斤の價は千百十七圓六十錢に相當し伊國絲は五分七厘支那種は二分五厘の生絲量にして無水量百斤の價は千百十七圓六十錢に相當し伊佛絲は五分二厘にして無水量百斤の價は千百十七圓六十錢に相當し伊國絲は四分七厘支那種は二分五厘にして實際八十九斤一分二厘にして無水量百斤の價格に取引せらるゝものなり、次に練減に於ては更に大なるものあり。

	練減率	練減量	練減の價
日本絲	100g－18g70＝81g30	100kg－18kg70＝81kg30	100kg＋187kg＝1187kg
伊國絲	100g－24g50＝75g50	100kg－24kg50＝75kg50	100kg＋245kg＝1245kg
伊佛絲	100g－21g50＝78g50	100kg－21kg50＝78kg50	100kg＋215kg＝1215kg
支那種	100g－21g50＝78g50	100kg－21kg50＝78kg50	100kg＋215kg＝1215kg

即ち原量百斤に對する練減少合を以上の如しとすれば、日本生絲は原量百千圓にて買ふときは其練減後の實際は八十一斤九分五厘の生絲量にして精練絲とすれば百斤の價千百八十圓五十錢に相當し實際の伊國絲は實量七十五斤七分にして精練すれば百斤の價千二百四十五圓と云ふ高價となるの理なり而して世界生絲の平均に於て百斤のものは七十八斤四分八厘に減じ、生絲實買百斤を得るには千二百十五圓二十錢を要す之れ原量百斤の價格千圓としての計算なるに猶且つ練減の爲め僅かに百斤の取引に於て已に二百數十圓の差異を來す所以のもの、此に伏在するを思はば豈に忽せにして可ならんや。

然るに水分量に於ては、約此半數なるにあらずや、今兩者相合算するときは更に驚くべき差額あるを見る。

日本絲　100－11g70＋18g30＝6g60　100kg－11kg70＋18kg30＝6kg60　100kg＋18kg30＝1318kg30

伊國絲　100－16g50＋24g50＝8g50　100kg－16kg50＋24kg50＝8kg50　100kg＋245kg＝1245kg

即ち原量百斤千圓なるとき、日本絲の實買生絲は七十斤一分九厘にして實量百斤を得るには千二百九十八圓十錢なるに伊國絲は六十斤一分八厘にして實際生絲九百斤は千三百五十一圓八十錢の高價を拂はざるべからず、嗚呼世人は以上の消息を解するものは起て萬國公定練減率を主張せよ。

然り水分量は時により所により人により各異なり、現に各國生絲の其生産の(所)によりて練減を異にし、春秋又之れを異にし其産する一品々々が同じく多少の增減(を)あらずや、而已ならず人爲は之れを水分量と同じく多少の增減あることを得、つや近來生絲增量法の行はるゝに於て益々其練減一定率の必要なるを感ぜんばあらず。

●生絲輸送上の注意

鐵道難にては生絲輸送に關し發送驛及び所管營業事務所に對し(一)生絲發送賃車の請求に對しては機宜な誤らず最も敏速に配給を爲し(二)其貨車に屋上に如何戸庫建行等より受ける雨浸の損失ときの爲の又外面より油光の開なきや否や各數車に檢査し且つるべ故列車に連結發送すべき貨物を發しこれなくべし

なるや今試に兩者が及ぼす關係を見るに左の如し。

	練減率	水分量	練減量	練減の價
日本絲	100g－18g70＝81g30	100g－11g70＝88g30	100kg－18kg70＝81kg30	100kg＋187kg＝1187kg
伊國絲	100g－24g50＝75g50	100g－16g50＝83g50	100kg－24kg50＝75kg50	100kg＋245kg＝1245kg
伊佛絲	100g－21g50＝78g50	100g－14g50＝85g50	100kg－21kg50＝78kg50	100kg＋215kg＝1215kg
支那種	100g－21g50＝78g50	100g－12g50＝87g50	100kg－21kg50＝78kg50	100kg＋215kg＝1215kg

製絲業の前途に就て

學士 農學士 足立元太郎氏談
生絲檢査所技師

新絲の季節も間近く相成りまして既に新絲の走り物は二括程横濱にて手合のあつた今日はとはなりて既に今日に至る此年度の生産高は横濱開港以來未曾有の變調を現出しました爲めに、製絲家諸君の内には意外の損失を蒙られた方も尠なからずあります爲めに、製絲業の前途を非常に悲觀せらるゝ方も尠くない樣に、永つて居りますが、私の見る處では之れまでの損失は、今日迄の處では極めて有望であるうと思ひます、何故極めて有望であるかと申しますれば、先づ本年の養蠶も今年は豊作の處で、蚕の通過年齢も例の相場で毎年の最高値に達して取引の安値なる四圓に始まり、三河の走り本年の繭相場も此邊が高値と見て可なりの値段で取引に成つたと申しますれば、今年は蚕の成育も順調で、蚕の成育は、今日迄の處では、蚕の成育は、今日迄の處では、蚕の成育は、今日迄の處では

商況の面白からざりしこともありました故え之を氣遣はれる方も有りまするが、大統領が代つて其施政の方針に大變動があろうと云場合には何とも申兼ますが、若し彼の「タフト」氏でも當選することが確實に成りますれば何の影響も有るまいと思はれます、現に明治三十七年は選擧の年でしたが「ルーズベルト」氏の當選が確實であつた上に、日本新絲の値段が八百五十圓と云安値に始まりましたので、御承知の通り三十七年は稀な好景氣の年柄であつたです本年も三十七年と同樣なことではあるまいかと思はれます。

だが、前途を益有望ならしむる爲めには茲に製絲家諸君の熟考を煩はしたい事が有ります、又た大決斷をも乞ひたい事があります。

先づ第一御熟考を願ひたいことは、日本生絲が昨年既に二十萬個に達し尚此上何程增進しますか或は數年を出ずして現今の倍額に達することなしと云ひ難きこと、第二は米國の生絲需要者は從來生絲の買入れをなすに當り其纎度の如き生絲商の言處に信賴して自ら進で生絲檢査所の檢査を受くることは甚だ稀なりしに近來買入生絲檢査の必要を感じ紐育市に在來の生絲檢査所の外に合衆國蠶絲檢査會社なるものを設立し既に本年一月より開業したれば之まで信用せられたる生絲も檢査の結果信用を失することなきを保し難きこと、第三には米國では撚絲にて染上げ織物となすが通例なりしが近來色物となすべき織物を白地にて織上げ賣れ行好き色合に織物にて染ることが織物商間に流行し出したる處此種の織物には伊佛の生絲が強伸力に富むが故に最も適當なりと云者ありて昨年の如きは大に伊佛生絲の需要を增せりと云ことである日本生絲の產額が益增加することは吾人の賀ずべきことて、之れが增進の速かならんことは吾人の期せざる可からざることである、然れども產額の增進に伴ふて需要の途が開けざれば之れ國家の一大事と云はねばならぬては有りませぬか、そこで前へに申ました樣な次第も御座りまするのに、此儘改良する處もなくても產額の增進に伴ふて需要の途を開くことが出來得ることでありましようか、實に心配に堪へませぬ、先つ日本生絲の纎度に就て御話して見ますれば、何れの外國市場にても細なら 11/12 太なら 13/15 として格合に從て相場を發表してありまするが、現今の處太で

13/15受合と云品は日本中に何程ありまするが、14/16荷造りをすると云方でさへ多くは無と思はれます、11/13甚だしきは10/19と云はねばならぬ生絲が多々あると云始末でありまする斯く申ますれば、でも之まで差支なく賣れて居るではないかと云はれる方もありましようが、之れは之まで日本生絲の多數が緯絲組物緯絲と云樣な處へ用ひられて居りまするから差支ないので、緯絲と組物の需要は左程廣いものではありませぬ、又緯絲ばかりでは織物に成りますまい、どを致しましても產額の增進に伴つて品位の改良が最も必要であると思はれます。

日本生絲の大需要地なる米國の機業家の如きは、年一年大急速なる進步をなしつゝありまするので、始めの程は經絲は伊佛の生絲でなければならぬ樣に考て居つたのが、近來日本の飛切上物を經絲に試用し其結果の良好なりしものは、殆ど全部先約束をして買入れる樣になり、近頃では頻りに日本生絲の經絲に適當なものを捜して居る樣な次第で、私が紐育にて訪問した撚屋や機屋の內には若し日本が伊佛の如く生絲を改良し、經絲に使用し得るものが多數ある樣にならば、我等は日本生絲のみを使用して、伊佛の生絲は使用せざるべしと云て居つたものも多數有つたです、之れは日本生絲には種種なる特點があるからです、申して見ますれば、伊佛の生絲は練減が多くは二割四分稀には二割七分もあるのに、日本生絲の練減は多くは一割七、八分稀に多いと云ても二割一分位である、又た伊佛生絲の多くは黃色であつて純白や薄色を織るに不便であるが、日本生絲は全部白色なれば純白は勿論何樣なる薄色にも適するのである、で有るから若し日本生絲が伊佛生絲と同等の地位に進めば、米國の生絲市場は日本で占領することも不可能ではないでしよう、米國ばかりでなく歐州の生絲市場を日本が蹂躙することも出來得べからざることでは有りますまい、然らば日本生絲の多數が經絲の原料に成り得るまで改良することが出來ますれば、產額が急に現今の倍額に達しましても少しも心配することは有りますまい、私は製絲家諸君が充分熟考せられ、本年の新絲より大決斷をせられて生絲を改良せられんことを希望致ます、私は製絲家諸君が大いに決斷せらるゝ處あらば改良は極めて容易であると確信して居ります、何故ならば私の見る處では此改良を施しまして經絲の原料となるべき生絲を多數產出しまするのに別段の技術を必要とするのでもありませず、又製造費を非常に增すと云樣なこともありませぬからです、然らばどうして改良するかと申しますれば、一大合同です、日本生絲の之まで經絲の原料に用ひられざりしは、纎度の均一ならざるが一大原因であつたです、而して纎度を均一になし能はざりし一因は製絲家の規模が小さきものが多かつたからです、例へば小規模の製絲家が十四「デニール」目的で製された生絲が皆十四「デニール」出來上ることは先づ無ひと申て可なりでありましよう、各製絲場の檢査纎度帳簿を御覽に成れば御了解になることて、隨分手際の善ひ製絲場でも百本檢查した內には十二や十七と云樣な「デニール」のが尠くないものです、少しく手際の惡しき分には十も有れは二十もあると云樣な次第で8/10と云が如き荷造をすれば、賣樣の無きものが殘留する

ので止むを得ず平均が十四前後になれば可なりとして十「デニール」のものも十丸「デニール」のものもごたまぜにして荷造りされる向きも隨分有るのです、若し小製絲家諸君は勿論大製絲家と雖ども共に合同せられて、一定の方法で嚴重なる檢査を施し、一定の方法に依り、捻造の儘之れを一ケ所に取纏め、色澤を揃へて搾造をなすとすれば、如何なる纖度の生絲も經絲の原料として荷造くるを得べくして、小製絲家「デニール」外れと云べきものも上等なる經絲の原料たるを得べきではありませぬか。

（六月二日記）

懸賞募集　一と口噺

（第五回投稿）

愛知　銀波

天賞

◎人肉喰ひ

甲「臺灣の生蕃人が人肉を喰ふさうだな、怖しい奴が居るものだね」

乙「ナーニ、内地にも澤山居るよ、親の腹を噛ぢる奴等が」

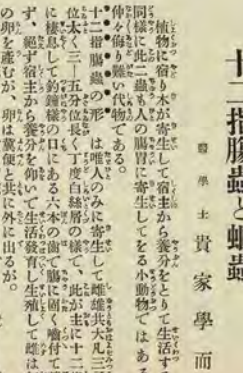
十二指腸蟲と蛔蟲

醫學士　貴家學而

植物に寄り木が寄生して宿主から養分をとりて生活すると同様に此二蟲も人の腸胃に寄生してをる小動物ではあるが、伸々偏々嫌い代物である。

十二指腸蟲の形は、唯人のみに寄生して雌雄共大凡三子絲位太く三—五分位長く丁度白絲の様で、此が主に十二指腸の口に固くかぶり付て離れず、絶ず宿主から養分を仰いで生活發育し生殖して雌は無數の卵を產む。卵は糞便と共に外に出るが。

寄生　一體何うして人に寄生するかと云ふに、卵のある糞便が肥料として田畑に用ひらるゝと蟲卵は土壤内は勿論ある糞便が附着し、或は雨水と共に池沼川溝内に流込み居るのも知らず野菜を洗ひ生食する時、或は又食器湯するが儘に汚水を飲み



て大抵の人は、此に襲はれざる者はなく其形は蛔蚓に似て口には極小の三枚の歯があるが、尾の形で雌雄を區別することが出來る、即雌は腸の内で生殖して產卵するが、一匹の雌は優に六億の卵を出す實に驚く可きではないか、此卵は糞便と共に外に出るが、十二指腸蟲と殆ど同じ經路をとつて何かの機會に口に入ると、胃腸で卵殼を破つて仔蟲が生まれ、大凡九週間後には立派の母蟲となつて切りに產卵をする。

此蟲は主として小腸に棲息するが、折々上に來て胃の内に飛上り、又殊に小兒では睡眠時に喉から口鼻の孔に出て來ることもある、又自然に肛門からも出る、人の外には豚とか牛にも寄生してをる。

病徴　極無害の寄生蟲であるが、折々皮膚、鼻孔等が何となく痒味を覺え、食慾が無なり、俗稱「蟲酢が湧く」とて嘔吐液が始終出て來る、時々は激しく嘔吐下痢することがある、此時眼玉の暗孔を見ると通常より廣くなつてをる、殊に小兒では烈しき神經攣を起して種種様に眼口を喰しばり（俗稱「ひきつ

に附着して卵は口に入り胃に下り、殼で卵殼が破れて中から仔蟲が解化して十二指腸部に寄生し早や六七週を經ると一母蟲となるのである。

此蟲は日本では埼玉に殊に多く流行してをるが、各地にも決して稀でない、一體熱帶地方には到所にあるが、殊及伊太利に殊に多く、隧道鑿山に働く工夫又獨乙では棟梁職工等が罹ることが夥しいが、何れも不潔不衛生の生活が關係してをるであろう。

病徴　此蟲が寄生すると其人は、皮膚が蒼白に膨れ血の氣全く失せ全身倦怠を感じ働かず計りの勞働にも胸苦しく動悸頭痛耳鳴眩暈を覺え一般に「むくみ」を起し時々腹痛を感じ食慾なく折々糞便に血が混じて出る、斯樣な容態の時其人の糞便を顧微鏡下で觀ると容易に卵殼蟲卵の存在を知るを得るのです卵は形卵内に二三の小球が塊りをなしてあるのが十二指腸蟲卵に特有で直樣診斷が付きます。

十二指腸蟲自然大

病源　何故に此蟲が寄生すれば貧血（青白くなる）を起すかと申すと、書は「蟲が十二指腸に居つて胃腸から消化して來る滋養分を吸取るから營養がわるくなるのである」といひ一蟲は腸壁に罹かと喰付き蛭の樣に血を吸出して生活し、又噛付た所から血が出て結局血を失ふことが多いからである」とも云ふが、蟲が生きてをる間は左程でないが、一旦死滅すると、其の屍骸の内には毒があつて

十二指腸蟲と蛔蟲

驅蟲法及豫防法　は醫者の手に依つより仕方がないが、豫防法として總て清潔にし、飲料水殊に小川溝内の汚水等を口にすることは勿論食料食器の洗滌は大に慎むべきことで又野菜を生食することは力めて避く可き事である。

蛔蟲　此は日常人の熟知する蟲で、此は尾の形で雌雄を區別することが出來る、雌は長く曲つて居る、此蟲は主として小腸に棲息するが、折々上に來て胃の内に飛上り、又殊に小兒では睡眠時に喉から口鼻の孔に出て來ることもある、又自然に肛門からも出る、人の外には豚とか牛にも寄生してをる。

病徴　極無害の寄生蟲であるが、折々皮膚、鼻孔等が何となく痒味を覺え、食慾が無なり、俗稱「蟲酢が湧く」とて嘔吐液が始終出て來る、時々は激しく嘔吐下痢することがある、此時眼玉の暗孔を見ると通常より廣くなつてをる、殊に小兒では烈しき神經攣を起して種種様に眼口を喰しばり（俗稱「ひきつ

ける）一時精神が衰弱する等の徴候が悉く消滅するのであるから、周圍の人は驚くまい事か醫者自らも狼狽することが往々ある、又た多數の蟲が、塊となして腸管を塞げて糞便が出なくなり、又吸に支へて人を窒息させることもあるので、決して蟯蟲位だからと云て馬鹿には出來ぬ。

背以來の經驗で素人にも大丸當がつくが、慥なことは醫者に糞便の檢査をして貰ふがよいのである。

ある時には先づ糞便を檢べるのが順であるが、卵は矢張卵圓形で十二指腸蟲よりも遙に大きく厚い二重の殼の內には粒（小した物があるが、殼の外には絢べら〳〵したものて包まれてをるので、少しく經驗すれば容易に見出せるものである。

療法　坊間にある驅除劑で大抵退出し得るが唯下し藥のみでは いかぬ、驅蟲劑を飲んだ後には下劑をかけると驅蟲劑で昏睡に陷ちる蟲が下劑で早く腸を去るのであるから其だ宜しい、一體蟯蟲は子供に多いが別に藥を餘計食ふから蟲が湧くといふ方で多くの卵を飲込む機會が多いのであろう、故に前章に述べた通り、清潔衛生法が適用せらるゝのであるから、蟯蟲は常に家庭藥のとして驅蟲劑を供へ、蟯蟲の徵候なくとも、少くとも二三ヶ月に一回位子供に服用させて蟲を驅出することを私は切に希望致す。

明治篇界の元勳

松永伍作君

恨は長し挽歌の韻

明治四十一年四月一日、京都篇業講習所長松永伍作君逝く。

長恨何を堪へん。人の德天の先に入れるもの、三千世界又能く暗黑の視ら來るを逃れず。雖も、國らざりき明治篇界の元勳として一世に師表たし松永先生にして爾かく早く世を隔てゝ給はんとは、只憶を君の偉業に計へて、天の君に假すに、十年を以てせざるを悲しむのみ、計手に落つるや、西風蒼茫たる中に、一家を挽つて急に陽に、蒼夢心に閉して夜雨頓なり。吾人湖山の一家言を敢て學ばずと雖も亦以て君の遺事を傳へんと欲す、只嘆くらくは、君の遺日、惟に光の夕東西の篇業家、親疎皆擧りて嘆泣せるもの三月盡日、惟しむべし何の徵ぞや、鳥雀暮林に悲み、悲風之れ明治篇界の元勳松永先生の死を悼み、拈香魂を反へして洛郊を隔てゝ衣笠野に光の夕東西の篇業家、親疎皆擧りて嘆泣せるもの其遺容に見えんと欲するの感なり。

面して君の篇業講習所長松永伍作君の其試驗事業は、明治篇界の元勳松永先生の死を悼み、拈香魂を反へして洛郊を隔てゝ衣笠野に光の夕東西の篇業家、親疎皆擧りて嘆泣せるもの其遺容に見えんと欲するの感なり。

山頂に長煙の纏へたるもの、之れ實に萬哭の因たり。いて や纏へたる長煙の指示するに從ひて、君か傷を數へ、業を稱へ、以て君が不滅の化浴を長く後昆に傳へんかな。

君が官歴

君が官歴は、又君が一面の篇業畫藝史たり。面して此活歴史の第一頁は實に明治九年四月に始れり。時に君拾も勵局試驗場に入り、春を以て五月、宮內省植物御苑養蠶掛を命ぜられ、越えて明治十二年に君が官歴は、又君が一面の篇業畫藝史たり。面して此活歴史の第一頁は實に明治九年四月に始れり。時に君拾も勵局試驗場に入り、春を以て五月、宮內省植物御苑養蠶掛を命ぜられ、越えて明治十二年に及びて篇界の奇傑佐々木長淳翁の屬僚となり、清翁と共に君が風骨を表すして至れり。

然るに翌十三年に至り佐々木氏の御苑總括伊地正治氏と放を以て相離れ、未だ遽に解し去るに、官を辭するの止むを得ざるに至れり。然れども、君は即ち自ら府下千駄谷村に移り、中臂の頃といへども抽手せんや、君は即ち自ら府下千駄谷村に移り、中臂の頃といへども抽手せんや、辛酸を嘗めみて之れ篇業に其效を奏せず、一敗地に塗れて、遂に天未だ君に與せざること、遺憾く谷まらんとせり、然るに天未だ君に與せざること、遺憾く谷まらんとせり、然るに天未だ君に與せざること、厚かりしか、明治十七年四月、農務局篇業試驗場の廻町區山下町に開設せらるゝに至て、君偶々時の農商務省の知遇を得、遂に拔擢せられて同場に入り專心一意其試驗事務に力むると同時に又大に之れが研鑽に意を傾ゝ、同年同場の規模擴張せられて篇業試驗場となり、西ヶ原に移さるゝに及びて君農商務省に奏加して五月同省技手に任ぜられてより風日雨日日夜孜々として戰務に盡すこと正に十ヶ年、其間些の倦怠を見ざりしは眞に君にあらずして常人の企て及ぶところにあらざるなり。

明治二十九年三月、篇業講習所官制の發布せらるゝに及びて四月、篇業講習所技師に任ぜられ、同年十月、篇業講習所長に任ぜられ、全國數萬の篇業家に對し、亞く道、習、所、技、師、圖、殺、氏、傳、君、逝、く

（係業現盛隆製間風の品賞及び興趣の受受）

（山頂）

武井文太郎氏

墨者本會第三篇題

の徒弟を有するに至りぬ、君が官歴や、此の如く育多くは教育の上に存す。君は、同より一世を斷ずる篇業の上に存す。君は、篇業の學者にあらず、其教育の上に存す。君は、篇業の學者にあらず、得て

と雖も刻苦數十年にして克ち得たるところは他の金及び技を以てして篇界養育の事に當るざる實技のあるあり。此實技を以てして篇界養育の事に當る今日篇界に君か篇陶を受けて或は技師となり或は技師となり東西中邊に在て篇業の基礎を爲せるもの少からざるに微せば君か遺業も亦なるといふべからずや。然れども此の如きは、未だ君が遺績の一班のみ、眞に一班のみ、願くは次號を待つて再人が言はんと欲するところを聽け。（未完）

秋蠶の話（承前）

學藝委員 蠶業講習所技師　土屋泰

空氣の交換

凡そ動物の生活上新鮮なる空氣の必要なることは、既に人の知る處である、特に蠶の如きは、一室内に多數密集せしめて置くからして、其呼氣の爲に室内の空氣は不潔に爲り易いのである、不潔の空氣と云ふは、炭酸瓦斯や水蒸氣や、其他蠶糞などより發散する諸種の氣體か、多量に混したるものを云ふのである、不潔なる空氣中に於て生育すれは、何れの動物ても健康を害されて、無事に發育を遂くることは出來ない由來蠶と云ふ蟲は、一面から觀察すれは、極めて育ち易い健康なる蟲の樣に思はれる、何となれは蠶の眠り起きすへ判別の出來ぬ樣な何も知らぬ者が、何の設備もない客間の片隅で塗盆や何かに入れて、除沙も碌々せずに飼育しても、僅か百頭か二百頭の蠶てあつたなら、大概健全に發育して、結構な繭を作るてはないか、此點から觀れは甚た育ち易い蟲と云はねばならぬ、然るに又他の一面から觀察すれは、數十年來の經驗を積みたる巧者が、諸般の設備の整ひたる蠶室に於て、晝夜精力を盡して飼育しても、偶には病氣を起させて失敗することもある、現に年々失敗者が鮮くない、此點から觀ると飼育の難いものゝ樣にも思はるゝ。

斯く二樣に觀察の出來るのは、如何なる譯であるかと云ふに畢竟室内に收容する蠶の頭數が異なる爲に、諸般の關係が總て異なる結果である、即ち前者は何等の設備がなくとも、何等の心配をせずとも、室内の空氣が不潔になつて、夫れが爲に蠶の衞生を害する樣なとはない、又除沙の手當を怠つて爲も、桑沙は自然に乾燥し其宜しきに適ふて、蠶座の多濕なる爲に害を被むる樣のこともない、然るに後者は一室内に飼育する頭數が多いので、天窓や欄間を開いて、常に空氣の流通を促したり、又除沙を數々行ふて蠶座の多濕不潔を防ぎたり剰さへ火力を用ゐて乾燥を促したりしても、尚且前者の如く室内の空氣の清潔を保つことが出來ぬ、之が爲めに晝夜精力を盡して保護し手當を加へた積りでも、稍もすれば病蠶を出すのである、若しも多數の蠶を飼育する者が、少數を飼育する者の如く無頓着で居つたならば、恐らくは一顆の繭も得られぬのである、之に反して少數飼育する場合と同じ樣に、常に室内の空氣の清潔を保ち得たならば、其結果は少數飼育者と一樣に上出來の筈である、要するに蠶は本來は育ち易い強健のものであるが、之を狹い室に澤山密集させて飼育するから、夫れて育ち難くなる、此道理を能く含味したならば、蠶室の空氣を交換せしめて、常に其清潔を保たすことの、育蠶上如何に大切なる事柄であるかと云ふことは、略會得せらるることゝ思ふ。

然らば空氣を交換するには、如何なる方法に依るを得策とするか、或は回數を定めて、一晝夜間何回行ふへしとか云ふ者もあるが、此説には贊成が出來ぬ、蠶の呼吸作用は、一時片時も休みはない、故に不斷新しき空氣を供給して、汚穢せる空氣と交換せねはならぬ、即ち室内に火力を用ゐてある場合は天窓や欄間抔を適宜に開いて、汚穢せる空氣は之を上方に排除し新しき空氣をは常に下方より入るゝのである、併し下方には特別に空氣の入口を設けずとも、紙障子なれば紙の面よりも空氣は入り來る、又床板や戸障子の間隙からも入り來るから、只出口を開きさへすれは、稚蠶期中なとは概ね足るのである、而して空氣交換の速度は、其室内に入れてある蠶の分量と、温度の高低とに鑑みて緩急其度を異にすへきものてある、室に一抔蠶か在る場合や、高温度のときは交換の速度を急に之に反する場合は緩にして宜しい、殊に火力を用ゐて補温する間は、妄りに空氣を流通さすれは、補温の目的を達することか出來ぬ、故に側面の戸障子は開かすに、單に天窓のみにて加減して排氣を調節し、補温に便するのである

水會第三回總會に於て名譽の賞狀及賞品の贈與を受く

（宮城縣佐野製絲場現業係）
長野榮倫氏

火力を用ゐずして温度に差支へのない場合に至らは、天窓欄間は勿論周圍の戸障子も適宜に開きて、速に空氣の交換が出來る樣にするか宜しい、換言すれは天然の温度が七十度に達したならば、春夏秋蠶の別なく、強風てない限り飼育室は開放する方が、蠶の健康上安全である、而して温度が高ければ高くなる程蠶の發育が速くなるから、同時に新しき空氣の必要も亦急てある。

又室内に一抔に飼育するものと半分位飼育するものとは、空氣を交換する速度も倍半分になる譯である、例せば八疊一室に四十枚の蠶箔を挿してあるものが、二時間を以て適度なりと假定すれば、同じ室に八十枚の蠶箔を挿してあるものは、一時間毎に全室の空氣の交換を了る速度でなければならぬ譯である。然れ共蠶箔が多くなれば多くなる程、空氣の流通が不良の狀態になるからして、實際は八十枚のものは、右の割合よりも一層換氣を速かにするの必要がある、斯の如き次第であるから、一定容積の室内に於て、飼育すべき蠶の數量に就ては、略ぼ限度がある、此限度に就て實驗上から調べて見るに、室の構造は概ね完備して居るものと見て、一立方尺の容積に、五齡盛食期の蠶なれば三十頭位を限りとするが安全であると思ふ、若し室の構造が

不備であるならば、其の程度に從ふて段々頭數を減ずるが宜しい。

以上述べ來りたる處を更に約言すれば、左の如くである。

(一)蠶兒は本來育ち易き强健なる性質である

(二)然るに事實育ち難い樣の感じのあるのは、一室内に多數密集せしむるからである

(三)密集せしむるの弊は、飼育室内に於ける空氣の清潔を保たしむること能はざることに歸着する

(四)故に養蠶室は保溫に差支へなき限り開放して空氣の交換を速かならしむるを安全とす

(五)而して一定容積の室内に入る、蠶は、事情の許す限り少數にすること

序に一言すべきことがある、養蠶室は成るべく空氣の流通自在なる狀態にして置くべきものであるから、蠶架に餘廉があるならば、蠶箔は一處に集めて挿入せずに、所謂五の目に挿して、蠶箔と蠶箔との距離を成るべく遠くする樣に致した方が、空氣の流通を自在にすると同時に、桑沙の乾燥を速かならしむるに就て頗る有効なる處置である。（未完）

淺響

關東省に於ける普通農民の飼育せし夏蠶の成績

在常陸國
造常會員　住吉正喜

蠶種は七月七日（明治四十年）當所に於て博立てし蟻蠶の中二反六分を分讓八日早朝携行せしものにして、之を二分し二人にて飼育せりと云ふ。

同地は當地を距る日里約三里にして飼育中不幸にして事務多忙の爲め、視察する能はざりしも飼育法については豫め予が說明し置きしに依り、育蠶中充分の注意と懇切とを以て之れに當れりと、今其聞き得たる所の大要を記すれば左の如し。

飼育室は韓國の在來の溫突室にして寢室の一半を以て之に充て朝夕二回炊爨の際焚火をなせりと、而して蠶具は別に製せしに非ずして有合せ器具を蠶箔に代用し蠶架を設けて飼育せしと云へり。

桑葉は全部在來の畑不より摘桑し來り、一、二、三、四の各齡には對桑して第五齡には丸葉を每日十回宛給し、除沙は第四齡迄悪又は粗惡に使用し第五齡には手を以て每日一回宛之を行ひしと。

病蠶及數は不定）後蠶體軟弱にして次體に黑點を現はし、其個所に黑色に變し若し手を以て之に觸るるときは體皮破れて一種の悪臭ありと云へば、蛆害蠶なるべく、念の爲め當所に於て蛆害蠶を見せしに全く同樣なりと云へり、而して其蛆害の步合に至りては詳知する能はざれども多かりしが如し。

蠶兒の經過に就ては其詳細を知る能はざれども本人の語る所によれば大要左表の如し。

	第一齡	第二齡	第三齡	第四齡	第五齡
收蟻	七月七日	七月十一日	七月十四日	七月十八日	七月廿二日
餘蟻月日	午前	朝	朝	朝	朝
蛆害月日	七月十四日	七月十六日	七月十七日	七月廿一日	七月廿六日
	夕	夕	夕	夕	夕

前表により之を見るに勿論食桑の時數中時數等を詳知する能はざれども、金飼育日數は十九日にて普通夏蠶に比し多少短かきが如し、これ溫突室中面かも朝夕二回宛の焚火をなせりとて、之が影響を蠶兒に及ぼし其發育をして急速ならしめしなるべし。

七月三十日に至り收繭せりとして三四十粒當所に持參せしものを見るに繭形は小にして一粒三百七八十粒乃至四百粒内外を容め得べきならんも、其緊緻は敷て不良なるに非ず只光澤の不良なるは飼育室に充てしものが溫突室のことと又己を得ざるべし、知新として收めし成繭は日桝二斗内外なりしと云へば、先づ普通韓人の飼育せしものとしては蓋し不良ならざるべし。

御本年秋期に於て秋蠶種を要求するもの右夏蠶飼育者始め十數名道程遠近を問はず當所を知れるものは、老婦和携へて來所せしも生憎當所に於て飼育する蠶種にも不足を告ぐる始末にて之等韓人の折角の要求をも容へ能はざりし眞實に遺憾とする所なりし、而して來所せしもの、多くは四十一年度夏秋蠶の請求をなすもの少からず、韓人の事として直に其眞否判斷をなす能はざれども多少養蠶てふ觀念の萌せしが如し。

新繭と蠶蝕況

（上海武林洋行五月二十日報）

紹興繭の產地たる新昌縣より十八日當市への入電。

生繭百斤　五十二元

今此の電文を解き廣めんに五十二元の紹興生繭貳百九十斤を以て乾繭百斤を得べし、依て此五十元八十仙となる而して生繭の價貴及產地より上海迄の諸掛三十弗を加へ、乾繭百斤上海着價八百八十弗八十仙、上海百三十三兩となる、然るに生絲の價八百五十兩を要すべし、即ち原料繭價五百九十八兩內玉繭屑物約三十兩の價額

あるものとし、之れを引き更に繭撰別費及輸出諸費用を加算し、本邦神戸揚着價（為替八五と見て）七百貳十壹圓八十錢四十五銭となる。

蠶兒發育の經過

蠶兒孵立より三眠迄は天候概ね降雨勝ちにして寒温常ならず、時々冷氣を催し、發育に適せず、三齡以降晴曇亦定まらなく、適順たるを得ず、之れが上簇に際し曇天或は降雨少からず、兎角氣候に適せず、收繭上不寡影響ある可し、當業者の談に依れば、何れも四歩以上の作柄なりと。

繭取引狀況

昨年該地方に於ける繭行の開きあるもの七十五ケ所に達し、當年僅かに四十二ケ所に過ず本年上海繭取引期は概ね四月千三百擔内外たる可し。

無霜地方は掃立紹興地より殆と一週間期遅きが如く、掃立以來氣候順調なるを得ば紹興に比し稍々良好の結果を見るならん（作柄は六歩と豫報ありたり）蠶兒上簇は來る二十四五日頃なる可し。

繭行の開き

族地・蘭相場上海同業者豫想大約百斤四十弗見込なるも實際取引の行はるゝの際は四十五弗内外なるべく、取引開始は來る二十七八日頃の豫定なり。

魯桑の蒸桑給與に就ての質問

通常會員 酒卷林太郎

魯桑の摘葉を拾時間以上拾六時間位詰に入れ甚しく蒸熱を醸したるものを良桑と混合して給與したならば其結果はどうなるでありませうか。

答

學藝委員 土屋泰

一旦發熱したる桑は香らざる桑に比して不良なるは勿論なれども、發熱甚しくない、即ち葉の外觀に何等の異狀を呈さざる程度のものは、之を蠶に與ふるも、毫に發病することはない。

微粒子に就ての質問

通常會員 齋藤重美

（一）秋蠶原種用の無霜の原種を掃立蠶室蠶具は嚴に消毒し、其成績より原種用を製種するに、往々にして其病毒率數以上に及ぶことがある、此れ如何なる理由に歸するのせう、病毒は原因に寄生する微粒子病の繁殖を促すと云ふ、此れ病毒の誘因にして素因ではあるまい、又其繁殖の度は高温（八九十度）過乾（兩球の差七八度より十度）と多温（兩球差二三度）と低温（七十度以下）とに飼育する時は何れか病毒の繁殖多いでせう。

（二）微粒子は蠶體に於て繁殖するものにして、外界の空氣中又は蠶室蠶具に於て繁殖するものではないか。

（三）微粒子病の減少を計る爲め、蠶兒飼育中其蠶室蠶具を消毒するのは効力があるでせうか、又其消毒は如何なる方法を可とするでありませうか。

答

學藝委員 林驥作

（一）母蛾檢査の結果は無毒でも、其蠶種は必ずしも完全に無毒であるとは云はれない場合がある、何ぜならば病毒は雄蛾より卵面に附着することが多くて卵面に附着することなどがあるからである、而して原蠶種となるものには殊に此傾きがある、且つ新の如き蠶種より發生せる蠶兒は例令自身には病毒を含有せぬにもせよ、容易に他より感染するものである、蠶室蠶具は如何に嚴密に消毒しても前記の如く蠶種に病毒が附着して居れば其病毒は發病し蔓延する恐がある、桑葉其他野外の昆蟲にも同じ病氣があるから、其等の病毒が桑葉と共に侵入する場合もないとは限らぬ、尤も此等の病毒傳染の徑路は左程大したものではあるまいが、一旦病毒が侵入を受くれば飼育法の如何によりて大に被害することがあるのである、要するに原種の掃立て充分に病毒を消毒せる蠶室にて飼育すればとて病毒はない筈であるとは油斷するのが大敵の本である、勿論母蛾の檢査も必要な仕事ではあるが、飼育中は常に幾分かの病毒は存在する積りで從事することが肝要である。

（二）高温多濕は微粒子病毒繁殖の誘因である、多濕は最も病毒の繁殖に適し、又高温である故、此場合にも又繁殖することが多い、乾燥は微粒子病毒繁殖の誘因である故、此場合は高温である故、此場合にも又繁殖することが多い、乾燥の時は尤も少ないのである。

（三）微粒子は活物に寄生し活を營むものである、空中とか、又は蠶具等の如き死物に寄生することは能はぬものである。

（四）飼育中時々蠶室や蠶具を消毒すれば微粒子病を減少するに有効なることは勿論である、併しながら養蠶中の消毒は色々煙硫を用ひて到底十分に之を行ふことが出來ない、故に飼育中は蠶具類をば成る可く日光に曝らす樣にするがよい、且つ蠶室内の温濕度を加減し、蠶座の清潔を計かり、間接に之を防ぐの外はない、蠶座に「フォルマリン」を撒布して消毒せんとするが如きは却て有害であるから行ふては

問答

風穴夏秋蠶種に就ての質問

岐阜縣通常會員　松村幸八

（一）當地方では風穴蠶種を夏蠶に飼育しても、天然温度で催青するも、十七八日の長時日を要する爲に成繭は劣等である、仍て火力を使用し十二三日で發生せしめ、之を豫防しようと思ふが其處理法は如何にしたならば宜しいでせう。

（二）乍併火力に依りて催青すれば乾燥に過ぐることが往々ありて爲に發生が不齊一となるの虞れがある、此際に於ける温法は如何にしたならば宜しいでせう。

（三）又左の件を伺ひたい。

（イ）風穴夏秋蠶出穴の際の温度の高低に依て發生の不齊一となるは如何。

（ロ）温度の高低と胚子發達の遲速は如何。

（ハ）温度低下して化性に變化を來す理由は如何。

本郡第三勸業會に於て名譽の賞狀及賞品を授與せらる

（岡山縣蚕業試驗場）小寺利喜子

答　技山形縣師範　河西大彌

（一）風穴に貯藏せし蠶種を夏蠶に飼育するに際し其出穴より發生迄十七八日を要したりとせば、其平均温度は多分六十六七度であつたであろう、此の如き低温にて催青するときは其飼育は頗る容易なるも繭層薄く且つ小形となる者である、斯る低温の場合は約ぼ火力を用ひて七十度以上の温度にて催青せねばならぬ（七十二度位）然るときは大概十二日目位に發生するものにして其成繭又良好となるものである。

而して火力を使用するに當り注意すべきは（十一二日にして發生するものとすれば）出穴後五六日目より九日又は十日目位迄の間の即ち所謂眼付迄其温度を七十度以下に低下せしめ度とである、而して其前後の温度は深く問ふ處でないけれども、發生を可成齊一ならしむる爲め後の温度即ち眼付後の温度よりは低下せしめぬが良い。

（二）催青中乾燥に過ぎ發生不齊一となる虞ありとの事なれども、夏蠶の催青期は何との土地も空氣中に相當の温氣があるから、特に給温の必要はあるまい、併し高一間の如き乾燥に過ぐる場合は普通の春蠶種催青の中に於ける給温と同樣にて敢て差支がないから此等は余の説明を待つに及ぶまい。

（三）

（イ）貳問の第一出穴の際の温度の高低に依り發生の不齊一となるは、温度高き爲め不齊一になりしと云ふにあるか、又は低き爲め不齊一なりしと云ふにあるか、其貳問の要領を得るに苦

しむから解答し難い。

（ロ）温度の高低は胚子の發達に遲速あるは勿論で、胚子休眠期を過ぎ發育を初むるは即ち低温より高温に遇遇するが故にして元來胚子の休眠狀態を保つ温度の限度は大凡摂氏四十七度三分内外であるから、之より以上の温度に溶するときは胚子は漸次發育を初むるものである、而して其限度を超ゆること大凡摂氏三百十二度であるときは、胚子は發達して孵化するものである。

故に此胚子發達に要する温度即ち三百十二度内外の温度を與ふれば何時でも發生するもので、一日數日數短かく、其温度低ければ長き日數を要するものである。

（ハ）温度低温にして化性に變化を來す理由を問せられたるが、化生の變化は獨り低温のみではない、高温にても其化性に變化を來すものである、要は催青中或る期間内（第一間中の眼付迄の間）を云ふ）低温にて胚子を發達せしむれば二化の性を持續し又或る期間高温に溶して胚子を發達せしむるときは二化の性は變じて一化に越年するの性となるものである其理由の詳細に至りては本紙に譲し愚しじ。

千九百六年度世界重要產絲國產絲額統計（其七）

洪牙利

千九百六年度洪牙利國收繭額は百七十七萬六千六百八十二基である、千九百五年度は百九十五萬九千二百十三基であつたから、本年度は十八萬二千五百三十一基の減少即ち約九分五厘の減收である。

最近十年間に於る洪牙利國の收繭額を左表で紹介しよう。

年次	蠶業を營む家の數	蠶業に從たる家の數	收繭の量	分配したる繭の量	一「キログラム」の產繭量
一八九七	二、七三四	一〇八、七五〇	六四四、九〇〇	一、三四一、一三八	二〇、六
一八九八	二、四五四	八六、三七二	四九、三三六	一、二七二、三四一	二五、七
一八九九	二、二七四	七九、九二八	五〇、一一三	一、二四四、七二六	二四、八
一九〇〇	二、四三〇	八七、八二五	五五、三一九	一、三五四、一一八	二四、五
一九〇一	二、五三三	九五、八八八	五八、七七八	一、四七四、六六五	二五、一

一九〇二	二、六六七	九四、六〇五	五六、三九七	一、三四二、一二五	二三、八
一九〇三	二、八八四	一〇七、七〇二	六一、二六六	一、七〇七、二〇五	二七、八
一九〇四	二、八二三	一一二、七一二	六四、七〇九	一、六三三、四五二	二五、二
一九〇五	二、九七三	一〇九、七九〇	六三、五五九	一、九五九、二一三	三〇、八
一九〇六	三、〇二〇	一〇三、三五〇	六〇、六六九	一、七七六、六八二	三〇、一

千九百五年度に十萬〇七百九十名であつた、養蠶家の數は千九百六年度に於て十萬〇三千三百五十名に減少した、即ち六千四百四十名の減少である、此の減少は移民の數が著るしく增加した爲めである。

前にも述べた通り收繭額は前年度に比して約九分五厘の減少である、上簇期まで天候頗る良好であつたから此の分なれば當年の收穫は確かに豐富なるべしと豫想したるに不幸にして六月の上旬に至て突然氣候が一變して非常に寒氣が加はつたと同時に雨天續きと成つたが爲めに蠶兒の發育上大に妨害を蒙り軟化病は諸所の蠶室に傳播した、而して其結果收穫豐富なるべしとの豫想は全く空想に歸して前年度より增收する筈の蠶繭が前年度より非常に減收するの現象を現出した。

「テクスッアル」の農事局は例年の通り國有桑園に仕立てた桑樹の苗を無料にて配布して大に私有桑園の擴張に貢獻する所があつた。

同局の盡力に依て桑園は益々擴張するに至つた、左表を以て其の實例を示さう。

年次	桑樹の本數	年次	桑樹の本數
一八九一	一三六、一四〇	一八九三	一四四、四四八
一八九二	一七八、六三九	一八九四	一四六、八九二

一八九五	一四八、〇四五	一九〇一	三〇六、五九二
一八九六	二〇一、七五九	一九〇二	三六三、〇一九
一八九七	二一一、三四三	一九〇三	三四四、九四六
一八九八	二三八、九八八	一九〇四	三四一、四〇五
一八九九	二七九、六六九	一九〇五	三四〇、五四五
一九〇〇	三八三、七七七	一九〇六	四〇五、〇六九

前年度に示した洪牙利に於ける重なる製絲場は七ケ所にして其の釜數九百三十八個なりしが、千九百六年度に至て二個の製絲場が增加した其の一は「トロッカ＝ザ」製絲場にして其釜數八十個、其の二は「ベケス、サバ」製絲場にして其釜數百二十個である、前者は第二流の繭を以て製絲し、後者は第一流の夫れを以て製絲するのである、故に千九百七年度の始に於て洪牙利は九個の製絲場と一千百三十八個の釜を有するのである。

此九個の製絲場中「トルナ」製絲場は農事局自らの經營に係るものであるが、其の他は一私人の所有するものである。

之を要するに澳地利洪牙利は千九百六年度に於て四百八萬二千基の蠶繭と三十四萬二千基の生絲とを產出したのである即ち左表の通である。

	收繭額	平均絲量	製絲額
南チロール地方	一、八〇〇、〇〇〇	一割一分半乃至一割二分	一五一、〇〇〇
ボリッ及グラヂスカ地方	四五四、四〇〇	一割一分半乃至一割二分	三八、七〇〇
イストリー地方	五〇、九〇〇	一割一分半乃至一割二分	四、三〇〇
洪牙利	一、七七六、七〇〇	一割二分	一四八、〇〇〇
合計	四、〇八二、〇〇〇		三四二、〇〇〇

最近五ケ年の結果を最後に左に示さう。

年次	收繭額	製絲額
一九〇一	三、八六六、〇〇〇	三二五、〇〇〇
一九〇二	三、六四八、四〇〇	三一二、〇〇〇
一九〇三	三、二六三、八〇〇	二七五、〇〇〇
一九〇四	三、七六四、〇〇〇	三一五、〇〇〇
一九〇五	四、一一〇、〇〇〇	三四五、〇〇〇
五年間平均	三、七三〇、〇〇〇	三一五、〇〇〇

（洪牙利の項完）

懸賞募集 一口噺

（第五期披露）

地賞

◎知らぬが佛　豊後　藤軒

甲『オイ、佛壇に腰をかけると罰が當るぞ』

乙『罰なんか當るものか知らぬが佛と昔から云ではないか』

蠶絲國の報德主義

（佐久山水論を讀て感あり）

通常會員　石山重孝

偉大なる山嶽の下、雄渾なる河川の畔、平凡の民たるに終ること勿れとは、論者が佐久（信濃南北佐久郡）の民に示すの言なりき、大なる教訓、山河秀靈の氣綽然積結して茲に發露せしもの乎、佐久人士たるもの無限の感興を以て、此說を迎へ、奮勵一番宜しく學ぶ所なかる可らず、顧顧すれば先年の　勅題（寄山祝）に

淺間山民のかまどのにぎはひを空に見せてもたつ烟り哉

と、特に高崎男爵に乞ふて拜賜せしも、決して故なきにはあらざる也、看よ源泉滾々として晝夜を舍めざる、著名なる大河（千曲）の發源地を代表しては、孤忠山中牟禮（南佐久郡相木郷）を產出し、本邦第一の活火山（淺間）を代表しては招魂平賀總渓（平賀氏の先世南佐久平賀村より出づ）を顯出せしめしにあらずや、郷へ聞く、二宮翁人は特に此地（二宮尊德翁嘗て北佐久志賀村現主神津猛氏の家に親臨せらる）を撰みて、親しく報德教の種子を植ゑ、他日の大發展を期せられしと云ふ、其德澤今や傳播して、佐久、小縣を中心とし、廣く信山各地至る所に、報德結社、產業組合、信用組合等の勃興を見る豈偉なりと云はざる可んや、更に現時に至りては、平民的偉人として、治績村治の大家として、活ける二宮翁人として、盛名天下に轟く田村又吉翁は、親しく佐久、小縣を始め、普く長野

四化蠶に就いて

通常會員　前川淺吉

今より十數年前蠶業界に噴々の名を有したりし多化性蠶即ち四化性蠶は、現今已にその飼育するもの殆んとなきが如し、稱に該蠶種ありて居損に出つるも之れに一組の四組を拡つ蠶家なきに至りしなり、何故に四化蠶は斯く一般蠶家に信用を失ひしか、何故に斯く漸次に至りしかを探究し來れば、即ち四化蠶は發生不齊一にして、三日も四日も五日も孵化し、際限なく發生するを以て、之を掃立いに飼々別々に飼育するは殆んと其繁に耐えざる所なり、假令其繁に耐ふるとしても四眠迄の發育頗る其好なるも、四眠迄の發育至りて不充分なる故、五齢の蠶は遂に発育せず、殆ども爭蠶の薄皮側に等しく、絲量最も少量にして、死然を如桑園の枝頭に讃々たる野蠶の繭に同じきが故なり、且絲質強力に富む一特長を有したりしが、一長は二短を償ふに足らざるを以て、今日の如き疲弊に至りたるものと知し、然りと雖も全化蠶なるものは遺伝自然の天則に適へ唯秋蠶として飼育すべき好適蠶種たる事は信じて疑はざる所なりし依て完全なる蠶種を得て、以て家地に試育して、倒よと所信を實驗せんと欲ぜしも、地理遠隔せる蠶地の情況に通ぜざれば、完全なる蠶種を獲るのすべなかりしなり、然るを幸にして客秋多化蠶種の有名なる製造家三州豊橋町茂氏を知る待、心私かに悦び昨年十月氏の製造に係る八月二十五日蛹附多化蠶大角又産製蠶を購求し、自家にて之を孵育して即且熟心なる二三の養蠶家に托して飼育なる試みたるに、該蠶種は蛹で良好育ぜしものと異なりて二日前にして悉く發生し眠起整一蠶體肥大にして、五齢成長極度平均一頭の體量七八分に達し眠起三眠の調を経み、繭調及産卵の盛旺なる殆んと多蠶に勝色なきものを得たり是

本會第三第五回共會に於て名を挙げ及び賞品を受く

（女工講習國風縣型山）
島津つね子

に於て余に四化蠶に於ける所信を質出したるを悦ふと同時に、一般養蠶家に是れが飼育を希望するものなり、翌年昨年秋蠶の如きは氣温の高きが上に雨蛾多き爲め、一般を通して五分作に達せざるものゝ如し、かゝる年に四化蠶を飼育れば秋蠶の効作を償うて餘りあるにあらずや、早晩將前の偉功を奏せし如く、神經不思議の偉大なる此の日本丸をして世界に黒潮せしめん事を期するは、吾人同志の天職なりと信ずるもの也。

懸賞募集

一口噺

（第五回投露）

人賞

◎父の眞似　群馬　寸馬

父『お前は試驗にまた落第か』

子『僕はお父樣の眞似をしたのです』

父『ナゼ』

子『貴方は代議士に落選したでせう』

横濱市場

絲況

昨年十月以降一時銷沈の極に陷りし我生絲貿易は、本春に入り歐米財界の景氣稍回復せると共に、徐々直目を改め來り殊に五月に入りて、近來未曾有の大賣行を見、帶て四萬梱の生絲停滯せりと傳へられたる横濱市場も月末に及んで一萬六千三百梱に減少したるが、絲價は此割合に昂進せず否却て低落の趨勢にて之を昨年の同期に比すれば全く反對の現象を呈せり、即ち昨年五月の初旬には信州上一番格一千二百六十圓より、其後次第に昂進せしも、本年は一時八百四十圓に引戻したる絲價は、手合高の増加と共に低落し、再び八百二十圓の安値となりて、越月するに至れり、之れ一見不思議の現象なるが如きも、又止むを得ざる事情の伏在するものならんか。

而して之が事情に就き或者は曰く（一）新古鎖境に在荷商は一萬六千餘個ありて一方新絲に對する資金融通の時期迫れるより荷主は値段に拘はらず賣放に力めつゝある事（二）問屋側も新絲資金供給の上荷主の意向如何に頓着なく處分的に始末を附る手段を採りつゝある事（三）從來銀行の擔保品となりて其庫中にあるる古絲の運命急々切迫の時期に際せるより是亦成

行に應じて處分するの已むを得ざるに至れる事等の素因相重なりて今日の市況を呈せるなりと云へり、果して然りとせば絲價の低落寔に已むを得ざるも、一方歐米金融界の近狀緩和の度日一日に加はりて商工業の舊態に復するの日遠きにあらざるものゝ如く、從て生絲に對する需用も久しからずして復舊すべきが故に、今日よりヨリ以上の低落を見るが如きことなからん。

而して客月中に於て最も高價に賣行きたるは、靜岡縣正木製絲細の九百四十圓にして、最も低價なりしは福島縣の共同二馬折送の七百九十圓なりとす、今左に本年一月以來の最高價と前年の夫とを對照すれば左の如し。

生絲最高價月別前年對照表

月	明治四十一年			明治四十年			價格の差
一月	山形縣	石黒館製絲 丁西館太	一、一一〇	山梨縣	矢島組金太	一、三一五	二〇五
二月	山梨縣	矢島組金太	一、〇四〇	山梨縣	矢島組金太	一、三〇〇	二六〇
三月	山形縣	清盛社太	九五〇	岐阜縣	金森製絲	一、四〇〇	四五〇
四月	愛知縣	日登社細	九一五	埼玉縣	羽村館	一、四五〇	五三五
五月	靜岡縣	正木製絲細	九四〇	群馬縣	交水社座繰	一、四三〇	四九〇

尙左に生絲集散表を掲けて參考に資せん。

明治四十一年五月自一日至三十一日生絲集散表

	持越	入荷	賣了	地方機展	繰越
器械	一八、二一九	九、〇三六	一一、二三二	一、〇〇五	一五、〇一八
座繰	三、〇〇一	四八八	一、六一九	一二一	一、七四九
折返	八二二	四五	四三三	六九	三六五
精絲	四	五	—	五	
合計	二二、〇四六	九、五七四	一三、二八四	一、二〇〇	一七、一三六

備考

一、內中單位個は九貫目を指す

二、持越とは客月より本月に持越したるものにして本月一日の調査繰越とは本月より翌月に繰越すべきものにして本月末日の調査に係る

三、前月分の繰越と其數一致せざるは商談中のものありしに依る

四、繰越以外に商談中のものありと知るべし

五、賣了中米國に輸出せるものは四千八百六十八俵にして歐洲に輸出せるものは二千二百七十六俵なりとす

尙左に生絲集散日別表を掲げて參考となさん。

明治四十一年五月自一日至三十一日生絲集散日別表

（器械太□　同中△　同細○　座繰×　折返し＋）

日	入荷	手合	賣了	引展	輸出	地方機展	國名社名	種別	最高價	最低價	摘要
一日	四八六	二七四	四五二	五四	—	五三	遠江天龍川社 岩代東北社	×○	九二〇	八四五	引續き弗々手合出來せしも適當品薄の爲め捗々しからざりし
二日	二〇一	二六一	三〇七半	九	九三二	一六一	伊勢度會製絲銀 信濃有誠社	□□	九〇〇	八四五	歐洲向の品手合出來し直段は信州上一番格八百六拾圓の成行なりし
三日	—	—	—	—	—	—			—	—	日曜日
四日	七四四	一七六	七四六	—	—	一五五	伊豆正木製絲 武藏改倖社	×○	九四〇	八四五	直輸筋へ弗々取組ありたるも氣配は休日前と變りなかりし
五日	三二四	五四四	五七二	二七	—	四二	遠江濱松製絲 信濃尾澤製絲	□○	九三〇	八六〇	新註文少し達したる向ある樣子にて相場も品により稍々五圓高なりし
六日	二七〇	一一三	五四二	—	七〇五	二二	尾張愛知館 岩代共同二馬	+□	九三〇	八二〇	手合薄にて一寸靜かなりしが氣配は別に變りなかりし
七日	三〇〇	九八	七八四	四六	—	一三七	飛驒双進館 信濃長盛社	□△	九一〇	八六〇	目星しき商談なく少しく氣乘り薄の市況なりし
八日	四三一	六三	五八三半	二八	—	五九	陸中七折製絲 上野下仁田社二絲	×□	八八二半	八五五	引續き沈靜且つ競馬會にて休業の向ありて手合薄なりし
九日	三六八	四〇	三八三半	七一	四〇二	二九半	甲斐富盛社 信濃林製絲	□□	九一〇	八六五	續々商談なく市況落付きたり
十日	—	—	—	—	—	—			—	—	日曜日
十一日	六六九	一〇五半	二七二	—	—	八五	武藏鹿澤製絲 信濃俊明社	□○	九二〇	八六五	引續き不人氣手合多からず休日前より幾分か安模樣なりし
十二日	一七七半	六四	三二二	一八	—	七	甲斐矢島組金 武藏碑保館	□□	九一七半	八六〇	各館何れも氣乘り薄にて新規手合皆無の姿なりし
十三日	二八二半	一九二	三二五	—	四九六	九	甲斐齋盛社 岩代共同一馬	+□	九一七半	八四五	捗々しき商談なく續いて靜況にして氣配少しく顛重なりし
十四日	三七六半	一〇四	一四一	—	—	三〇半	上野碓水社五人 岩代共同二馬	+×	九〇〇	八一〇	更に染たる商談見受けず市況面白からざる成行なりし
十五日	三六八	一八	四四	三五半	一、一四九	二〇	米　定		—	—	依然鈍況更に商談なし
十六日	三九七半	二六五	七七	—	三九二	六九	上野麗水社 信濃金山社	□□	八七〇	八四〇	相變らず捗々しき商談なく追次下押の人氣なりし
十七日	—	—	—	—	—	—			—	—	日曜日
十八日	四一七半	一五三	二九九	三六	—	七	甲斐矢島組金 上野下仁田社金字	×□	九二〇	八五〇	新規商談更になく人氣引續き復た不味な加へたりし
十九日	五〇七	六七二	四三八	一四	—	六	甲斐金瓜社 岩代共同二馬	+□	九一〇	八一〇	直輸筋へ相應に手合出來したれど相場は何らか安直の方なりし
二十日	二一一半	五〇四	三五二半	一六	七〇七	三七	因幡木川製絲 信濃片倉組	□□	八八〇	八三五	一層館買氣有て夫れ〳〵手合ありたるも相場は五圓方安値を示したりし
廿一日	四〇〇半	二九二	七一九	四四	—	六四	信濃富田製絲 同綿澤館	□□	八八五	八二〇	中には見切り賣拔けの向もあり手合高少なからざりしも氣配は弱含なりし

廿二日	三〇一	六一三	七二四半	二七	—	一〇	陸前 米屋製絲；岩代 眞製社	×□	八九七半；八三〇半	安氣配なから引續き當用口の商談實應じ居るより順次出來せり
廿三日	四三九半	四一九	五八八半	—	二一六	新糸二括 一一	三河 三河製絲；信濃 得信製社	□□	九一〇；八三〇	前報同様
廿四日	—	—	—	—	—	—	—		—	日曜日
廿五日	四一一半	五六三	八七三	三一	—	二四半	但馬 但馬共同；岩代 東北社蚕	×□	八八〇；八一〇	英一番館へ相應の取組出來し他は捗々しき商談なく氣配は休日前は變りなく保合の成行なりし
廿六日	三〇七	二一七	六七〇	五四	—	一九	伊勢 丹羽製絲；岩代 共同二馬	+□	九二〇；七九〇	弗々補充誂を得たるも大體氣重き人氣には頓と引立たさりし
廿七日	二五九	二七四	七八四	二〇	一、四一二	二六	磐城 白石製絲；岩代 共同一馬	+□	八九七半；八一〇	一般は電信待ちの風情にて沈靜なりしか唯三井物產にて弗々當用口の商談出來し相場は依然不足勝なりし
廿八日	三一三	三四〇	六九五半	三九	—	二八半	信濃 東行社；三河 厚生館	□△	八六〇；八二五	細筋物は更に相手なく引續き不味の成行なりし
廿九日	二二二半	五八〇	八一二	五六	—	七七半	上野 下仁田社一橋；武藏 大宮館	□×	九〇〇；八二〇	一兩館買氣を續け居て座繰其他の手合出來し氣配剰に變りなし
三十日	三八九	四六半	七七六半	—	七三三	一〇	但馬 但馬共同；信濃 三井組銀	□□	八七五；八〇〇	頓と新規商談なく續いて捗々しからさる成行なりし
卅一日	—	—	—	—	—	—	—		—	日曜日
合計	九、五七四	六、八九一	一三、二八四	六二五半	七、一四四	一、二〇〇				

尙左に本年一月以來の生絲集散の狀況を明かならしめん爲月別表を示すべし

生絲集散前年對照表

年月次	持越（俵）	入荷（俵）	賣了（俵）	積戻（俵）	繰越（俵）	輸出 數量（俵）	輸出 價格（圓）
四十一年一月	四四、二一〇	一〇、九七二半	九、八五五	九三四	四四、三九三半	五、九六二	
四十一年二月	四五、一七八	四、八七九半	一一、四六二	一、七一五	三四、八八〇半	五、六六二	
四十一年三月	三三、二三〇	一〇、〇六〇半	九、六七〇	二、〇四四	三一、五七六	六、四七九	五、九一〇、八九一
四十一年四月	二七、五七五	一一、三一八半	一三、四五五	二、〇六五	二三、三七一	七、三六二	六、九二五、四三八
四十一年五月	二二、〇四六	九、五七四半	一三、二八四	一、二〇〇	一七、一三六	七、一四四	六、八二五、八九一
計		四六、八〇五	五七、七二六	七、九五八	—	三二、六〇九	三一、四六六、〇八七
四十年五月	—	三四、四九三	三三、五〇一半	三、九八六半	—	四四、七七八	三一、九七四、五二三

里昂市場

三十年間里昂に在勤して歸朝せられたる山田領事が同地生絲の商況に付き外務大臣に提出したる報告書は左の如し。

里昂生絲商況は主ら瑞西等歐州製紐機國に於ける需要原料絲の取引多少ありて少しく需要恢復の兆あり、加之里昂共同倉庫及諸銀行に於ける生絲在荷も逍々減少の傾向ありしも、絲價は尙ほ區々にして一定の方針を缺き居れり。

抑も客年に於ける米國財界の恐慌は、極東歐米の各生絲市場に影響する所甚だ大なりしが、里昂市場の如きは客年十月以來、既に半ヶ年餘絲況微々として振はず、同時に絲價一般に益々下降して底止する所を知らざるの狀勢を呈し、現に本邦器械製生絲一番手十一分の九の如きは、客年九月中の相場七十法より本年三月中四十五法半に降り、差二十四法半即ち三割五分の暴落を見るに至れり、然るに斯の如く里昂市場に於ける絲價暴落の導火線となりたるものは、米國財界恐慌支那爲替相場低落の影響として、其の生絲輸出貿易に一大打擊を被りたる、我橫濱市場に亞ぎ廣東市場に於ても恐慌の當初、在荷の賣捌に汲々たる結果、絲價一般の低落を誘起したること即ち是れなり。

絲價の暴落に伴ひ諸銀行が警戒を加へ、金融上信用を益々緊縮せるの結果、即ち第二流の薄資生絲商中に平素專ら投機商賣を營業とするものにして、前年の好況に乘じ巨利を博せるに甘んじ、其資力以上例へば八萬乃至十萬圓の資力を有するもの、四十萬圓或は八十萬圓の投機取引を敢てせるもの五六名の倒產を見るに至りたるの外、尙は着實なる第一流の絲商中も數十萬圓の損失を被り、終に清算處分をなすの止むを得ざる悲境に陷りたるものあり。

絲價の臨機恢復策として伊佛の製絲業者等は、產額の減縮策に關し講ずる所あり、又た里昂に於ける絲商等は薄資同業者等の投賣を避くる目的を以て、渠等に金融的援護を與ふる件に關し講ずる所ありしも、總て是等應急策は種々なる事情の下に、遂に其實行を見るの運びに至らずして止みたり。

本件に關し里昂有力の絲商某に質問する所ありしに、渠等は答ふるに商勢に關する人爲的方策は、實効を奏すること難きのみならず、時に或は害ありて益なきこと往々あり、寧ろ自然の趨勢に任ずるに如かず云々を以てせり。

本年に入り米國財界恐慌の經過せると同時に、法朗西銀行の割引率も復舊し、隨つて金融狀況も改善し、又一方に於ては織屋原料絲の貯へも拂底の狀なるに拘はらず、絲價尙ほ區々にして絲況の依然活動せざる所以は、前記絲商某の說に依るも全く資本不相當の在荷を肩にせる、薄資絲商等が金融的必要の下に賣捌に汲々たるより、絲價一定せざる爲め織物商も織屋も兎角躊躇見送の姿なるに基因するものにして決して、需要其物の減縮せるに非ざるなり、故に賣急ぎ在荷の逍々減少するに隨ひ絲價の一定するに非らざれば、絲況の恢復は蓋し希望す可からざるものゝ如し。

紐育市場

紐育に於ける生絲市況に就き同地駐在水野領事よりの電報左の如し。

生絲市況引續き不況（五月十二日發電）

生絲市況依然不味（五月十九日發電）

生絲市況先週中頃より稍々宜しき方なるも尙不況なるを免れず（五月二十六日發電）

上海市場

生絲市場は新古端境時期となりたれば各製絲家は新繭買入れの準備に着手し、一方古絲を成行相場にて手放す方針を執り外國市場よりの注文も相應にありて、商談圓滑に折合へり目下相場左の如し。

柞蠶絲賞牌		二百二十兩
座繰		四百九十二兩半
器械絲金牌	九乃至十一デニール	七百五十二兩半
廢繰嘉興絲		四百五十兩
同 金牌二番		三百四十二兩半
同 同 三番		三百二十二兩半
黃絲		三百圓

蠶繭は嘉興地方は蠶兒發生後氣候不順の爲め、經過良好ならずとの事なるも、目下二眠にて無錫地方は目下掃立中なり、一昨日嘉興新繭の初約定談成立したるが、相場は四百五十斤ものにて三十擔百三十五兩なりしが買人は上海の製絲場なりし（目下の爲換に換算せば九百圓に當る）されど上海の製絲場は大半前年來の打擊にて資金を涸盡し、本年の新繭購入に要する資金の如きは何も確たる方針なくして、十中八九新繭に對しては氣迷ひの姿なりと云ふ。

廣東市場

廣東に於ける生絲市況に付き同地駐在上野領事より左の如く報告ありたり。

三月十六日より同二十九日に至る廣東生絲市況左の如し

前週終末後一、二日即ち三月十六、七日頃よりは當時清商側資金の融通に差迫り價格を引下けたるに乘して歐洲筋よりの注文增加し取引活氣を帶ひ來り終に本期二週間內の取引額は各種を通して合計千三百乃至千五百梱の受渡しありたるものゝ如し

然るに一時資金に窮し唱値を引上け一方は救濟策として本年第一、二回作の收繭を機械製絲の原料に供用せさることを決議するまてに至りし清商手持家連も前記の如く一時市場の活動を見ては忽ち賣惜の氣味を呈し買手の相談に緘口なから應する如き狀態にて中には左程資金に窮せさる手持家にして久しく疑問の裏に在りたる生絲界前途の或る回復を豫期し早くも一時全く市場より隱退し居たる者も尠からさりしか此等の連中も本期間に於ては未た豫期したるか如き發展を見るに至らすして價格は一擔に付き二十弗乃至三十五弗の引直しを見たるに過きすして而も本期間終末に至りては此程度の値段にては買手乏しくなり輸出業者か其本國より受け居れる多數の注文は此相場より十弗乃至二十弗方安値のものなりしか如し而して今本期取引せられたる價格大略左の如し

品種		「デニール」	價格
Wing Choong Sing.	(第六回作製)	自一一 至一三	八三〇弗
Kun Wa Lun, Sun Yu Lun.	(同　　)	自九 至一一	八〇〇
Wing, Choong Yuen, Kwong Shun Tai, Wing King Lun.	(同　　)	自九 至一一	自七七五 至七九〇
Choo Cheong Wo.	(第七回作製)	自一二 至一四	七六五
Petit Let. Ordre.	(第五、六回作製)	自二〇 至二二	自七三五 至七四〇
Best 2 Chops.	(重に第三、四回同)	自二〇 至二二	自七二〇 至七三五
B/n 2,3 & Petit 2. Chops. ditto.		自二〇 至二二	自六九〇 至七一〇
Kwong Shun Cheong, Kwong Shun Hang.	(第六回作製)	自一一 至一三	自七四〇 至七五〇
Chun Sun Heng, sai Sih Lun.	(第四、五回作製)	自一三 至一五	自七二〇 至七三〇
Heen Kee, Yuk Wo	(第五、六回作製)	自一六 至一八	自六五〇 至六五五
Hing, Luen Fat Cheong, Yee Wo Cheong, Wai King Wo, etc.	(第四、五、六回作製)	自一八 至二二	自六一〇 至六三〇
Yu Ye Lun, Man Yu Yee. etc.	(第四、五、六回作製)	自二〇 至二四 自二二 至二六 自二四 至二八	自六一〇 至六二五
Best 3 (mostly poor assortment.)	(第三、四、五回作製)	自一一 至一三 自一三 至一五 自一四 至一八	自五六五 至五九〇

紐育向は前記取引總額中凡そ三百梱を占め是れ亦一寸活動を見たるか本期終末短枠の唱値左の如し。

Ex. Fx. A. Kwong Shun Cheong. 印	(第六回作製)	自一四 至一六	自七二五 至七三〇
Ex. Ex. B. Chung Sun Hang. Yu King. 印	(第六回作製)	自一四 至一六	自六九五 至七一〇
Ex. A Fook Kee. Meen Cheong. 印	(第五、六回作製)	自一四 至一六	自六六五 至六七五

爲替相場は六箇月後倫敦拂一志十一片十六分の一、巴里拂二法四十三參二分の一にて本期末を終りたり。

（以上本年三月三十日附）

三月三十日より四月十二日に至る市況左の如し。

本週即ち三月三十日より四月十二日に至る二週間內に於ける當地方生絲市況を左に報告せんに本週間に於ては當地荷主側は更に賣急くの氣色なく益〻在荷に力を注ぎたるを以て多少の取引は元よりなかりしにあらされども、市況は全然强氣配を示し、歐洲市場よりは可なりの注文ありたるも、右の如き形勢なるを以て其過半は手合を見るに由なき狀態に陷れり、而して本週中に於ける取引總高は千擔にして、內二百五十擔は紐育市場へ向け船積せられたる有樣なり、斯の如く土商は在荷に全力を傾注したる結果として、在荷は比格的潤澤と爲りたれとも、土商は飽くまて蓄藏を持し、同時に本年第一回蠶繭の不結果は未だ遽に信し難きも、延て土商をして益〻心を强くせしむるに足るものあり、斯る形勢なるを以て市價は早晩幾分の騰貴を見ることは免れ難き所にして、今日の處にては相場は左に示す所の如くなれとも、取引は得て望み難き狀況なり。

品名	回作	「デニール」	價格
Win Choong Sing, Tsang Wai Hang.	六、七	自一一 至一三	八七〇弗

會務錄事

本會事務所の移轉

曩に本會評議員會の決議を經本會事務所用として購入せる神田區錦町三丁目十八番地の家屋修繕工事落成したるを以て本會定款第九條に依り、五月二十二日評議員會に提出して事務所の移轉を決議し、六月二日付を以て主務大臣の許可を得同四日東京地方裁判所に登記を爲せり。

支會職員の囑託

本會京都、岩手兩支會長の推薦に依り各副會長を總裁殿下より左の通御囑託あらせられたり。

岩手支會副會長　田中正太郎

京都支會副會長　波多野鶴吉

京都、山梨、岐阜、信濃各支會長の推薦に依り、本會々頭より左の通囑託せられたり。

京都支會委員部長及副長（長は委員部長副は委員部副長）

山城長 後藤審二　北桑田長 岸田豊久　北桑田副 稲波益太郎
南桑田長 皆川惇　南桑田副 田中遼平　船井長 三宅武彦
船井副 明田重次郎　何鹿副 竹澤德藏　何鹿副 四方寅之助
天田長 荒川眞造　天田副 大槻粂藏　加佐長 山縣銃之助
加佐副 龜井藤太郎　與謝長 田邊信成　與謝副 星野友治
中長 羽田信明　中副 小北菊二　竹野長 蘆谷犬次郎
熊野長 藤正路　熊野副 岡田忠藏

同商議員

木船衛門　居相彌吉　大島好太郎

山梨支會委員部長

東八代 福武勇次郎　西八代 青柳晴雄

岐阜支會商議員

宮田孝次郎　中島金治郎

同支會委員部副長

郡上 武藤五三　同 中島金治郎

信濃支會委員部長

下高井 長田章

信濃支會委員部副長

小縣 有賀喜三郎　同 中島精一　北安曇 伊藤勝次郎
北安曇 林盛三郎　埴科 渡邊新治郎　同 桐澤精一
西筑摩 東原胖三　下水內 山田儀兵衛　諏 上松吉左衛門

地方委員部職員の囑託

今回本會々頭の推薦に依り　總裁殿下より左の通御囑託あらせられたり。

佐賀地方委員長　井上孝哉

今回岡山地方委員長の推薦に依り、本會々頭より左の通囑託せられたり。

岡山地方委員支部長

赤磐 大和昌一　長久 並河其行　淺口 荒木忠一郎
小田 村山樊香　後月 天野雨石　川上 鐘木隆昌
阿哲 紳木國臣　苫田 一山昌衞

同地方委員
永野高吉

評議員會

五月二十二日午後三時より本會評議員會を開く、出席者左の如し。

會頭男爵 松平正直　石居一郎　入田達也
本田岩次郎　尾澤琢郎　吉池慶正
辻 暢太郎　土屋泰　鐘木喜三
南條吉左衛門　桑田熊藏　紫藤章
下田伊左衛門

議題

一、明治四十一年度臨時部追加豫算
理事吉池慶正氏より本會事務所用家屋の修繕工事落成を告げたるも門及塀に修繕若くは改造を要するものあり、又本館の傍に存在せる長屋建の建物は役設を廢して貸家に修繕し、若干の收入を得んと欲する旨説明あり、滿場異議なく可決確定せり。

二、日本大博覽會に對する設備の件
會頭より來四十五年に開設せらるべき日本博覽會に對しては、豫に本會は蠶絲館等設の建議を爲したるが、當局者に於ても其必要を認め、之を特設することに内定せられたり、是れ本會の最も滿足する所にして斯業の爲め慶賀の至りと云ふべし、而して我蠶絲會は之に對し陳列其他施設上大に攻究を要することにして全力を注て之が成効を圖らざるべからず、如何にして其目的を達すべきか諸君の意見を承りたしとの演說あり、入田、紫藤、本多、南條、尾澤、下田等の諸氏交々意見を陳べ、結局會頭指名を以て十名の準備委員を選舉し、委員に於て其方針を調査せしむることに決し、會頭は左の諸氏を選舉せられたり。

今西直次郎　入田達也　尾澤琢郎
加賀山辰四郎　土屋泰　角田喜右作
鐘木喜三　南條吉左衛門　北村七郎
下田伊左衛門

三、本會事務所移轉の件
本會事務所用として購入せる神田區錦町三丁目十八番地の家屋は修繕工事竣成を告げたるに依り、本會事務所を移轉せんと欲する旨會頭より發言あり滿場異議なく可決確定せり。

四、本年秋季長野縣長野市に本會臨時總會を開設するの可否
吉池理事の説明に次て、紫藤、本多、南條、入田、尾澤の諸氏より本會の臨時總會を開設すべき旨發言あり、信濃支會と協議の上開設することに決定せり。

右諸問題を議了し散會したるは午後七時なりし

吉池理事の出張

理事吉池慶正氏は會務打合せ幷に蠶況視察の爲め、六月一日埼玉、群馬の兩縣下に出張し、同五日歸京せられたり。

支會品評會の開設

本年支會に於て開設する品評會は大要前號に記載せるが倘其開會期日開會地其他を左に掲ぐ。

三重支會
- 開設期日　明治四十一年十一月一日より同月七日迄
- 開設地　三重縣津市
- 出品種類數量　蠶種製絲用種は一枚以上種用種は五十蛾以上
- 出品期日　出品目錄は四十一年九月十日迄に出品物は十月十五日迄に本會事務所（三重縣廳内蠶病豫防事務所）へ送付すべし

滋賀支會
- 開設期日　明治四十一年十月二十日より二十四日迄
- 開設地　滋賀縣大津市
- 出品種類數量　蠶種普通一枚枠製二枚（成規の檢査を經たるもの）繭一種類毎に五合以上生絲一綛以上（二十匁以上）參考品（桑苗及蠶業に關する物品標本等）
- 出品期日　四十一年十月五日迄に本會事務所大津市滋賀縣物産陳列場に出品目錄を添へ差出すべし

岐阜支會
- 開設期日　明治四十一年九月二十日より二十六日迄
- 開設地　岐阜縣岐阜市
- 出品種類數量　第一種繭一升　第二種蠶種原製二枚（出殼繭五合添付）第三種生絲一綛（一綛約十八匁）第四種桑苗榾桑實生二十本以上其他は十本以上　第五種蠶具一具以上參考品（蠶業に關する方案、器械及標本類）
- 出品期日　四十一年九月十日迄岐阜縣廳内本會品評會宛出品目錄を添へ差出すべし

富山支會
- 開設期日　明治四十一年九月十五日より三日間
- 開設地　富山縣氷見郡氷見町
- 出品種類數量　第一種蠶種普通製一枚枠製二枚、繭五合、生絲一綛（十八匁以上）第二種參考品（桑苗及蠶業に關する物品標本等）

山口支會
- 開設期日　明治四十一年十月中
- 開設地　山口縣美禰郡伊佐村
- 出品種類數量　繭五合、生絲一綛（約十八匁）但し外に審査用として繭買の生絲一綛（約九匁）添付を要す、眞綿十匁、紬絲十匁、桑苗五本、蠶具
- 出品期日　四十一年九月二十日限り山口縣美禰郡伊佐村役場内大日本蠶絲會山口支會第六回品評會事務所宛送付すべし

熊本支會
- 開設地　熊本縣熊本市物產館内
- 開設期日　明治四十一年十月八日より同月十日迄
- 出品種類數量　一、蠶種　原種は二枚製絲用種は一枚　一、繭五合　一、桑苗五十本　一、蠶具數量適宜
- 出品期日　四十一年九月二十日迄に到達する樣事務所（熊本縣廳内）に送付すべし

下野支會
- 開設期日　明治四十一年十月十五日より同十九日迄
- 開設地　栃木縣宇都宮市
- 出品種類數量　蠶種普通製一枚以上枠製二枚以上、繭七合以上、生絲二綛以上（一綛十五匁以上）參考品（桑苗及蠶桑に關する物品標本等）
- 出品期日　出品目錄を明治四十一年八月二十日迄に現品は九月二十五日迄に品評會事務所（栃木縣廳内大日本蠶絲會下野支會事務所）宛差出すべし

右の外靜岡支會及下野支會の品評會事項は次號に記載すべし。

蠶桑雜觀

▲生絲取引所の革新　橫濱蠶絲外四品取引所は從來の定期賣買の方法にては、月末賣方より生絲を引渡し買方より代金を提供するも、品質檢査に時日を要し、實際の受渡は翌月中旬にあらざれば結了せず、斯く授受期の不定にして且つ遷延するが爲、各地の製絲家、生絲商も定期取引を利用するに躊躇する事由を叙し、去月二十九日主務者に向つて定款改正の申請を爲したるに、翌三十日直に認可を得、本月一日より新賣買法實行中なるが、改正の要點は本月以後受渡日に於て買方の給付すべき生絲は必ず取引所の檢査を經たる封印付合格品たることを要し、取引所は受渡期日以前何時にても豫め當事者の請求により檢査を行ひ、以て是までの如く檢査の翌月に亘るの弊害を除かんとするにありといふ。

▲上田蠶絲專門學校　長野縣上田町に新設せらるべき蠶絲學校敷地は土地買收と同時に建築に着手する由なるが同校の設計は教室六百三十八坪實習場百五十坪、製絲場百十坪、染色場百六十二坪、觀測所十坪、蠶繭場五十坪其他を合せ總建坪二千二百坪地積二萬五千坪にして四十三年九月を以て全部竣工

すべしと云ふ、因に文部省にては本校創立委員十名を設置する答にて帝國大學理、工、農各分科教授中六七名に對し交渉せられ同省よりは眞野局長同委員を命ぜらるべしと。

▲德島縣生絲檢査場

德島縣蠶絲同業組合にては、本年初めて縣費より三千五百圓餘の補助を得て、生絲檢査場を開始し濫賣其他仲買人の惡弊を一掃せんため、一々蠶業の郡市に出張し檢査をなす答なりしも、未だ其緒に附かず然るに愈新生絲の市場に賑はる期節となりたるを以て、愈よ去る六月一日より檢査を開始したる由。

▲實業大會決議

五月十一日より十三日迄福島市公會堂に開かれたる東北實業大會は各縣提出の決議事項報告後聯合會大會を開き、左の事項並に次期の大會を青森市に開會することに可決したり。

一、道府縣立模範農場設立を其筋へ請議の件(可決)
一、東北地方に園藝學校を建設する事(可決)
一、蠶病豫防費を國庫の負擔とすることを其筋に建議の件(可決)
一、國費を以て女子蠶業講習所を東北地方に設置することを其筋へ建議の件(可決)
一、馬匹改良奬勵の爲め東北一道六縣に競馬場の許可せられんことを馬政長官に建議する事(可決)
一、東北各縣に流行せる馬疫の調査方を馬政長官并に農商務大臣に建議する事(可決)
一、織物税は賦課均當を得ざると徵税法區々の爲め斯業の發達を阻害するに依り賦課均當及徵税法東北六縣一定にせられん事を其筋へ建議する事(可決)
一、自家用織物にも相當賦課せられんことを其筋へ建議する事(可決)
一、海岸國有森林の保護を地元町村に委託せられんことを其筋に建議する事(可決)
一、六縣に於ける鎚麗港を調査し之れが速成を期することを知事に建議する件(可決)
一、私設鮭鱒人工孵化場に對し國費補助を爲すことを農商務大臣に建議する件(可決)
一、營業税法中製造業に關する課税標準を改正せられんことを政府へ建議すること(可決)
一、自家用料醸造は全廢すること(可決)
一、俵装は縣外輸出は凡て二重俵装とし容量は一俵四斗入とすること(可決)
一、米は一石に對する單價を以て取引すること(可決)
一、米の改良を圖ること(可決)

▲東西蠶業講習所生徒募集

今回東京及京都蠶業講習所に於て養蠶部本科生各二十名東京蠶業講習所に於て製絲本科男生二十名同女生十名同別科女生四十名づゝ募集するに付志願者は來七月十日迄に履歴書身體檢査證及寫眞(男生に限る)を添へ地方廳を經て出願すべしとなり。

▲本年の春蠶

本年の春蠶景況并に收繭第一回豫想高に關し、本月一日迄に農商務省へ到着したる報告は左の二十六府縣にして之に依て見れば其掃立枚數は昨年に比し、德島、高知、三重、愛知、山梨、岐阜、宮城、鳥取、廣島山口、香川、愛媛、宮崎の十四縣は何も一割以上二割内外の增加なるも、其他の各府縣は著しく減少したるが如し、是昨年末生絲相場暴落の影響により手控へたるもの多きに依ると云ふ、而して發生後の經過は何れも良好にして桑葉の不足を生じたる處少からざる模樣なるが、今各府縣の豫想高并に昨年の實收比較を示せば左の如し。

(表中▲印は減)

	本年豫想高	昨年實收高	比較增減
鹿児島	一八、九六三石	一五、八〇三石	三、一六〇石
高知	二三、一三八	二三、二二七	▲八九
德島	二四、九三七	一九、八一二	五、一二五
京都	四四、一六八	四五、四一〇	▲一、二四二
大阪	一、一七九	一、三二四	▲一四五
兵庫	五二、七四四	五三、七四八	▲一、〇〇四
新潟	五一、二九三	五七、六二一	三、六七三
群馬	一八二、三七五	一八六、八七六	▲四、五〇一
茨城	六九、八九七	八一、七九二	▲二、八六五
奈良	五、二九〇	五、六八三	▲四九三
三重	五七、九三二	四九、九七七	九五五
愛知	一〇四、五一八	一〇九、一八五	▲四、六六七
靜岡	六八、二五六	七〇、五一一	▲二、二五五
山梨	九四、六六〇	一〇一、六二一	▲六、九六一
滋賀	三四、七二二	三六、一九六	▲一、四七四
岐阜	八八、一八二	九二、一九三	▲四、〇一一
宮城	六九、〇〇〇	六八、一七五	八二五
鳥取	二七、七三五	二六、五二〇	一、二一五
岡山	九、二六三	一一、四〇九	▲二、一四六
廣島	五、九二二	六、〇一六	▲九四
山口	八、三六五	七、六二六	七三九
香川	二、七三四	二、四七二	二六二
愛媛	二二、二七九	二三、三七八	▲一、〇九九
宮崎	一五、三三八	一五、三〇二	三六
千葉	五七、二〇一	六五、一三四	▲七九、三三
石川	一八、六四五	一八、一二九	五一六

本邦に於ける蠶況は右の如くなるが世界各國の蠶況に付き今日までの報告に基づき之を察するに佛國は經過頁好なるが如く伊國も春結果の佳良なるを傳へ來りたれば伊佛とも本年の收獲に就ては頁結果を收めたるならん、尤も清國の蠶況は同國有數の蠶業地たる無錫及び紹興地方には降雨勝なりし結果作柄思はしからずと傳へられ居るが、清國の作柄不良は實際收獲の上ならでは判明せざるべきを以て、未だ遽かに斷定を下すべからざるも昨年位の成績は收め得たるものゝ如し。

▲東京蠶業講習所の蠶況

本年桑樹の發芽は昨年より一日早く平年に比すれば四日晩かりしも、發芽後の氣候一時非常に暖氣と爲りたる事ありしを以て、割合に急速の發育をなし、伸長程度は略々平年に均しく試驗用蠶兒の掃立は去月三日乃至七日にして講習生實習用蠶兒は三四兩日を以て之を行ひ之れを昨年に比すれば同日の掃立なりしも平年に比して二三日晩く飼育の結果は何れも非常の好成績にて上簇したるが本年度春蠶期に於ける試驗事項の主なるものは左の如くなりしと云ふ。

▲老熟の早晩と蛹子との關係▲二化性原種飼育▲人工孵化法▲蠶種貯藏法▲柘葉給與▲蠶の遺傳▲原種飼育▲蠶の種類試驗▲卵色試驗▲蠶病と蠶の種類との關係試驗▲微粒子の病毒生存期試驗▲硬化病試驗▲天蠶柞蠶の病害調査▲微粒子病試驗

▲伊豆松崎の新繭と絲價

伊豆松崎においては例年五月十五日に初市を開くことなるが同、地は早場所を以て目せらるゝ事とて他地方より買人相應に集注し來るがゆゑ、相場も買人の競り上ぐる結果として豫想外に突飛するを常とするに、本年は買人何れも手控への態度なりしを以て、毎年の例に反し四圓の安値に初商戰は開かれたりとの事なりし、而して三十五年以降松崎における五月十五日の初相場と當時横濱の絲價とを對比せんに左の如し。

	一貫目	絲價
四十一年	四圓	八百五十圓
四十年	七圓二十錢	千二百六十圓
三十九年	四圓五十錢	九百八十七圓半
三十八年	五圓五十錢	九百三十五圓
三十七年	三圓八十錢	九百圓
三十六年	五圓十二錢	千五十二圓
三十五年	四圓	九百十二圓半

▲無錫新繭市場

無錫新繭市場は、五月廿日開始せられたるが、初相場は百斤三十五弗より三十八弗の安價なりしを以て、取引出來ず、翌廿一日漸く當業者相談の結果四十五弗より五十弗にて折合商内ありたり、然し賣荷少なく本年は五六分位の作なりと云ふ、因に昨年新繭市場の開始は五月廿七日にて、繭價四十二弗乃至四十五弗、北門市場は四十五弗乃至五十弗を唱へたりしが、此高値に伴ひ賣物出荷自然多きを加へたるを以て、廿九日に至り俄然三弗安となり爲めに賣荷の手控となりしに三十一日更に四十七弗より五十一弗に暴騰するに到りしも、依然賣荷少なく遂に最低五十弗の高價を以て取引せられたり、之を本年の初相場廿五弗乃至廿八弗と比せば如何に同市場新繭の安値なるかを知るに足る可し。(蘇州領事報告)

▲杭州新繭市場

別項記載の如く領事の報告に依れば、繭商物料洋行出張所は五月六日より新繭の買入を開始したるが、其の價格は最上物一斤三十二銅、中物三十銅、下物三十銅以下廿八銅にして、昨年の相場は最上四十八銅以下三十二銅なりしなる、約一二十錢安なり然と昨年の繭買は極めて盛況なりしも、本年は氣候不順等の爲め品質劣等なれば、此安價も當然なるか、然るに同地方人は本年繭の價格は寧ろ昨年の高値なるより寧ろ惜み持ち歸る者數多なりとの有樣なり、何は同地方人は粗無人物にて、概ね品質の良不良を問はず、唯一筋に高値なるを以て賣出すの傾向なりと云ふ、

▲製絲資金

本年各國各地の金融市場は資金缺乏の狀態に在るが如く製絲資金の如き各地為替引銀行に向つて直接に融通を求め來りしもの甚だ多く、實際に貸出しを行ふは本月十五六日過ぎなれど、日銀行に於ては前月以來各生產地の取引銀行に對し、其銀行の信用程度を調査し、相應に資金融通の豫約に應じたるより、地方の銀行業者は執れも滿足し各取引先に向つて新繭仕入資金を供給する筈にて、既に相當に飲きたるもの多く、市中の銀行赤發來の取引銀行に對し資金融通の依頼を爲したるものの多きが故に、本年の製絲資金は最早や全國の各生產地に一臂行使したりと云ふて可なり、尤も其貸出高は昨年の大掛一方至七掛に過ぎざれど、本年の新繭相場は一貫匁三圓八十錢より四圓內外にて、昨年の相場に比し三四割方低き爲め原料量の仕入も稍〻多く、此上は其價の紡賣ひを始すことなく、光分注意に注意を加へて生產費の上らぬやう、心掛くること肝要なるべしと云ふ。

▲生絲檢査所月報

五月中に於ける生絲檢査所の成績左の如し

本年月檢査件數　正量品位　綾織　計　三三二七　三一二五　六四五二

正量檢査

本年	昨年	比較
上（一貫目）	二〇〇〇	三〇〇〇	—
中（同）	一八七五	一七五〇	二五〇
下（同）	一七五〇	二〇〇〇	一二五〇

	本年	昨年
檢査件數	三三二七件	三〇〇八件
總全量	二七九六四七斤	二一四九〇〇
總風袋量	五五三一斤	一三〇〇九
總原量	二七四一一六斤	二一三一六九
總無水量	二四二九二二斤	二二六二一七四
正量	二九九六四四斤	二一六五三

品位檢査

種別	檢査件數	平均	最多數	最少數
綾織	三三二七	一一四三	一一四三	八八六

機度　類節　強力及伸度

種別	檢査件數	平均	最多數	最少數
綾織	三三二七	一一四三	一一四三	八八六

種別	檢査件數	切斷數	平均	最大と最小の差	火類	水類	機度	強力	伸度
綾織	八	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
中間器械	三〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
座繰拾遺	三〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
座繰拾遺	三〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
太鼓器械	三〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
座繰拾遺	八	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
特太器械	八	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
座繰拾遺	三〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
特太玉糸	三〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇

讀者文藝

賞懸

俳句

花の本在翁宗匠選

（三才景）

秀逸

人

こんもりと海の中なる茂り哉　甲斐　喜迺恵

畢せぬはかりの色や夏の月　後　花狂

天

論解けて安堵の堰や夏の月　平町　秋江

茶筵に春の匂ひや夏の月　選者　花翁

懸賞募集 狂句 （第五回披露）

金坊子選

信神の人となりけり蠶時　伊勢　花月

お蠶機嫌よくて家内が丸くなり　信濃　談語

留守つかい後で香出す蠶時　茨城　鬼外

腕力で切れないものが絲の緣　同人

桑に降霜禁酒家に露の朝　山梨　賜錻

留守にしちやイヤだと蠶嫁に云ひ　静岡　蠶人

蠶時三文文士狂句よみ　岩代　遺子

蠶時便所か一つの休憩所　信濃　鬱山

國になる盗と借金の云譯し　甲斐　芳文

不和合も當り蠶で睦み合ひ　静岡　二木

買藥が風邪を引いてる家無病　甲斐　鳥居

和せ家内藁一本ぢや燃付かず　同人

桑黒くなりて人顔青くなり　甲斐　鵙風

尻軽き下女ほめられる蠶時　同人

桑買に下男旦那と化けて行き　甲斐　一笑

口で飼ふ蠶はとかく出來そこれ　備後　天外

上手繰る絲の赤縄で結ぶ緣　羽前　枯葉

蠶時新聞さいも解かぬ帶　同人

取組んで不景氣投げる蠶絲界　羽前　柳月

人

眠らずに飼ふた蠶はよく眠り　甲斐　順風

地

當り蠶一時は嬶天下なり　甲斐　一笑

天

蠶病は金庫の錠も喰い破り　武藏　蠶友

選者吟

捨蠶は秘傳と教師口を拭き

蠶病と聞いて産婆が耳を聳て　金坊子

懸賞募集 俚謠 （第五回披露）

高橋鬼川選

儂よ柱よ我が日の本の蠶飼乙女の細い腕　茨城　鬼外

思ひ思ふて育てた蠶何所で命を棄てるやら　滋賀　靜葉

蠶親に貢ふた御召早く仕立て、着て見たい　甲斐　文月

青葉で結んで白湯で解けるなぜに蠶は二心　備後　信水

積る苦勞も一と月餘り解けて蠶の祝ひ酒　三河　桑の家

姿や信州絲繰娘ひいた此絲誰が召す　相模　綠葉

江戸のお方よ山家は夏も花が咲いたり鳥が啼く　甲斐　順風

骨身惜しまず蠶飼をするも嫁に行く日の下稽古　信濃　談語

夫婦なかよく育てた蠶出來た筈だよ二つ繭　熊本　松鶴

國の爲とて命にかへて絲吐く蠶は大和魂　同人

惚れて好かれて添ふたる中で育てた蠶の上結果　大隅　肝月

容色自慢の娘がひいた絲で買ふた一等賞　信濃　花鵑

緣を切られて飛ぶ風船は何所に落るか氣がもめる　羽前　清山

富士を崩して琵琶湖を埋めて桑の畑にして見たい　群馬　寸馬

聞くも嬉しい姫宮様も國の寶の蠶飼業　飛騨　風月

兎のやうでも心は神じや蟻殺すも金故に　宮城　本多

神か佛かお蠶様と拜む私は果報物　羽前　岩川

背桑若葉の茂みを分けて乙女桑摘む愛らしや　相模　春水

離れおたない蠶と蠶むくろ抱き合ふ二つ繭　三河　秋の家

瀧の飛沫が簾に飛んで辷り落ちるよ夏の月　岐阜　桑風

何の辛かろ御國の爲じや好いた同志で此蠶飼　同人

主と二人で蠶飼はしたが誰に引かさうか此繭を　京都　素亭

寢る目寢ないで育てる蠶一つ身の爲め國の爲め　越後　螢露庵

火事見たやうに連れ添ふならばたとへ火の中厭やせぬ　同人

五彩

見合と知らずに桑摘む それなら仕様もあつたもの　備後　天外

さてもみごとやあの川筋に 色も緣の桑畑　周防　愛蠶女

死んで名を出す蠶できへも 蠶きて四度の苦勞する　備後　喜男

植える蠶に座敷を取られ 愚痴も云ふまいこぼすまい　伊勢　茶々丸

障子開ければ氣も晴れ／＼と 桑園三里に夏の月　羽前　枯葉

人

謠ふ唄には節面白く 引出す絲には節がない　敦賀　咲女

地

田植しまふて手拭とれば 月に恥かし顔の泥　伊勢　茶々丸

天

お蠶のやすんだ今宵の隙に ちよいと出ましよか螢狩　信濃　陸蠶館主人

選者吟

雲の上まで其の名が通ふ 賤が伏家も蠶ゆゑ　鬼川

◎

女瀧男瀧の中裂く巖に 何所がよいとて咲く躑躅

懸賞募集 一と口噺 （第五回披露）

◎皮肉な子供　羽前　岩川

父『坊やお前は何をしてるの』子『これをしてます』父『これでは分らない、何々して居ると云ひなさい』子『アイ、何々して居ます』

◎煙管　飛騨　風月

甲『僕の云ふことは新らしい煙管のやうで、何時でもよく通るだらう』乙『それだから君の云ふことは何時でもつまらないのだ』

◎當り蠶の秘傳　羽前　馬公

養蠶家『先生、蠶が毎年當る傳授を聞かしてください』養蠶教師『蠶の好むやうに飼へば必ず當る』

◎敵になります　滋賀　蠶農夫子

子『お母さん坊は軍人になりたい』母『軍人は敵に殺されるからお止なさい』子

『それでは鬼になります』

◎ハイカラ　三河 赤穂

母『羽織一枚縫ふことも知らないで、それでお嫁にいけますか』娘『妾の理想の夫は年中洋服ですもの』

◎鳩山春子　備後 天外

甲『鳩山春子と云ふ人は頗る健康な體だらうな』乙『ナゼ』甲『運動が上手ださうだから』

◎稲荷の鳥居　岐阜 椋友

子供『お母さん、鳥居はなぜ赤いでしやう』母『あれはゆでたからです』子供『そんならお稲荷さんの鳥居もゆでたのね』

◎佛教信者　越後 五泉

甲『佛教を信ずる者は皆極樂へ行きますよ』乙『それなら坊主は皆極樂へ行くかね』

◎お嫁に行かぬ　丹後 好蠶

甲女『妾やお嫁に行かないのよ』乙女『それでは一生獨身生活なさるの』甲女『いいえ、婿を貰ふのよ』

◎天の川　羽前 可昇

子『山よりも上に川があるね』父『そんなものがない』子『だつて天の川が空にあります』

◎筍になりたい　同人

子『僕は筍になりたいね』父『馬鹿なことを云ふ奴ぢやナゼ』子『親勝りの筍と云ひますから』

◎蠶病　肥前 風來坊

生徒一匹の病蠶を持來り『先生是は何病ですか』教師『それは蠶病です』

◎藪醫者　武藏 響藤

子『お父さん妾の竹殿が病氣になつたから隣りのお醫者さんに賴みましようか』父『馬鹿を云ふものではない藪醫者ではないか』子『でも藪醫者と人が云ひますから』

讀者文藝懸賞募集

（原稿〆切毎月三十日 運來浸書）

俳句

▲選者　花の本花翁宗匠

▲課題　青簾 田植 鮓 水鶏 花菖蒲

▲懸賞　天(一人)會報一ヶ年分◎地(一人)會報半ヶ年分◎人(一人)會報三ヶ月分

▲規則　一題一句つヽ一人に付五句限り。用紙端書に限る。但宜上東京新宿北裏一二三番迄送らるべし。應募者は本會々員若くは會員外と記し住地の國郡町村番地姓名雅號共明記せらるべし。

狂句（柳川）

（原稿〆切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　蠶絲業に關係あるものならば何にてもよし

▲懸賞　天(一人)會報一ヶ年分◎地(一人)會報半ヶ年分◎人(一人)會報三ヶ月分

俚謠（都々逸）

（原稿〆切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　蠶絲業に關するものにて女工などに唄はしめても差支なきもの（但し卑猥なるものは沒書とす）

▲懸賞　天(一人)會報一ヶ年分◎地(一人)會報半ヶ年分◎人(一人)會報三ヶ月分

一と口噺

（原稿〆切毎月三十日限り）

▲選者　高橋鬼川先生

▲課題　何にてもよし（但し卑猥なるものは沒書とす）

▲懸賞　天(一人)會報一ヶ年分◎地(一人)會報半ヶ年分◎人(一人)會報三ヶ月分

注意（狂句、俗謠の應募者は用紙一枚に付き五句限り(一と口噺一人に付三ヶ限り)▲用紙は郵便はがきに限る▲應募者は本會々員若くは會員外と記し住地の國郡町村番地姓名雅號共明記し大日本蠶絲會文藝係宛にて送ること）

蠶海涓滴

△皇后陛下　去三日四ヶ原なる東京蠶業講習所に行啓あらせられ親覽約三時間の長きに亘り且優渥なる令旨を賜ふ洵に是蠶界未曾有の盛事恐懼何ぞ堪へん。

△本會總裁　伏見宮殿下亦去月廿日四ヶ原に御成あらせらる皇室の斯業に御軫念あらせらるゝ如此深し當業者奮勵以て聖旨に應ふる處なくして可ならん。

△明治廿三　年の歲計九千萬圓當時の帝室費三百萬圓爾後歲計年々増加し遂に今日六億圓を算するも帝室費は依然三百萬圓是桑國の恨事と島田沼南歎ず。

△醫界の泰　斗にして吾等が生命の親とも稱すべきコッホ博士來朝去十二日朝野の有志堵の如く横濱埠頭に立ち歡迎以て之を迎ふ博士の感や果して如何。

△露國議會　政府の新造艦計畫中戰闘艦建設を否決したりと伯林電報傳ふ眞僞未詳なるも或は事實ならん空く海底の藻屑とせんよりは寧ろ遣らぬが悧口。

△大博評議　員中百三名會去六日任命各方面に亙て普く各種の人物を網羅したり吾等の諸氏能く評議員の任務を竭さば或は以て好成績を擧ぐるを得んか。

△一月以降　貿易の逆調漸々たりしが五月に於て初て輸出超過の聲を聞く其額僅少なるも久晏物價低落の緣と相俟て所謂與咎の實皆たり喜ぶべきの現象。

△昨四十年　度に於て學位を授與せられたるもの法三十名醫二十三名藥八名工九名文四名理三名農四名林二名合計八十三名總て博士の御誕が出來さう也。

△例年全國　各地に於ける晩霜被害數百萬圓殊に信州の被害殊非常のもの防霜法の講究眞に急れ火急の問題而かも未だ何等の良法發見せられざるは憾に。

△文明國の　一大汚點也然れども幅者外山博士は動植物遺化の理生物遺傳の理法に依て病害蟲を發見せられたりと新紙は傳ふ果して眞ならば國家の慶事。

△繭生絲の　販賣及委托仲買業を營む目的にて五拾萬圓の資金を以て九州蠶絲信托會社設立せらるゝの計畫ありとは甚か好個の事業其實際ならんを望む。

△生絲の價　格は未だ恢復せられざるも賣行高は昨年に比して増加す市場沈靜の狀況を稱するは從業家の事市場は如此好況を示し居るとは萬朝子の言。

新刊紹介

最近日本蠶病論　農學博士 大森順造著

著者は日本蠶病研究者として之に從事せらるゝこと多年にして、我蠶業界に與へられたる功績亦尠からずであるが、去三十二年に公にせられた日本蠶病論は第五版まで重ねて久しく絶版であつたが、今回公にせられた本書は其六版とも稱すべきものである、が併し「蠶病學の研鑽は日に益進み諸種の疑問は漸次解決せられ新事實は續發見せられ、到底僅少の改竄補訂を施すも其意を滿たすこと能はざるが故に、別に新著として世に公にせんことを欲したり、即今回刊行したる最近日本蠶病論是なり」と、著者が冒頭の序文に物せられたるが如く、其體裁といひ、内容といひ全く別物と稱して可なりで博士が十有四年間の研究は勿論、苟も蠶病に關係せる記事は細大となく漏く引用網羅せられてあるから、斯學研究者の爲には好個の資料たること云ふ迄もなく、殊に斯界の大問題たる軟化病及膿病に關して、最後の斷案を下されてあるから、當業者一度本書を繙かば疑雲忽ち一掃するであらう。紙質タロース製紙質極上の美本菊版九百餘頁近來の大著である（正價五圓發行所東京市日本橋區箔屋町丸山舍）

春夏秋蠶飼用給桑原論　倉澤逐平著

本書は養蠶法中の最大要項たる、給桑其者に就て著者が多年の實驗を敍述せるものなり、第一編總論には生物と食物との關係蠶桑と蠶兒との關係を說き、第二編には蠶兒食慾論、第三編には給桑論、第四編給桑の調達、第五編結論を敍ぜ、更に附錄として給桑に關する諸試驗成績を載せたり、當業者一讀の價値ありと云ふべし（定價一圓發兌元東京市神田區美土代町三ノ一明文堂）

最新養蠶教科書　農學士 明石弘著

本書は甲種農學校の教科書に充てんが爲編纂せられたるものである、全編を總論生理病理養蠶栽桑の五編に剖ち成可文章の簡明を主とせるは教授者に斟酌の餘地を與へたもので、又說明に便せん爲數多の圖版を挿入せるは、殆んど著者が多年實驗の成果である、殊に初學者の無趣味にして困難とせる解剖は生理と共に說きて、其趣味を添へ理解し易からしめたるが如きは確かに一新機軸を開きたるものである（定價五拾錢發行所東京市日本橋區數寄屋町一番地三友書院）

養蠶實驗錄　全　松田謙治著

近者養蠶に關する著書雨後の筍子よりも夥しく、而かも其多くは糊と剪刀の細工にして、眞の著書なるもの尠きに至ては、心ある者の顰蹙する處であるが、本書菊版五十八頁の一小册子に過ぎざるも、翁が多年の實驗を敍述せるもの其の飼育法の適否及蠶勢の關係の如き、眞に一讀の價値あるものにして世の有り觸れたる

養蠶書と自ら其撰を異にするものがある（正價金壹拾錢大賣捌所兵庫縣養父郡八鹿村石田支店）

製絲の鑑 第二編第三編第四編　松下憲三朗著

本書の第一編は既に會々誌に於て紹介したるが、續て第二編原論と乾繭第三編機械と用水、第四編煮繭と繰絲の續發刊せられたり、著者の熱心に富める嚙んでくゝめるが如く平易に製絲の秘術を說き明かしあれば、如何なる素人も一讀の下直に製絲の道に入ることを得べし、其製絲に從事する者は勿論、製絲家ならざる人々も家庭內の讀物として備へ置かれて可ならん。

寄贈書目

愛媛縣農商工統計便覽		愛媛縣內務部
好良なる產繭組合收支狀態		農商務省農務局
地質改良に就ての所感		野口吉十郎
年中行事		蘆根軍治
富山縣蠶業史		富山縣蠶病豫防事務所
府縣聯合共進會審査復命書		農商務省官房博覽會
宮城縣主催第十回東北區實業大會報告		宮城縣農會
養蠶實驗錄		松田源治
蠶病豫防事務成績報告		栃木縣蠶病豫防事務所
明治四十一年蠶業統計		山形縣內務部
第十七回山形縣勸業年報		山形縣內務部
桑之栞		千葉縣內務部
全芽養蠶日誌		菅野宇兵衛
第四回事業報告書		實產社
明治四十年生絲檢査成績		石川縣生絲檢査所
桑試驗成績報告		山形縣立農學校
蠶桑改善法		富山支會
福島縣立蠶業學校報告		福島縣立蠶業學校
四十年蠶病豫防事務成績		宮城縣
蠶病豫防事務成績		山梨縣蠶病豫防事務所
氣象集誌	第四號	大日本氣象學會
藝備農報	第一五五號	廣島縣農會
北海道農會報	第八八―九號	北海道農會
染織時報	第二五八―九號	大日本織物協會
會報	第三〇號	長野縣蠶種同業組合
植物學雜誌	第二五六號	東京植物學會
武德誌	第三の四號	武德會
蠶桑農事報	第一七號	蠶桑農友會
工業雜誌	第三八六號	工業雜誌社
農科大學學術報告	第七の五號	農科大學
岡山縣蠶絲會報	第二號	岡山縣蠶絲會
愛蠶時報	第三の四號	愛蠶時報社
蠶業之光	第二號	蠶業之光社
田舍之實業	第一號	實業社
日本蠶友會報	第三六號	日本蠶絲會
蠶事報告	第一六號	京都蠶業講習所
通商彙纂	自一八至二九	外務省通商局
月報	第一三八―九號	横濱商業會議所
實業世界	第八號	三田商業研究會
大日本山林會報	第三〇五―六號	大日本山林會
農業教育	第八二―三號	農業教育研究會
斯民	第一一二號	報德會
工業化學雜誌	第一二二―三號	工業化學會
學士會月報	第二四二號	學士會
大日本農會報	第三二二―三號	大日本農會
大日本衛生會雜誌	第三〇〇―一號	大日本私立衛生會
農業世界	第三の五―六號	博文館
農事雜報	第一二〇―一號	農事雜報社
北越之蠶業	第七〇號	新潟支會
大農國	第二二二―三號	帝國農家一致協會
京都府農會報	第一八九―九〇號	京都府農會
埼玉農報	第三七―八號	埼玉農報社
新潟縣農會報	第五二―三號	新潟縣農會
蠶業新報	第一八一―二號	蠶業新報社
岐阜縣農會報	第二〇四號	岐阜縣農會
島根縣農會報	第一二〇―一號	島根縣農會
圖書月報	第六の七―八號	東京書籍商組合事務所
會報	第四―五號	帝國農家一致協會
動物學雜誌	第二三四―五號	東京動物學會
何鹿實業月報	第一一〇―二號	何鹿郡蠶業會
兵庫縣蠶業會報	第八六―七號	兵庫縣蠶業會
生絲日報	四月―五月分	原合名會社
中外商業新報	四月―五月分	商況社
關西之蠶業	第三六―七號	關西蠶業社
統計集誌	第三二五―六號	東京統計協會
山梨縣蠶桑時報	第三六―七號	山梨蠶友會
愛國婦人	第一五〇―一五三號	愛國婦人會
衣笠蠶友會報	第一九―二〇號	衣笠蠶友會
城丹蠶絲時報	第二八―九號	城丹蠶絲時報社
北海道蠶絲會報	第五二―三號	北海道蠶絲會
土佐蠶絲時報	第六七號	土佐蠶絲同志會
山口縣農會報	第五四―五號	山口縣農會
日本之家禽	第四―五號	日本家禽協會
實業之埼玉	第三の三―四號	實業之埼玉社
產業組合	第三〇號	大日本產業組合
扶桑	第六七―八號	扶桑館
福岡縣農會報	第一〇八―九號	福岡縣農會
千葉縣蠶絲時報	第一七號	千葉蠶絲時報社
青森公論	第六―九號	共進會
岩手縣農會報	第六三號	岩手縣農會
神田新報	第一八―一九號	神田新報社
農商務省商品陳列館報告	第八號	農商務省農務局

人事彙報

▲宮川助一氏　本會通常會員にして三重縣農事試驗場技師なる同氏は今回年俸千百圓下賜せられたり。

▲上野精之進氏　本會通常會員にして宮崎縣立農學校教諭なる同氏は今回十一級俸（當分六百五拾圓）を下賜せられたり。

▲生方五郎氏　本會靜岡支會幹事長にして靜岡縣技師なる同氏は今回高等官六等に陞敍せられたり。

▲町田治助氏　本會特別會員にして岐阜縣郡上郡農事講習所技師なる同氏は今回同郡立農事講習所長を命ぜられ年俸八百圓下賜せられたり。

▲池義信氏　本會通常會員にして福島縣立蠶業學校助教諭なる同氏は今回福島縣立蠶業學校教諭に任ぜられ十二級俸下賜せられたり。

▲加納隆氏　本會通常會員にして福岡縣農業教師なる同氏は今回六級上俸下賜せられたり。

▲針塚長太郎氏　本會學藝委員にして盛岡高等農林學校教授なる同氏は今回文部省視學官に任ぜられ三級俸を下賜せられたり。

▲川人兵次郎氏　本會通常會員なる同氏は今回德島縣農業技師に任ぜられ年俸六百圓下賜せられたり。

▲西村彌吉氏　本會通常會員なる同氏は今回愛媛縣農業技師に任ぜられ年俸六百圓下賜せられたり。

▲玉木波三郎氏　本會特別會員なる同氏は今回佐賀縣農業技師に任ぜられたり。

▲芝山直清氏　本會特別會員なる同氏は今回從五位に敍せられたり。

▲鶴見左吉雄氏　本會特別會員にして農商務省參事官なる同氏は今回正六位に敍せられたり。

▲中村雅次郎氏　本會學藝委員にして東京蠶業講習所技師なる同氏は今回從六位に敍せられたり。

▲明石弘氏　本會學藝委員にして東京蠶業講習所技師なる同氏は今回正七位に敍せられたり。

▲犬塚盛太郎氏　本會特別會員にして愛知縣技師なる同氏は今回正八位に敍せられたり。

▲增子德之助氏　本會特別會員にして長野縣技師なる同氏は今回高等官六等に陞敍せられたり。

▲東郷重清氏　本會埼玉支會兒玉委員部長にして埼玉縣兒玉郡長なる同氏は今回北海道廳河西支廳長に任ぜられ高等官五等に敍せられ五級俸を下賜せられたり。

▲松平正直氏　本會會頭なる松平男爵は今回日本大博覽會評議員を仰付られたり。

▲田中芳男氏　本會特別會員なる同氏は今回日本大博覽會評議員仰付られたり。

▲澁澤榮一氏　本會特別會員なる澁澤男爵は今回日本大博覽會評議員を仰付られたり。

▲酒匂常明氏　本會副會長なる同氏は今回日本大博覽會評議員を仰付られたり。

▲益田孝氏　本會特別會員なる同氏は今回日本大博覽會評議員を仰付られたり。

▲大谷嘉兵衛氏　本會特別會員なる同氏は今回日本大博覽會評議員を仰付られたり。

▲早川智寛氏　本會宮城支會副會長なる同氏は今回日本大博覽會評議員を仰付られたり。

▲渡瀬寅次郎氏　本會通常會員なる同氏は今回日本大博覽會評議員を仰付られたり。

▲町田菊次郎氏　本會特別會員なる同氏は今回日本大博覽會評議員を仰付られたり。

▲加藤正英氏　本會通常會員なる同氏は今回日本大博覽會評議員を仰付られたり。

TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIES.

(November 1908.)

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI EN DIVERSES INDUSTRIES.

(Novembre 1908.)

	Report.	Brought over.	Arrivé.	Arrived.	Vendu.	Sold.	Exporté.	Export.	Renvoyé.	Sent back	A reporter.	Brought forward.
		Picul.		Picul.		Picul.		Picul.		Picul.		Picul.
Filature. Filature.	10.219		5.083		(6.318)		—		565		8.458	
Zagori. Retsel.	1.698		275		910		—		68		984	
Kakeshi. Orikayashi.	462		95		214		—		39		205	
Autres. Other.	2		5		—		—		3		2	
Total.	12.400		5.388		7.451		7.514		675		9.649	
1907.	4.667		2.581		1.969		1.967		342		4.306	

養性廟直氣に一郎の願望する處となり町村制施行以來五たひ選まれて村長と為り能く地方自治の發達を圖りたる數官勤業土木衛生に注き尊金の設備に農事の改良に蠶桑の奬勵に松茸の栽培に道路の改修に其他精鋭の整理に罹災の救濟に勤儉貯蓄の方法に基本財産の增殖に皆悉く努むる等稱賞多き諸務整治衆民共に公局の事務に勤勉の功績著しなりと云て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其費に充て為す者なり

▲尾澤　金左衛門氏

本會特別會員たる金左衛門氏は受領に付き今回藍綬褒章を下賜せられ其賞記次の如し。

資性剛毅に父祖の功業を繼ぎて志を製絲に開し專心其業に精勤し家を興す數年間に資産を設け以て絲質の均一を謀り品質改良の途を開き尾郡組織を基礎として相繼に後るゝ者なき迄に至り其間數百の職工を使役し多額の賃銀を拂ひ以て貧困民に風撫せり工場を各地に增設し多額の賃銀を出し又は海外に博覽所業に物産を與ふること少からず海に實業に勤勉し衆民の模範たる者とす依て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰せらる

▲片倉　豊　太郎氏

本會特別會員たる同氏は受領に付き今回藍綬褒章を下賜せられ其賞記次の如し。

資性篤實に常に蠶種に注き明治十一年居村に機械製絲場を創設し同志なる同氏は功績表彰則に依り名譽の金百圓を受領せり其後益々其業に精勤し遠く歐米各國に輸入し其性質を明らかにし以て絲質の均一を謀り品質改良の途を開き尊ち力を改良に盡し進歩の程度に基き工場を各地に增設し多額の賃銀を出し又は海外に博覽所業に物産を與ふること少からず海に實業に勤勉し衆民の模範たる者とす依て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰せらる

▲織　田　利　三　郎氏

本會通常會員たる同氏は受領に付き今回藍綬褒章を下賜せられ其賞記次の如し。

資性溫厚風に心を農工の改良物産の增殖に注き以て地方の發達に盡し土性を相して試驗場を設け或は模範試驗所を設置し以て産業の增進に努め多方計畫一郷風俗頗良の今日に於て多額の産出を擴に至る其他慈善の改善に勉むる等其實業に盡瘁する三十餘年一日の如く海内の産業に興し産業奬勵の功績著しなりと云て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰せらる

▲阿　刀　田　義　潮氏

本會通常會員たる同氏は受領に付き今回藍綬褒章を下賜せられ其賞記次の如し。

資性溫厚風に心を農工の改良物産の增殖に注き以て地方の發達に盡し土性を相して試驗場を設け或は模範試驗所を設置し以て産業の增進に努め多方計畫一郷風俗頗良の今日に於て多額の産出を擴に至る其他慈善の改善に勉むる等其實業に盡瘁する三十餘年一日の如く海内の産業に興し産業奬勵の功績著しなりと云て明治十四年十二月七日勅定の藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰せらる

大日本蠶絲會報廣告料

	特等		並等	
	一頁	半頁	四分ノ一頁	一頁	半頁	四分ノ一頁
一回乃至二回	十五圓	八圓五十錢	五圓	十二圓	七圓	四圓
三回乃至六回（同一付）	十二圓	七圓	四圓	十圓	六圓	三圓五十錢
七回以上（同一付）	十圓	六圓	三圓五十錢	八圓	五圓	三圓

四分ノ一頁以下ハ一行ニ付金參十錢ヲ申受ク

●會員ハ右料金ノ二割引トス●特等ハ四分ノ一頁未滿ハ謝絶ス●料金ハ前金ニアラサレハ掲載セス●一頁ハ一行二十七字詰七十二行トス

●本報定價　一冊金拾五錢　一ヶ年分前金壹圓七拾錢

明治四十一年六月二十日印刷發行

禁轉載

編輯兼發行人　東京市神田區錦町三丁目十八番地　小池市松

印刷人　東京市神田區與土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區與土代町二丁目一番地　三秀舍活版所

發行所　東京市神田區錦町三丁目十八番地　大日本蠶絲會（電話本局一四七三番）

MARCHÉ DES SOIES.

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

Notre marché de soie qui était plongé dans la profonde accalmie depuis l'Octobre de l'année dernière vient d'être amélioré peu à peu depuis le printemps de cette année grâce à l'amélioration du monde financier de l'Europe et de l'Amérique. Au mois de Mai surtout, les ventes ont été plus nombreuses que jamais; les stocks qui étaient jusqu'alors plus de 40,000 balles se sont réduits à un peu plus de 16,300 balles à la fin du mois. Mais, quant aux prix, au lieu de progresser, ils ont présenté une tendance à la baisse. La situation de ce mois a été toute contraire avec celle du mois correspondant de l'année dernière: pendant les premiers jours du mois de Mai de l'année dernière, les prix de Shinshu extra No 1 qui étaient d'abord de Yen 1,260, ont progressé graduellement, tandis que les prix de cette année qui s'étaient améliorés à peine à yen 840, ont baissé graduellement au fur et à mesure de l'augmentation des transactions et ont fini enfin par atteindre les bas prix de Yen 820.

Voici d'ailleurs les tableaux indiquant le mouvement de la soie durant le mois de Mai dernier.

THE YOKOHAMA RAWSILK MARKET.

Since October last year, our rawsilk trade has been in a profound stagnancy. But coming to thespring this year, it came gradually to recover its normal condition, thanks to the favourable condition of the financial world both of Europe and America. Especially in the month of May, we saw the greatest amount of transactions conducted that has ever been experienced in recent years. The quantity of the merchandize lying idle on the market of Yokohama, which was once declared to amount to more than 40,000 bales, was happily decreased to about 16,300 bales at the end of the month of May. However, the prices did not make correspondingly any progress; on the contrary, they showed even declining symptoms. The situation of the market in the month under review was entirely different from what we had experienced in the corresponding period of last year. During the first part of this month of last year, Shinshu Extra No. 1 commanded the price of Y. 1,260, and which, subsequently even made gradual advance. But this year the situation was quite different: the said staple, after once making a weak advance by attaining to Y. 840, ended in gradually collapsing to the stage of Y. 820, *yen* passes with the augmentation of transactions.

The following table shows the movements of silk during the relative month;—

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES RÉPARTI PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours. Days.	Soie. Silk. Arrivée. Arrived.	Vendue. Sold.	Renvoyée Sent back.	Exportée. Exported.	Maximum du prix. Highest prices. Noms des filateurs. Names of filatures.	Prix. Prices.
	Piculs.	*Piculs.*	*Piculs.*	*Piculs.*		*Yen*
1	283	254	29	—	Tenryusha.	920
2	113	173	96	932	Wataraiseishijô.	900
3	—	—	—	—	——	——
4	416	420	87	—	Masagiseishijô.	940
5	182	319	24	—	Hamamatsuseishijô.	930
6	152	303	12	705	Aichikwan.	930
7	170	305	77	—	Sôshinsha.	910
8	242	328	33	—	Nanaeriseishijô.	882
9	207	215	16	402	Kôseisha.	910
10	—	—	—	—	——	920
11	336	153	48	—	Takiyamaseishijô.	917½
12	99	181	4	—	Yajimagumi.	917½
13	159	183	5	496	Koseisha.	917½
14	212	79	17	—	Usuisha.	900
15	207	25	11	1.149	——	——
16	223	43	39	392	Reisuisha.	870
17	—	—	—	—	——	——
18	235	168	4	—	Yajimagumi.	920
19	285	246	3	—	Kimposha.	910
20	119	148	21	707	Kikawaseishijô.	880
21	225	404	36	—	Kubotakwan.	885
22	169	407	6	—	Yoneyaseishijô.	897½
23	247	331	7	—	Mikawaseishijô.	910
24	—	—	—	—	——	880
25	231	491	14	—	Tajimakyôdô.	880
26	173	377	11	—	Niwaseishijô.	920
27	146	441	15	1.412	Shiraishiseishijô.	897½
28	176	330	16	—	Tôkôsha.	860
29	125	457	43	—	Shimonitasha.	900
30	219	477	6	733	Tafimakyôdô.	875
31	—	—	—	—	——	——
Total	5.385	7.470	680	744	——	——

1 *yen* want environ fr. 2.50. 1 Pical = 60 kilg environ.

Exportation des soies grèges du Japon du 1er Juillet 1907 au 31 Mai 1908

	Exportateurs	Europe	Amérique	Total
		Balles	Balles	Balles
1	Mitsui Bussan Kaisha	35	23.821	23.856
2	Kiito Gomei Kaisha	632	16.416	17.048
3	Siber, Wolff & Co.	5.580	2.640	8.220
4	Sulzer Rudolph & Co.	6.771	771	7.548
5	Vivanti Bros.	—	5.067	5.067
6	Hara Yushutsu ten	2.319	1.820	4.139
7	F. Strähler & Co.	807	3.298	4.105
8	Jardine, Matheson & Co.	1.591	1.832	3.423
9	Nabholy & Co.	2.597	101	2.698
10	Sieber & Co.	2.568	26	2.594
11	Jewett & Bent	1.273	1.074	2.347
12	Ulysse Pita & Co.	1.360	860	2.220
13	Doshin Kaisha	30	1.864	1.894
14	China, Japan Trading Co.	—	1.786	1.786
15	Varenne & Co.	631	768	1.399
16	Otto Streuli	1.333	30	1.363
17	H. Bernardin & Co.	930	405	1,335
18	Boyer, Mazet, Guitliée & Co.	1.111	210	1.321
19	Bavier & Co.	203	1.111	1.314
20	L. Mottet	610	612	1.222
21	Cornes & Co.	288	477	765
22	Carlowitz & Co.	639	45	684
23	P. Dourille	371	—	371
24	Montel & Co.	141	60	201
25	C. Eymard & Co.	165	—	165
26	R. Schmid-sharff & Co.	—	105	105
27	J. Brett & Co.	—	20	20
28	American Trading Co.	—	10	10
	Total	31 985	65.235	97.220

1 balle = environ 60 Kil.

Statisque des soies de Kakeda Examinées et classifieés par la société coopérative "Kiodo-Nizukurisho" à Fukushima

Années	Kimpai	hime-daruma	1ère tête cheval	2me tête cheval	3me tête cheval	Marque de coq	divers	Total
	caisses	caisses	caisses	caisses	caisses	caisses	caisses	caisses
1889	„	137	434	436	324	92	149	1.572
1890	„	341	944	712	438	175	176	2.786
1891	„	311	1.227	888	548	191	252	3.417
1892	„	614	1.345	1.062	507	132	413	4.073
1893	194	761	1.671	1.032	355	73	46	4.132
1894	204	911	1.701	941	223	64	167	4.211
1895	183	1.158	2.292	1.245	369	55	40	5.342
1896	266	915	1.693	935	254	36	5	4.104
1897	„	1.220	2.494	1.936	754	92	96	6.592
1898	88	1.003	1.800	1.015	325	77	13	4.321
1899	375	1.512	2.260	1.421	533	152	109	6.362
1900	354	1.276	1.644	1.245	421	102	214	5.256
1901	746	1.842	2.369	2.006	702	188	221	8.074
1902	882	1.804	2.649	2.168	784	175	223	8.685
1903	883½	1.602½	2.071	1.377	440	101	115	6.590
1904	1.189	2.060	4.614	4.444	2.266½	795½	803½	16.172½
1905	250	1.319	1.895	1.331	593	223	320	5.931
1906	482	1.862	2.331	2.237	1.098	413	588	9.011
1907	788	1.908	2.566	2.689	1.262	388	1.210	10.811

Stocks, ventes et arrivages à Yokohama

des soies grèges

du 1er Juin 1907 au 31 Mai 1908

	1908 caisses	1907 caisses
Arrivages du 1er Juin au 31 Mai	208.872	185.750
Total	214.164	88.077
Soies vendues du 1er Juin au 31 Mai	197.537	182.785
Stocks au 31 Mai	16.627	5.292
Ces stocks se répartissent comme suit :		
Filatures	14.509	5.150
Zaguri	1.749	116
Kakeda	365	11
Divers	4	15

1 caisse = environ 33 Kil.